
ゲームの世界で第二の人生！？

シェイフォン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームの世界で第二の人生!?

【Nコード】

N4709W

【作者名】

シェイフォン

【あらすじ】

目が覚めると俺はゲームに良く似た世界にいた。

それだけなら別に構わないが、薄汚い路地裏で寝転んでいた浮浪児からスタートだなんてどんな上級者プレイだ？

まあ、良いだろう。

おれはこのゲームをかなりやり込んでいるからこの程度で心が折れることはない。

さてと、ログアウト出来ないのは放っておいてまずは生活できるほどの環境ぐらいいは整えるか。

人物紹介（前書き）

これからどんどん加筆していく予定です。

書き込む順は私の気まぐれですが、主要キャラは全員書き込むのでご安心を。

人物紹介

ユウキⅡカザクラ

本編の主人公。技術チート。

突然訳も分からずゲームとそっくりな世界に飛ばされたにもかかわらず慌てなかった。

これは本人は夢だと考えていることが起因している。

そのため己の行動に対する責任というのが曖昧で、キツカ達浮浪児と同居するなど通常では考えられない行動を取る。

ベアトリクスⅡSⅡシマール

シマール国王女。

銀色の髪と透けそうなほど色素の薄い肌から薄幸気な外見だが、中身は悪意で構成されている。

キツカ曰く、刹那的かつ破滅的、そして享乐的なのに目が離せない怪しい魅力を持っている。

気に入った人間が怒り、悲しんで絶望する様子を眺めることが何よりの楽しみであり、そのための策謀を巡らすことに労力を惜しまない。

反面それ以外には己のことさえも興味を持たず

幽閉されていた事実に対しても「王女として振る舞う必要が無くなって良かった」程度にしか考えていなかった。

エルファⅡララフル

主人公のメイド

鮮やかな緑色の髪と白磁の肌、そして顔のほりが深いので人形のよきな印象を与える。

主人公に対しては結構厳しく、辛辣な言動を行うことが多々ある。その実力は未知数でレンジャー志望のアイラを返り討ちにし、さら

に反省と考察を丁寧に指導できるほどの技能を持っている。

サラリキュリアス

主人公を師匠と呼ぶ鍛冶屋の娘。

主人公が作成した武器に感銘を受けて自ら弟子入りを願った少女。

くすんだレンガ色の髪や同年代と比べてやや長身で筋肉質なことから年上だと見られる場合が多い。

本人はとても優しく弱い少女なので、両親はサラがやっていけるかどうか心配していた。

無一文から始まる（前書き）

始めまして、シェイフォンです。

経験を積んだ主人公というチートな能力を使って襲いかかる不合理から必死に抗おうとします。

剣術から裁縫まで全てMAXレベルにまで上げた経験のある主人公がどのようなセカンドライフを歩むのか。

それを楽しんでいただければ幸いです。

無一文から始まる

気が付くと俺は子供になって薄汚い路地で倒れていた。
いや、冗談じゃないよ？

一応自己紹介しておこう

俺の名は火桜優喜。フルダイブ型MMORPGにどっぷりハマった高校二年生だ。

一応学校は通っている。ゲームが大好きだが平均点はクリアしている。

本音を言えば学校を辞めてずっとゲームをしたいのだが、それをする確実に家を追い出される。

比喻じゃない、マジ話だ。

何せ内の親はやると言えば必ずやるタイプ。

どれだけ理不尽な約束でも絶対に履行するのだ。

……ヘタレと嘲っても構わない。

俺も自覚しているから。

閑話休題

俺の時代にはフルダイブ出来る機械がある。

ん？ それは何だったか？

それはヘルメット状の形をしたもので、脳からの電気信号を受け取り、そして逆に変換した信号を流すことによってあたかも現実が存在しているよう錯覚させる機械だ。

洗脳されそうで怖いと感じるだろうが、正直俺達にはこれが無いとまともに授業についていくことが出来ない。

何せ高校二年の授業で不確定性原理を応用した問題を出されるんだぜ。

教科書だけで解けるか。

機械に頼らないと出来るわけがない。

そして俺は文系だ。ついでに言えば理系はもっと恐ろしいぞ。

数字の羅列を見ただけで何を意味しているのか理解できるんだ。

スパイ養成課か、と思ったよ。

まあ、その機械のおかげで俺達は限りなく全能に近づいているがな。

普通の俺でさえ過去の名医と同程度の執刀が出来る。

また話が逸れた、すまん。

とにかく、俺はそのフルダイブ機械を使ってMMORPGをやっていたわけだ。

まあ、やっていることと言えば、パーティを組んで魔物を討伐するのではなく、ひたすらにアイテムを作ってそれを売り捌いていたわけだけだな。

ダンジョンにはレア素材を探すために潜る程度だったし。

そのゲームはユーカリア大陸物語。

各プレイヤーは望みの職業になって冒険者になったり国を興したりと色々と自由度の高いゲームだ。

ここからが本題だ。

俺はいつもの通り学校へ行き、いつもの通り帰宅していつもの通りゲームを起動させた。

普通なら俺は拠点としている工業都市ジグサルから始まるはずだった。俺は大富豪で、その都市に対して影響力がある。顔もイケメンで背の高いハンサムなキャラクターだったはずなのに、俺は気が付くとどこか訳の分からない街の裏側で倒れていた。

さあ、どうということだ？

眼が覚めた俺はまず始めにウインドウを開いて見た。

ウインドウに表示されるのは名前とステータス、持ち物や装備の他にゲームを終わらせるログアウトがあるはずなのだが。

「……ない」

その欄は空白になっており、目をこすっても変化が無かった。どうやら不本意なバグが起こったのだと考える。

「仕方ない、しばらくここで生きるか」

喚いたり叫んだりしても意味は無い。それならば一度初心に帰ったつもりで始めからプレイしてみようと決めた。

「まずは何を持っているのか」

俺はもう一度ウインドウを呼び出して己の状態を確認する。

名前…	ユウキルカザクラ
レベル…	一
装備…	武器 なし
防具	ボロの服
頭	なし
足	擦り切れた靴
装飾品	なし
持ち物…	なし
称号…	浮浪児
お金	〇G
ステータス	剣 一
大剣	一
魔法	一
槍	一
斧	一

採取	一
弓矢	一
農耕	一
料理	一
鍛冶	一
調合	一
裁縫	一

「……何だこれは？」

その惨状を見て愕然とする。

良いところが一つも無い。普通ならお金も三〇〇〇Gぐらいはあり、ステータスも幾らかは自由に設定できるはずだ。

これだとボーナスポイントを使わず、さらに所持金を全てどぶに捨てた状態だ。

そして、それ以上に驚いたのは。

「この容姿は何なんだよ」

見た感じ五年前の俺である。年齢は一二歳前後と言ったところか。

「まあ、上級者の俺にはちょうど良いかな」

初心者なら間違いなく匙を投げているが、生憎と俺はこのゲームをやり込んでいるマニア。だからこれくらいのハンデなど物の数ではない。

「とりあえず最初の目標は一軒家を持つことだな」

家さえ持つことが出来れば行動範囲がグッと広まる。薬を大量に調合出来たり鍛冶が出来たりとメリットは計り知れない……まあ、月々に税を納めなければならぬ欠点があるがそれは仕方ないだろう。

「さてと、じゃあ始めますか」

俺はそう呟いた。

しかし、俺はこの時、これから先に起こることなど想像すらでき

なかった。

手頃な空き地に移動した俺は簡易な調合台を作成する。

「まずはポーションの調合から」

ポーションとはHPを回復する薬の中で最も安価で親しみやすい類のだ。値段は一個五十Gと安い、材料となる草はそこら辺に生えているので原価はほぼ〇。まさに初期に作る物としては打ってつけだ。

「そういえば序盤の頃もこうしてポーションを調合していたよな」
何世代前のゲームとは違って材料を揃えてボタンを押せば完成という代物ではない。そして、このユーカーリア大陸物語というゲームはフルダイブ機能を駆使してリアルを極限にまで追求した結果、現実と同じように調合の匙加減で成否が分かれるのだ。

まさしくリアル志向。

現実と何一つ変わらない。

ゲーム製作者に殺意を覚えるほどリアルだ。

「確かポーションの調合法は……」

俺は頭の中からポーションの調合法について引っ張り出す。

ああそうだ、確かああいう作り方だった気がする。

捨ててあった竈と槓を拾ってお湯を炊く。

沸騰するまでの間に材料の草をすり潰しておこう。

「……子供だから力がない」

普段ならシャシャシャとやってしまいう作業が渾身の力を込めて行わなければならなくなっている。だからいつもの倍の時間と労力を費やしてしまった。

「さてと、次はこれらの材料を手順通りに放り込んで混ぜると」

まずアカイロ草をすり潰したのを加えて混ぜ、色が淡くなってきたらアオイロ草を加える。ここから激しくかき混ぜて完全な薄紫にした後キイロ草を加えて今度はゆっくり混ぜて完成。

「まあ、上出来かな」

ポーションを調合しているうちに体が思い出してきた。俺の経験から言うところには良い部類に入るだろう。

確認のため出来たポーションを少し飲んでみる。いつも俺が作っている上質なポーションと比べれば劣るものの、市販品よりかは味も効果も高いと判断。

「さすがは俺、弘法筆を選ばずとはよく言ったものだ」
うん、満足。

そして俺はそのポーションを持って薬売りの店に行く。ここは様々な種類の薬を取り扱っており、その中にポーションが含まれている。そして俺はその店の番人をしているお姉さんに声を掛けた。

「こんにちは、おねいちゃん」

ニツコリと、キッズスマイル全開で話しかける俺……気持ち悪い。
「あら、ボク。どうしたの？ お使い？」

まあ、そうだろうな。俺もお姉さんの立場ならそう判断するだろう。しかし、俺はお使いでは無い、営業をしに来たのだ。

「おねいちゃん、このポーションをどう思う？」

そう言っただけでガラス瓶に入ったポーションを見せる俺。

「あら、それは……」

お姉さんの瞳に真剣見が宿る。やはりそこはプロなのだなあと実感した。

光に透かしたり、振ってみたり味を確かめた後にお姉さんはホウッ后感嘆の吐息を洩らす。

「ボク、これは凄いわよ。少なくともこの街にいる調合師じゃあ一個一個丹念に作ってもこのレベルは作れない。一体どこの調合師が作ったの？」

そう聞いたので俺はにこやかに自分を指差す。

「え？ ボクが作ったの？」

「うん、そうだよ。なら目の前で実演してあげようか」

お姉さんが頷いたのを見た俺は予め用意してあった原料を取り出す。

「それってそこら辺に生えている雑草じゃないの。もっと質の良い草を使用しないと飲めたものじゃないわよ」

忠告してくれるは有り難かったけど、俺は首を振った。

薬売りの店の奥には調合台が備え付けている。やはりこのお姉さんも調合師の端くれなのだろう。

「じゃあ、作るからよく見ておいてね」

そう宣言して俺はポーションを作り始めた。

昨日と手順は似ているが微妙に違う。今回はアカイロ草と一緒にアオイロ草を加えたり、薄紫からさらに透明になり始めた所でキイロ草を追加したりしていた。

お姉さんの言う通りに、これらの草は生えているのよりも栽培した方が手順の変更がなくて楽だが、その分お金がかかる。

と、言っても一草三、四Gなのだが、それでも今の俺にその出費はきつかった。

どうせ俺はこれ以上の難易度を誇るエリクサーを何度も調合しているし。

あれはきつかった。ほんの少しでも力加減を間違えると失敗。しかも嫌らしいのが、エリクサーは失敗した時点には現れず、完成してからその失敗に気付く点だ。

あれで何人ものプレイヤーがエリクサーの調合を諦めたか。

「はい、完成したよ」

そう昔の思い出に想いを馳せている内にポーションが完成したようだ。それをコップですくってお姉さんの前へ持っていく。

お姉さんは目をまじまじと見開いた後、それを口に含んだ。

「素晴らしいわ」

しばらく咀嚼した後、そう吐息を洩らすお姉さん。

「これはすごいわ。私の人生の中でもこれほどのポジションにお目にかかったことはない、これなら五十Gと言わず、百Gでも売れるわ」

早口に捲し立てるお姉さん。それを見た俺は手応えを感じて切り出した。

「ねえ、おねいちゃん。提案だけど、このポジションをここで売ってみたい？」

博打よりも安定的に収入を得られるのを優先する。確かに露天商は利益が相当出る代わりに、ならず者による強奪が考えられるし、また売り上げ代をいくら取られる可能性がある。今の時点で闇の者と関わるのは避けた方が良く、今後の活動に大きな支障が出る。

「ええ、いいわ。むしろこちらからお願いしたいくらい。ところでボクの名前はなんていうの？」

「ユウキカザクラだよ。おねいちゃんの名前は？」

「私の名はティータエルマライよ。これからよろしくね」

交渉の結果、俺はポジション一つにつき三十Gの利益が出ることになった。もちろん、この俺の正体を隠すというのが条件付きで。「とりあえず今日宿に泊まる分のGは確保できてよかった」

ポジション二個で六十G。今回はおまけとして二百G余分にくれた。

よし、これなら今日は宿に泊まれるな。

俺は人知れず安堵した。

今日の収穫

収入元を確保できた。

無一文から始まる（後書き）

フルダイブ機能という設定について説明不足でしたので修正しました。

俺は仲間を得た

合計して二百六十G。百万G以上持っていた俺にはこの金額が物足りなく感じるがまあ良いだろう。

何せ全くの無一文からこれだけのGを得たんだ。

さらにこれからポジションを売ることによって安定的な収入を得ることが出来る。

「いやいや、お金のありがたさを感じるねえ」

俺は十二歳の少年とは思えないセリフを吐いた。

クルルルル

「お？」

宿屋に向かっていると突然俺の腹から鳴った。

「ん？ ユーカリア大陸物語に腹が減るなんてことはあったっけ？」
酒場などで食べ物を食べることはあるが、必ず食う必要はなかったはずだ。

ぐーっ

「……とりあえずは腹ごしらえだな」

腹の虫には勝てない。

俺は腹が減る、減らないについての考察は後回しにして近くのパン屋へ向かった。

「毎度ありがとうございます。お釣りは五(S)シルバーと二(B)ブロンズです」

適当なパンを見つくりつつ俺は代金を払った。

そして手元に残る銀の硬貨と銅の硬貨。

この世界の通貨は一Gで一〇S。そして一Sで一〇Bとなっている。

まあ、食料品や安物の素材の単価に付けられるSやBなんて使う

ことは最近だと滅多にないから忘れていた。
何せ俺がGを使うと言えば何千G単位だから。

「さてと、食べるか」

俺は近くのベンチに腰を下ろし、ついでに買った飲み物もすぐ横に行く。

出来立てらしくパンはまだ熱い。

ふわふわとしている。

「さてと、いただきますー……」

俺が大口を開けてかぶりつこうとした瞬間目の前の少女と目があった。

「……」

少女は何も言わないが、目はしっかりと訴えている。パンをくれと。

年代は俺と同じぐらいだろう。

服装は俺と同じボロの服を着て金色の髪はぼさぼさ、顔も薄汚れている。

元は良いのに台無しだと感じる。

見た感じ小動物という印象を受けた。

「……すい」

試しにパンを右から左へ移動させると少女の目もそれに続く。グルグルと回転させたら同じように少女の目も回転した。

「きゅー」

どうやらやりすぎて目を回してしまったらしい。

俺は調子に乗ってしまったと反省した。

「悪かった。ほら、これをやるよ」

お詫びに俺は手に持ったパンを差し出す。幸いにもまだ口を付けていないからセーフなはずだ。

「……くれるの？」

途端に少女の目が輝き出す。

本当に素直だなと感心しながら俺は頷いた。

「……ありがと」

「って、おい!？」

少女は差し出したパンでなく、俺の隣にあったパンの袋を掴んで一目散に駆け出して行く。

「ちょっと待て! ドロボー!」

俺は叫ぶがもう遅い。すでに少女の姿は見えなくなっていた。

「はあ、相手がNPCとは言え腹が立つな」

俺は毒づきながらもまたパン屋に赴き、同じパンを注文した。

店員に不思議がられたが、俺が少年口調で事情を説明するとパン屋の店員はクスクス笑い始めた……値段を安くするとかちよつとはサービスしてくれよ。

そして俺はまた同じベンチに座った。

キョロキョロと周りを見渡し、また同じアクシデントが起きないか確認する。

前方良し、左右良しそして前方良し。

俺はパンを手を持った。

そして食べようとしたその時。

「本当に申し訳ありません!」

後方から突然大きな声で謝罪させられて俺は引っくり返ってしまった。

俺の目の前には四人の少年少女がいる。女子三、男子一の比だ。しかもその女子の内の一人は俺からパンの袋を奪っていった無口女だった。

「ほら、謝りなさい!」

「……ん」

そのリーダーらしき女の子に小突かれて先程の無口女が頭を下げる。

リーダーらしき女の子は凜としていて口調もはきはきとしている。薄汚れているが、髪を洗えば燃えるような赤毛を見せるだろうと想像した。

俺は手を振りながら。

「いや、もう良いよ」

と、答えた。

「盗みを働き、本当に申し訳ありません。ユキは本当に良い子なんです、感情表現が下手ですけどそれは生まれつきなんです」

無口少女はユキという名前なのか。

「申し遅れました。私はキツカ、後ろにいる切れ目がアイラそしてなよなよしている奴がクロスです」

「よろしく願います」

「よ、よろしく」

同時に頭を下げるアイラとクロス。アイラの方は髪が藍色であることも相まって冷たく、鋭く切れるような印象を与えそしてクロスの方は俺と同じ黒い髪と瞳から真面目で実直なイメージがある。

「何度も言ったように僕はもう怒っていないから。だからもう消えてもいいよ」

何度も言っているのだが四人組の少年少女はこの場から去ろうとしない。そして謝り続けている。

「……ああ、そういうことか」

再三言っても謝り続けるのを見て俺は得心した。

彼らは単に謝罪しに来たのではない。それ以上のものをせびりに来たのだ。

「これで良いか？」

俺は観念して財布から一〇G硬貨を取り出してキツカという少女に渡す。

「き、金貨だ」

「……きれー」

クロスとユキが一〇Gの光具合を見て感嘆のため息を漏らす。

「ねえ、ここでやめちゃう？」

「そうですね……」

そしてキッカも動揺して後ろのアイラに相談を始める。

「やれやれ、いい勉強になったな」

俺はため息を吐いてその場を後にしようとした。これ以上関わっても仕方ない。

「お待ち下さい」

が、少女に似つかわしくない氷の様な冷たい声音が俺を引き止める。

「ええと、確かアイラだっけ？」

俺が振り向いて尋ねるとアイラはコクリと頷いた。

「僕はもう話すことはないのだけど」

俺は声音を低くして問う。これで俺が苛立っていることが相手に伝わるだろう。

「あ、アイラ、もう止めようよ」

「アイラさん、ストップストップ」

「……怖い」

事実、後ろの三人も怯えているようだ。

しかし、アイラは意にも介さず言葉を紡ぎ始めた。

「私達を買ってくれませんか？」

「は？」

突然の申し出に俺は呆氣に取られる。

「アイラ！？ 何を言ってるの？」

「そ、そうですよ。いきなり何を」

「……おー」

後ろが困惑しているのが伝わってくる。

「あなたは私達と同じ浮浪児の格好をしていますますが中身は全く違う、一人で自立できる能力と自信を持っています。あなたは必ず瞬く間にこの最底辺から抜け出すでしょう」

「ほう……」

俺は感嘆のため息を漏らす。

アイラの言う通り俺は違う。薬の調合も出来るし鑑定の目聞きも出来る。さらに鍛冶も出来るため、あっという間に駆け上がるだろう……チートだし。

「NPCにしては洒落た誘い文句だな」

「NPC？」

アイラが首を傾げるが俺は気にしない。

「まあ、面白そうだから仲間にしてみるか」

どうせこのデータはバグであり、エラーから復旧すれば消えてしまふ運命にある世界。

それなら付き合ってやろう。

俺は彼らをもう一度まじまじと見つめる。

「どうですか？」

目の前のアイラは間違いなく抜け目がないだろう。ユキがパンを持ってきたところからここまで持ってくるのは並大抵のことではない。

キツカは決断力というか思い切りが良い。俺に声を掛ける時もそうだが、彼女は竹を割った様な潔さがある。

クロスは大柄な体格だから力もあるだろう。これなら暴漢に襲われても大丈夫かもしれない。

ユキは確実に何かを持っている。ユキがいなければ俺達は出会うことすらなかっただろう。

「よし、ついてこい」

「え？　つまり受け入れてくれるのですか」

確認するようにアイラが尋ねると俺は苦笑しながら。

「その通り、だから俺について来てくれ」

俺は仲間を得た（後書き）

2011年9月13日に一部改編しました。

紺屋の白袴

「どこへ行くのですか？」

「まあ、ついてくれば分かる」

俺は疑問を口にするアイラにそっけなく答える。

「急に乱暴になりましたね」

「否定はしないな」

猫を被るのは疲れるんだよ。

確かここら辺りに文房具屋があったはずだ。薬屋から宿屋へ向かう途中で見た気がする。

「ああ、あった」

お目当ての店を見つけた俺は文房具屋へ入って羊皮紙とインクとペンを購入した。

「さて、洋服屋へ行くか」

「……買ってくれるの？」

目をキラキラさせるユキには申し訳ないが、さすがに五人分の服を購入できるだけのGは無い。だから俺は首を振る。

「それはまたいつか今度だな」

不満顔を隠そうとしないユキに苦笑しながら俺は洋服屋へと歩を進めた。

「ここはお前らが来る所じゃない！ 帰れ帰れ！」

案の定、店員に入ることを断られる。

まあ、そうだろうな。

浮浪児の集団など洋服屋に縁など無いからな。あったとしても万引きか。

「はい、これ」

俺は店員に断られるのを想定済みだったので動揺なく一〇Gを店

員に握らせる。

「え？」

突然の出来事に驚いたものの、店員は得心が言ったように後ろへと下がった。

「さあ、入るぞ」

後ろで所在なさげにうろうろしていた四人に俺はそう呼びかけた。

「気に入った服があれば俺に見せてくれ。ただし、絹を使っている服は駄目だ」

変な指示だと思ったのだろう、代表してキツカが尋ねる。

「どういうこと？」

「レベル上絹素材で服を作成するのは無理だからな」

木綿や麻、布は今の俺でも作れるが、絹になるとレベルが二ケタ必要だ。

「もしかしてあんた、服を作れるの？」

「ああ、それが何か」

店で装備を買うのは中級者まで。上級者になると装備は全て自作になる。

何せ一人一人のプレイヤーに個性が出るため店のものでは対応できなくなるのだ。

俺も最終的にはドラゴンアーマーなどを普通に作っていた。

「……どうした？」

ユキを除いた全員がポカンとした表情で俺を見つめる。

NPCが戦闘以外で驚くことなんてあったっけ？

俺が内心で首を捻っている間に四人が集まってコソコソ話合っていた。

「ちよっとアイラ、私達ってすごい人を見つけたんじゃないの？」

「ええ、私もここまでとは思いませんでした」

「夢なのかもしれないよ」

「……それなら殴ってあげる」

興奮しているのか全然内緒話になっていない。

俺はため息をついて先を促した。

「おーい、早く決めてくれ」

洋服屋から出た俺達は布屋へと向かう。

上質な布は四桁Gもするが、生憎と今の俺達には用が無い。あるのは値段がB単位の布だ。

「ええと、緑色と青、そして赤色の麻と黒と白と黄色の綿だな」

羊皮紙に書いた字を眺めながら俺は注文する。

お金を払って商品を受け取った。

「荷物持ちは任せて」

後ろの方で控えていたクロスが俺の代わりに受け取る。四人分の布だから結構重いはずだが、クロスは顔色一つ変えなかった。

「力が合って羨ましいな」

ポーション一つ作るにもしんどい俺がそう漏らすとクロスは困ったようにはにかんだ。

その後には雑貨屋へ行って糸と針とボタンを購入した。

「一人一泊二十Gです」

「分かった」

俺は領いて五人分の代金を支払った。

俺達がいる場所は宿泊街の一角にある宿屋だ。

本来なら薬屋のお姉さんが勧めた宿屋に入る予定だったのだが、出費が増えたのでお金が足りなくなった。

困っていた俺にここら辺の地理に詳しいキツカがいい宿があると助言して今、ここにいる。

「悪くはないな」

キツカ推薦の宿屋に入った第一印象がそれだった。

『マミエルの夢』という名の宿屋で、一階が酒場そして二階が宿屋のオードソックスな冒険者の宿だった。

三人部屋を二つ借りて俺とクロス、そしてキツカとアイラ、そしてユキに分かれた。

本来なら二人部屋を借りるのだが、これから作業するので手広い部屋が欲しかったのだ。

俺は主人に別料金として石鹸とお湯の代金を支払って四人に入るよう促した。

もちろんレディーファーストだ。

三人部屋に五人は多過ぎだろうと考えたが、俺達は子供だったので十分スペースがあった。

全員集まったところで俺は買ってきた布で服を作りながら話を切り出す。

「ここは何という街だ？」

俺の質問にアイラが答える。

「シマール国の王都、カルギュラスです」

「カルギュラス……」

俺は口の中で反芻させる。

ユーカリア大陸においてカルギュラスという名の場所があった気がする。

しかし、俺が知っている中では少なくとも街じゃなかった。

「廃墟じゃないのか？」

ゲーム上の設定ならばカルギュラスは魔物の大進行によって滅びているはずだ。俺が昔クエストでその場所へ向かったのだから間違いない。

「何を言っているのですか？」

アイラが首を傾げる。そうだろうな、俺がアイラの立場でもそう言うだろうな。

気になった俺は今日の年数を尋ねてみるが。

「さあ？」

と、返された……まあ、浮浪児に年数など知っているわけがないよな。そこら辺りは明日薬屋のお姉さんに尋ねてみるか。

「ほい、一着完成」

ユキの服が完成した。白をベースとしたワンピースでアクセントとしてリボンが付いている。

「……ありがと」

そっけない返事だが、内心は大いに喜んでるのが分かる。だって耳たぶが赤いもん。

「明日からはどうする予定ですか？」

アイラが明日からについて聞いてくるので俺は正直に話した。

「明日の午前中はポーシヨンの材料となる草を取る予定だ」

「ポーシヨン？ 草？」

アイラが疑問符を浮かべるので俺は苦笑して訳を説明する。

「実は今日薬屋の主人であるティータさんと交渉してポーシヨン一個につき三十Gで引き取る取引をしているんだ。だからポーシヨンの材料となる草を集めるわけ」

俺がそこまで言うのと、他の四人はまた隅っこで集まって内緒話を始めた。

「ねえ、聞いた？ あいつは安定的な収入があるのよ」

「これならもうゴミ漁りしなくて済みそうですね」

「これは夢だ、きつと夢だ」

「……可愛い服」

若干一名会話に加わっていないように見える。

しかもやはり声が大きいので内緒話になっていない。

「ほら、出来たぞ」

俺はアイラが選んだ黄色のブラウスと青色のロングスカートのセツトを横に置いた。

無論、アイラがすごい勢いで取りに来たのは言うまでも無い。

こういう所はやはり女の子で子供何だなあと、外見子供の俺が微

笑ましく思った。

「あの、お手伝いできませんか」

次の服の作成に取り掛かっているとクロスが口火を切った。

「ん？　　どういことだ？」

手の動きは止めないまでも俺は返事をする。

「アカイロ草とアオイロ草、そしてキイロ草を集めているんですよ」

「そうだな。ポーション作りにはその三つが不可欠だ」

「それらの草は雑草でどこにでも生えています。だから自分達がそれを集めるといのはどうかな？」

「そうしてくれると助かるな、手間が省ける」

俺がそう答えるとクロスはパツと顔を明るくして。

「そうですか、ありがとうございます」

「礼はいい。そして、キツカの服が出来たぞ」

赤を基調としたこの世界のオードソックスな服装なのだが、スカートでなくズボンとしているのはキツカは動きやすい冒険者が着るような服を選んでいたからだ。

キツカがそれをうつとりと見つめているのを見ると俺も嬉しくなる。作った甲斐があった。

「ああ、それなら作業用の服を作るための布を買ってくるんだっかな」

俺は失敗に気付く。

雑草を拾うとなれば当然服は汚れてしまう。そして、俺がさっき作った服は彼らのお気に入りであり、機能性は重視されていない。

「……大丈夫」

さて、どうしたものかと悩んでいると、それを察知したのかユキが慰めにくる。

「何が大丈夫なんだ？」

「私達は雑草取りをしない。その代わりにユウキが作った服を売る」
「なるほどね、そういうことか」

俺の技能はポーシヨン作りだけでない。今、実演しているように裁縫も得意だ。だから服を作ってそれを売ればいいとユキは提案していた、が。

「それは止めた方が良い」

露天商は俺もやろうとしたが、リスクが高すぎて止めた。シヨバ代とか言って金を取られるならまだしも変な奴らと関わり合いたくない。

「言い方は悪いが君達から俺の情報に辿り着く奴らが現れないとは限らない。俺はまだ目立ちたくないんだ」

いずれは関わり合いになることだろう。

しかし、それは今でない。

何の力も無しに闇の者と関わり合うと待っているのはゲームオーバーだ。

「……残念」

ユキは不満そうな顔をしていたが、俺が絶対に折れないことを悟るとしぶしぶ引き下がってくれた。

俺はそんなユキの頭をポンポンと叩いて。

「アイディア出してくれたことは嬉しい、だからそんなに落ち込まなくてもいいぞ。そして、クロスの服だ」

クロスはTシャツに短パンと少年らしい服装を好んでいた。アクセントとしてポケットが四つも付いている。

全員の服を作り終えた俺はウーンツッと一伸びした後彼らに言った。

「君達全員にお小遣いを上げるから明日は街で遊んでおいで。けれど明日からはちゃんと働いてもらうよ……って、聞いているいな」

四人は俺が自作した服を眺めるのに頭が一杯らしい。全員が興奮した面持ちで服の見せあいをしている。

俺はその様子を眺めながらベッドへ横になる。

ふかふかの感触を楽しみながら今日一日の出来事について思いを馳せた。

いきなりログアウト出来なくなったり、ステータスが貧弱だった
りするが、今日の行動は悪くなかったな。

明日からはティータさんの所へ行ってポジション作りだ。これで
しばらくお金を稼ぐか。

そう言えば靴を作るのを忘れていたな、明日も雑貨屋さんへ行っ
て材料となる皮でも買うか。

頭がぼんやりしてきた。どうやら本格的に寝るらしい。

いつも思うけどゲームの中で眠るといふのは不思議な感覚がする
んだよな。

そう言えば大事なことを忘れていた気がする。

確か、何だっけ？

俺は睡魔によって使い物にならなくなった脳をフル回転させ、次
にキツカやアイラ達が持っている服を見て思い出した。

あ、自分の服のことを忘れていた。

紺屋の白袴（後書き）

次の話の内容は半月ほど時間が飛んだ時点から始まります。

四人が素材を集めて主人公のユウキがポジションを作る。

そんな日々が続いていたのですが、ある日にクロスがお願いをユウキにすることになります。

さて、その内容とは。

魔物退治（前書き）

すいません。

予告通りの内容にはなりませんでした。

内容が長くなり過ぎましたので二分割します。

魔物退治

カンカンカンカーン！

ジュー！

「うん、まあまあかな」

俺は先程製造が終わった青銅の剣にそう評価を下す。

この武器はキツカが使用するので市販の青銅の剣よりも細くして軽さを上げていた。

けど、強度まで下げたわけじゃないから。むしろ2倍以上の耐久性がこの軽い青銅の剣に宿っている。

キツカは「大人と同じ武器を扱いたい」とか駄々こねていたけど、どれだけ粹がっていても俺達は12歳の子供だからね、大の大人が使う武器を軽々しく振りまわせないから。

「さてと、後はアイラが使うボウガンの矢じりとユキが使うロッドだけか。おじちゃん、まだ使わせてもらって良い？」

俺が店に奥にいる職人にそう尋ねると「あいよ」という返事が返ってきた。

良かった、これで今日中に作れそうだ。

何せクロスは力があるので普通の武器と比べて一回り大きいのを作る予定だった。サイクロプスやキングアリゲーターなど大型モンスターとの闘いを想定した武器で、例え鎧を着けていても、鎧ごと一刀両断するのを作ろうとしたが、それが想像以上に大変だった。

俺はこの時ほど子供であることを悔やんだ経験は無かった。

何せ重い。

ハンマーを打つのに水で冷却するのにも既存の武器と比べて倍以上の負担がかかる。

たった2倍程度の負担ぐらいどうってことないと考えた時期が俺にはありました。

もし、過去に戻るのならその時の自分を殴ってやりたいです。

手を抜くと失敗してしまうから休めません。正直最後の方は意識が朦朧としていました。

どうやって宿屋に帰ったのか覚えていません。

気が付いたら朝でした。

筋肉痛で腕がえらいことになっていましたが、納品であるポーションを作成しなければならぬので根性でやり遂げました。

ちなみに俺が作った『鋼の大剣』をクロスは軽々と振り回していました。

……俺は持つことすらできないのに。

勉強とは大事なものだ。

それを怠ると最悪死へと繋がる。

だから俺は心を鬼にしなければならぬ時がある。

「もう勉強嫌〜」

そう、例えばキツカを鎖と手錠で机に拘束させてでも知識を叩きこむ必要があるのだ。

「だから何度でも言っているだろう。字を覚えろと、それが出来なければ何も始まらないぞ」

「字を読めなくても、勉強できなくても死なない〜」

「死ぬから言ってるんだろうが！」

俺の一喝が部屋に響き渡った。

「まったく、キツカ以外はすでに魔物特性の勉強に入っているのに、お前だけは机にじっとしていることすらできないよな」

浮浪児としての生活が長かったのか、最初の内は全員椅子に座っても5分すら持たなかった。まあ、浮浪児として行動しなければ死んでいたのだからじっと出来ないのは大目に見よう。

「放して、自由にさせて」

が、それがいつまでも続くとさすがの俺も堪忍袋の緒が切れそう
だ。なので俺は仕置きを兼ねてある紫色の液体を取り出した。

「そ、それは？」

キツカの動きがピタリと止まり、視線が俺の手に持っている液体
へ釘づけになる。

「そう、精神安定剤入りポーションだ。これを飲めばキツカも大人
しくはなろう」

ポーションにリラックス草加えると、飲んだ者を落ち着かせると
いう効力を持つ。アイラ達にも最初の内は椅子に座らせるためにこ
れを飲ませていた。

「いやー！ 苦いのいやー！」

ただこの薬、相当苦い。俺も一舐めしたが体が壊れるかと思った。
例えるならゴーヤの中身の部分を5倍に濃縮した苦さと言わべきだ
ろうか。

もしかするとアイラ達が素直に座ったのはポーションの効能なの
ではなく、二度とこの薬を飲みたくない恐怖観念からゆえだろうか。

「さあ、口を開けておけよ。でないと鼻から入れるぞ」

「たゝすゝけゝてゝ！！」

キツカの悲鳴が宿屋中に響き渡った。

昼前

外へと繋がる門の前に4人の少年少女が整列し、その前に1人の少女が剣を掲げていた。

俺、キツカ、アイラ、ユキ、そしてクロスが装着している武器防具は全て俺の手作りだ。

ユウキ

青銅のダガー

革の鎧

革の小手

布の靴

キツカ

青銅の剣

プレートメイル

青銅の楯

革の靴

アイラ

青銅のボウガン

プレートメイル

ガントレット

革の靴

ユキ

ファイアロッド

絹のローブ

革の小手

布の靴

これだけ装備が充実していれば死ぬことはまずありえないだろう。どんなゲームにも最も装備は重要な位置を占める。装備を侮る者に勝利などありはしない。

その問いに否と答えるならば序盤から装備を一切変えずにラスボスまで行ってみてほしい。大抵の人は挫折するだろう。つまりそれだけ装備は大事だということだ。

俺が作った装備のおかげでキツカ達はレベルこそ一だが、そのステータスはレベル10程度にまで引き上げられている。近辺の魔物の生息についても確認したが、レベルが5もあれば集団で襲われても戦えるほどの難易度らしい。これなら負けることはないだろう。

ただ……

クロス

鋼の大剣

鋼の鎧

鋼の楯

鋼のすね当て

はい、1人だけ別格がいます。

おそらくクロスのステータスはレベル15にまで引き上げられています。

一度キツカがクロスを羨ましがって鋼の楯を装備してみたけど、腕すら上げられない有様でした。

本当にクロスは俺と同じ12歳かと疑ったよ。

クロスが12歳と言うのは俺以外全員が主張していたけどね。

ああ、それとユキは魔法の才能があるらしいので魔法の扱い方について多少レクチャーした。

まだ火の玉が出る程度だけど、この辺りの敵だとそれで良いだろう。

ユキはもっと火力を望んでいたが、危ないので教えなかった。

ちなみに俺の現在のスキル。

剣			
6			
	大剣		
1			
	魔法		
5			
	槍		
1			

斧	7
採取	8
弓矢	5
農耕	1
料理	8
鍛冶	10
調合	15
裁縫	10

ポーション調合やら草採取やら武器作りやら4人に戦い方を教えるやらでこの半月の間に相当上がりました。

裁縫がこんなに高いのは俺が毎晩簡単な服を作っているからだ。作成した服は4人を通して無料で配って歩いている。

これは利益度外視で行っている。

裁縫というのは後々になってから重要になる。

極論を言えば剣や魔法などよりも重要。

何せ状態異常を防いでくれる防具を作ろうと思えば裁縫が必須だからね。

裁縫をめんどくさがって上げなかった俺は後でどれだけ苦労したか。

一ヶ月ぐらいつつと裁縫していた記憶がある。

おかげで学校の家庭科でSを取りました。

「皆、装備は持ったわね？」

一番張り切っているのが剣を掲げているキツカ。

聞くとところによると昨日は興奮して眠れなかったらしい。

アイラとユキが眠そうに目を擦っている。

「ユウキ、ポーションは大丈夫？」

確認することは良いことだが剣を俺のど元へ突き付けるな。万が一があったらどうする。

「ポーション、ポイズンボトル、パラライアウト、スリープブレイクなど近隣のモンスターが使う状態異常に対する対策は整っている。

「そう、上々ね」

キツカが当然とばかりに頷くがこれらは高いんだぞ。

もし俺が作った薬を一式買おうとすれば三百Gは普通に飛ぶという事実を忘れてはいまいか。

と、ここでユキがクイクイと俺の袖を引っ張った。

「……お弁当は？」

「全部ユキの好物にしている」

「ん」

俺の答えに満足したのかユキは満足そうに頷いた。

「思えばここまでの道のりは長かったわ」

外に出た俺達はキツカを先頭にして進んでいると、不意にキツカがそう口火を切った。

「この瞬間を私はどれだけ待ち望んでいたか」

「感動するのは勝手だがキツカがちゃんと俺の教えた通りにしていればもっと早かったぞ」

今は青銅のダガーしか装備出来ない俺だが、前のデータの時は剣術もレベル93あった。だからその経験を生かして戦いの基本を教えていたのだがキツカは全然聞いてくれなかった。

「あんな型に嵌った動きじゃ意味無いわよ」

このクソガキめ。

アークドラゴンやジェネラルオークなど一級モンスターを相手にしていた俺に言うか？

畜生、少年の体が憎い。

そうこうしている内に近くの草むらが動き、ついでモンスターが飛び出してきた。

相手はワームやビッグアントなど雑魚モンスター。

これといった特殊攻撃も無いので落ち着いて対処すればいいのだが、いかんせんこちらは初めての戦い。

クロスも顔がこわばって大剣が震えていた。

仕方ない、ここは経験者である俺が先手を出てやー。

「うりゃあ♪」

「――ふっ」

「……ファイアボール」

俺がクロスを案じている間にすでに戦闘は始まっていたようです。

それにしても内の女性陣は容赦無いなあ。

キツカは喜々としてモンスターに斬りかかり、アイラは冷静にモンスターの目など急所を射抜いている。そして感情の表現の乏しいユキでさえ正確に魔法を詠唱・発動していた。

モンスターも抵抗とばかりに攻撃を仕掛けてくるが俺の作った防具に阻まれてダメージどころか足止めにもなっていない。

「ふっ、口ほどにもないわね」

最後のモンスターを切り捨てたキツカが軽く決めポーズを取った。

「俺の出番はなしですか」

俺は呆れ調子で呟く。

これならばもう少し装備を弱くしても大丈夫なのではないだろうか
かと考えてしまうほど一方的だった。

その後は祭り状態に近かった。

モンスターを発見すると俺を除く全員が突撃してあっという間に
息の根を止める。

それが単体だろうが集団だろうがお構いなしに突撃して刈って刈
って狩りまくった。

「見て見て！ レベルが5よ。随分上がったと思わない？」

「私は6ですけどね」

「何で私よりアイラの方が上なのよ!？」

「私の武器はこれですからね、当然です」

「ボウガンは卑怯よ!」

モンスター狩りに一息ついた俺達は持ってきた弁当で昼食を取っ
ていた。

キツカとアイラはお互いのレベルについてやいのやいの言い合っている。

「本当に彼女達の元氣は底なしだなあ」

クロスがそんなことを言うが、あんな重装備で軽装備の俺達と同様の運動量にも関わらず、息一つ乱さないというのはどういうことだ？

「……美味しい」

具が気に入ったのだろう、黙々と弁当を食べるユキ。

その様子は小動物みたいで可愛らしい。

「ほら、これも食べろ」

だから俺は自分の分から一つおかずをユキに差し出す。

「……くれるの？」

するとユキは目を輝かせて俺に尋ねてきたので「ああ」と答える。

「……ありがとう」

「って、おい!？」

あろうことかユキはおかずでなく俺の弁当箱をひったくった。

アハハハハハ

草原に軽やかな笑い声が響いた。

魔物退治（後書き）

次こそがクロスが主人公にお願いする場面です。
約束を破ってしまい、申し訳ありませんでした。

魔物退治についてどうして子供達が魔物を相手にできるのか説明が
不足していたため追加しました。

目標達成

ゴリゴリゴリゴリ

「よし、これでノルマの三〇本完成」

俺はいつもの通りに薬屋でポーションを作っていた。

「お疲れ」

薬屋のお姉さんであるティータさんが、俺が終わったのを見計らって出てきた。

「そう言えば今日は友達と一緒にいなくて良いの？」

ティータさんは俺達が外へ出て魔物の討伐をしているとは信じていない、だから俺はその問いかけに苦笑して。

「最近はお抜きで遊んで（戦って）いるんだよ」

最初の数回は全員揃って出ないと街外へ出なかったが、最近はお口でも行くようになった。

俺はソロで行くのは大変危険だと懸念したのだがそれは杞憂に終わった。

キッカ、アイラ、ユキそしてクロスは長い間浮浪児としてスラムを生き抜いている。

そのため野生の勘が研ぎ澄まされているのか危険に関しては敏感だ。

先日、苦勞しそうなキングワームに遭遇した時も一人で突っ走らずに俺を含めて五人が見事なコンビネーションを発揮して敵を沈めていた。

だから大丈夫だと俺は判断している。

「あらら、はぶられちゃったの？」

こちらの状況を誤解しているティータさんのセリフに俺は苦笑を深めてしまった。

そして話題を切り替えるためにポジションを渡す。

「はい、これが今日の分」

「いつもいつも御苦勞様。ボクの作ったポジションは常連さんから評判が高いわよ」

ティータさんはいつまでたっても俺をボクと呼んで子供扱いする。それがたまに不愉快だと感じる時があるけど、それを責めてもティータさんは決して改めようとしなないことが分かっていたから俺はもう諦めている。

「明日もポジションだけで良い？ 何ならポイズンボトルやパラライアウトも作るけど」

「お生憎様、そちらは事足りているの」

「残念」

俺は肩を竦める。状態異常回復系はポーションより高く売れるが需要が少ない。

俺がポーションに拘る理由の一つだった。

最も、ティータさんに言わせると。

「状態異常回復系の調合の方が難しいんだけどね」

らしい。

まあ、調合レベル一〇五だった俺から見るとポーションもポイズンボトルも一緒なんだけどな。

「そう言えばボク、結構稼いだんじゃないの？」

「うん、僕は今一万G以上持っているよ」

ポーションは一日三〇個と決まっているが、たまに予約買出しなど大口取引が三、四回あった。

大口取引一回につき大体ポーション二〇〇個ぐらい頼まれるから相当稼いだものだ。

大口取引は契約外として大目に一個四〇Gで買い取って貰えたからこちらはホクホクだ。

「で、それがどうしたの？」

「ボクって何でお金を集めているの？」

「それは家を持つためだよ」

家を持つことが出来れば大型の調合台や鍛冶場などが創設できるので、これ以上誰かの場所を借りなくて済む。

この調合台もポーション作りのみ認められていて、それ以外の使用は料金を取られていた。それが無料になれば今後の活動がぐっと広まることは予想できる。

「ねえ、ボク。提案何だけど、そのお金を担保にして家を手に入れない？」

「どういうこと？」

「近々郊外に空き家が出るのよ。で、その家の持ち主は色々なことをやっていたらしくて調合台や鍛冶場は勿論のことキッチンや畑まで完備しているのよ」

「へえ」

俺は感嘆する。もしこの話が真実ならばそれは非常に嬉しいことだ。

俺が家を持った暁にはそういったものをいずれ作る予定だったから、それが省けて非常に助かる。俺にとっては非常においしい話だ

が。

「まずその家を見たいのだけど」

ティータさんが俺を騙すことなんてないが、確認のため聞いておく。

するとティータさんは唇の端を吊り上げて。

「そう言うと思ったわ、この店が閉店してから向かいましょう」

閉店になった時刻に俺は藥屋の前で待機していた。

しばらくするとティータさんが現れる。

「お待たせ、待った？」

「いや、僕も今来たところだよ」

ここは社交辞令。

本当は一クロノ（一時間）ほど待たされていた。

「ここがそうよ」

馬車で揺られること半クロノ、目的の場所へと辿り着く。

まず始めに俺は立っている場所と紙で示されている場所とを示し合わせて誤りがないことを確認した。何せ他人の家を案内されちゃたまらないからね

「ボクって用心深いわね」

ティータさんが感心と苦笑の入り混じった表情をした。

それはアイラから口を酸っぱくして言われていたからな。

この二テイルス（二ヶ月）アイラは俺に詐欺師のテクニクについて何度もレクチャーしてくれた。

アイラ曰く俺は騙されやすいのだから、詐欺師がどのようにして人を騙すのか方法ぐらいは知っておきなさい、らしい。

「ほう……」

俺は感嘆のため息を零す。

中の様相は俺が家を買ったらこうしようかという想像を具現化したようだったからだ。

ちょっとした屋敷になっており、執事やメイドがいてもおかしくない。

そして外には広い畑もあって離れには鍛冶場も備え付けられている。

家の中を拝見してみる。

一階は大きな広間となっており、ドアを隔てた先には調合台やキッチンがある。そして二階へ続く階段を上がると、部屋がいくつもある。

これなら一人ずつ部屋を割り振ることが出来るだろう。

「これは本当に良い物件だね」

心なしか俺は興奮していた。

ここでティータさんが切り出す。

「で、この家なんだけど、おそらく三万Gで売りに出されると思うわ」

「三万か……」

俺は考え込む。

今あるお金がとてもしゃないけど払えない。しかし、この家は絶対に欲しい。

「これは提案何だけど、今のお金じゃボクが家を買えないから、私も一緒に出してあげる。そして二万Gはボクが返してくれれば良いよ」

「え？　　. どういうこと？」

「だから私が残りの二万Gを払うということ。ボクには結構お世話になっているからね。これまでの利益を考えるとこれぐらい安いものよ」

ティータさんは俺の作ったポジションを一〇〇Gで販売している。

つまり少なくとも見積もっても三万Gはあるのだ。

「けど、それは悪い気がする」

「何言っているの、ボクは家が欲しかったのでしよう。あの時、私から今日の年数を聞いた時から人が変わったようにお金を集め出したわ」

現在はイルヴァナス歴四五八年。

そして魔物による大進行によってこのカルギユラスが廃墟となるのが四六三年。

つまり後五年でこの都市は跡形もなくなってしまうのだ。

それを聞いた瞬間俺は今までの戦略を見直す必要が出てきたと感じた。

本来ならばこの都市を拠点としてゆっくりと力を付けようと考えていたが、それは諦める。

俺は前の住み家だった工業都市ジグサールに移り住み、そこで力を付ける計画へ変更した。

しかし、工業都市ジグサールの周辺にはここと比べ物にならない強大な敵が徘徊している。

五人組のパーティでも平均レベルが三〇以上必要だろう。

当然ながら今の俺にその都市へ辿り着くことは不可能。

だから俺は一年以内に家を持ち、そこで各スキルのレベルを上げるのと並行して自分のレベルを上げることにした。

そのための第一歩として必要だったのが家だったのだ。

俺が黙りこんでいるのを見て何を思ったのか、ティータさんは腰を下ろして目線を下げ、俺の肩を掴んで語りかける。

「ボクが何を考えているのかお姉さんに分からないけど、ボクが焦っているのは伝わってきているよ。一度力を抜いて深呼吸して。ほら、少なくともお姉さんはボクの味方だよ」

俺は我知らず赤面した。

ティータさんは俺の母親に似ている気がする。

そう言えば母さんも今の様な恥ずかしいセリフを真顔で言っていた気がする。

あの時は何とも思わなかったが、今のようになるとこんなにも嬉しくなる。

そしてティータさんは立ち上がってニコリと微笑んだ。

「さあ、行きましょう。早くしないとこの家を誰かに取られてしまうよ」

それを聞いた俺は慌てて先へと進むティータさんの後を追った。

数日後、俺は驚かせたいものがあると言ってキツカ、アイラ、ユキ、そしてクロスを連れ出した。

「ねえ、どこに行くの」

初めて乗る馬車に戸惑っているのか所在なさげにしているキツカ。

それに俺は「着いたら解る」と笑った。

そして到着。

「ここは何だと思う？」

俺が四人に聞くと、しばらく考え込み、最初にアイラが手を上げた。

「立派な屋敷ですね」

「そう、立派な屋敷だ。で、これは誰のものだと思う？」

ここまで言うときアイラをはじめ全員が理解したらしい、目を丸く見開いておりえないというように首を振った。

「まさかこれは」

「そう、アイラの想像通り、俺達の家だ」

それを示すかの様に表紙には俺達五人の名前が記されていた。

「そして、さらにサプライズがある」

俺は隠していた小箱を目の前に持ってくる。

「家を持ったということは社会的地位があるということだ。どういうことだと思う？」

俺が尋ねると今度はユキが。

「……市民になれる」

「そう、その通り。これが俺達五人の市民証明書だ」

ティータさんに容姿して貰った羊皮紙を一人一人に手渡す。

この市民証明書は『市民』になるために必須なものだ。

これで俺のステータスが『浮浪児』から『市民』に昇格できる。

『市民』になると出来ることがグッと広まる。

病院で診てもらえるし、図書館も利用できる。政治にも関わるこ
とが出来る。

そして何より俺は自分で作った物を自分で売ることが出来るのだ。

何せ『市民』だから。

人間と認められた証だから闇の者もおいそれと手出しが出来ない。

つまり、遠慮なく商売が出来る。

あ、もちろん薬だけはティータさんの所で売るよ。

そうするのが礼儀というものだろう。

はい、感傷終わり。

「さてと、入ろう。俺達の城――」

「待って下さい！」

俺がそう宣言して一歩踏み出そうとした時、突然クロスが大声を出した。

俺はつんめのってしまう。

「これさえあれば自分達は市民なんですよね」

「まあ、そうなるけど」

ぶつけてしまった鼻頭を押さえながら俺は答える。

すごく痛いし、それ以上に恥ずかしいぞ。キツカもクスクスと笑っているし。

「学校にも通えるんですよね」

「市民だから当然の権利だな」

「だったら、お願いします！」

クロスは両膝について地に頭を擦りつけ始めた。

この出来事には俺を含めて全員が驚く。

「自分達を学校へ通わせて下さい！」

そしてクロスは思いの丈を語り始めた。

「僕は昔から騎士に憧れていました。将来は騎士となって国を守りたいと考えてきました。けれど僕は市民権を持たない浮浪児です。騎士になるための試験など受けることが出来ません！」

普段は温厚なクロスがここまで熱く語るとは。

よほど騎士への思いがあるに違いない。

さて、どうしよう。

学校へ通うとなるならばそれだけお金が必要となる。しかも騎士

の養成学校となればなおさらだ。どれだけ低く見積もって通常に三倍はかかるだろう。

「けど、まあ良いか」

あのクロスが自己主張しているんだ。

普段から我がままを言わないことを鑑みればそれぐらい良いだろう。

幸いにも『市民』になったから金策のあてはあるし。

「分かった、学費は俺が何とかしよう。だから君は学校に行ってくれば良い」

俺はそう言って立ち上がらせようとしたがクロスは頑として動こうとしない。何故かと燻しんでいるとさらに言葉を紡いだ。

「僕だけじゃないんです。キツカやアイラ、そしてユキも一緒にお願います」

「く、クロス!？」

「何を言っているのですか!？」

「……」

それにはさすがにキツカとアイラ、そしてユキが反応した。

「キツカは冒険者に、アイラはレンジャーにそしてユキは魔法使い

になりたいのです。ですから、僕だけでなく彼女達も一緒をお願いします！」

「ふむ、それは本当か？」

俺がジロリと視線を向けると、三人はバツが悪そうな顔をするが、イイエとは答えなかった。つまり彼女達は学校に通いたいのだろう。

「しかし、まあ揃いも揃って学費が高い所ばかり」

どれもこれも全部学費が通常の学校と比べて高い。

そして最も高いのが、ユキが希望する魔法使いのための学校で、これは通常の学校の学費の五倍はする。

四人全員にかかる学費を合わせると、通常の学校に一人送り込めるほどの莫大な金額が掛かる。

これはさすがの俺も躊躇してしまう。

この家も二万Gの借金があるし。

俺は四人を見ながら思案する。

果たして四人にそれだけの投資をする価値があるのかどうか。

それらの学校では良い教育を受けられるから、もし四人全員が付いてきてくれるのならば工業都市ジグサルまでへの道のりは楽になるだろう。

ジグサールさえ辿り着ければ何とかなるから俺についてくるなり別れるなり好きにして貰っても構わない。

しかし、それはあくまで順調に事が進んだ場合だ。

もし俺に何かあれば学費の支払いは不可能になり、彼らは学校を辞めてもらうしかない。そうなれば今までの投資も水泡に帰してしまう。

逆に彼らが問題を起こしてしまっても水泡に帰す。

ここは重要な分岐点となる。

学校に行かせるか否か。

投資をするか否か。

考え、考える。

キッカ、アイラ、ユキ、そしてクロスを順に眺めながら俺はどうするか思考をフル回転させる。

二〇クロック（二〇分）ほど経ったのだろうか。

その間誰一人声を出さなかった。

その様子を見て俺は四人の覚悟を知った。

「Be ambitious 大志を抱け」

俺はそう口ずさんだ。

誰かが言ったのかを忘れたが、とても良い言葉だった気がする。

よく考えると俺は現実世界でも目の前の彼らの様な友人もいなかったし、将来はこうなりたいと考えることも無かった。

ただ、ゲームをしてさえできれば何も要らなかった。

だからこそ俺は彼らが眩しく映る。

俺に持っていない何かを持っているキツカ、アイラ、ユキそしてクロスが羨ましい。

「良いだろう」

俺は呟く。

「そこまでやりたいことがあるのなら、全てを出し切れ」

「では」

クロスが目を輝かせたので、俺は深く頷いて。

「自分が望むままにやってこい」

「」「あ、ありがとうございます」「」

四人全員が感激した面持ちで同時に頭を下げてきた。

「さてと、これからが大変だぞ。お前達は字が読めるか。それが出来ないと話にもならん。だから明日から特訓だ」

俺は照れくさかったので踵を返し、これからしばらくお世話になるであろう家に歩を進めた。

柄にもないことを言ったと自覚している。

今の俺はきつと変な顔をしているだろう。

このまま何事もなく自室に閉じこもって暴れたい衝動に囚われて集中力が疎かになった結果。

「大好きー!」

「必ず応えます」

「……一生忘れない」

「ありがとうございます!」

「——おわあ!」

キツカ、アイラ、ユキそしてクロスから抱き付かれてもみくちゃにされた。

目標達成（後書き）

予告通りクロスが主人公にお願いしました。

けど、失敗した感が否めません。

慣れないことはするものではないと痛感しました。

これで第一部は終了です。

無一文から家を持つまでの流れでしたが、流れが速過ぎたのではないかと反省しております。

第二章入る前に番外編としてアイラ視点でこれまでの流れを紹介したいと考えています。

番外編 アイラの視点（前書き）

番外編です。

ですので読まなくとも小説の流れに差し支えはありません。

主人公が拾った四人組の一人であるアイラ視点で第一話から第五話まで進みます。

アイラが主人公の活躍を見てどのように感じたのかを想像して頂けると幸いです。

番外編 アイラの視点

『市民』になること。

それは私を含めた全浮浪児が持つ願いであり叶わない夢であった。

私、アイラは親の顔を覚えていない。

物心ついた時には既に浮浪児としてその日その日を生き抜くのに必死だった。

ましてや私は女の子。

一人だと喰われて終わり。

だから生きるための知恵として私は仲間を組んでいた。

思い切りは良いけど猪突猛進なキツカ。

天然不思議系のマスコットキャラクターであるユキ。

気は弱いけど力と体格は規格外のクロス。

そして常に周囲の気を配って策謀を張り巡らせる私。

この四人で徒党を組んで過ごしていた。

盗みは日常茶飯事、詐欺や置き引きも普通にやっていた。

基本的に計画の立案は私で実行するのがキツカ。

たまに他の浮浪児グループと一触即発状態になった時はクロスの出番。

あいつは気が弱いけど力が強いから大抵の浮浪児は彼一人でどうにかなる。

ユキは……何でいるのか私も分からないわね。

いつの間にか私達の仲間に加わっており、気が付けば行動を共にしていたみたい。

邪魔にならないようだからチームのマスコットとして置いている。

それだけ。

それだけのはずだったのに、ユキがあいつを見付けてきたのは驚いたわ。

ユキは珍しくパンの入った袋という戦利品を手中にして戻って来たとき、私はパンの持ち主について興味を持った。

このパンは浮浪者専用のパン屋でしょう。

ならば必然的に持ち主は市民証を持っていない浮浪者ということ

になるわね。

ユキが言うにはこのパンを一人で持っていたという。

この量のパンを一人で？ 仲間もないのに？

少なくともただの浮浪者じゃない。

身元の知らないユキにあっさりとパンを奪われたことも相まって私は会ってみたいと感じた。

よほどの大馬鹿者かそれとも……

「提案があります」

久しぶりのまともな食事ではしゃいでいる三人に向かって私はあの考えを披露した。

結論的に言えば、ユウキという少年は想像以上だった。

あの時の「私達を買って下さい」発言は吊り橋を目隠しで渡るぐらい危険な賭けだったけど、その分見合った報酬——きれいな服とお金を手に入れたわ。

今、ユウキはベッドで熟睡している。

私達にきれいな服を作ってくれたのに、ユウキはボロの服を着ているのは多分自分の分の服を作り忘れたのだろう。

可愛いところあるじゃない。

ユウキはしばらく食べられるだけのお金を置いてくれたから、私はここから逃げ出そうかと提案したけど反対多数で却下となった。

いつもは賛成してくれるキッカが反対するとは珍しい。よほどユウキが作った服に感動したのね。

私の考えは却下されたけど、不思議と腹は立っていなかった。

それは無意識の部分で彼について行ったほうが良いと訴えているのかもしれない。

まあ、今すぐに離れる必要はないわ。

幸いにも明日は貰ったお金で色々と遊べるから思いっきり楽しもうかしら。

その途中で他のグループと会ったらどうしようかな。

洋服を着てお金を持っている私を見た彼らはきっと悔しがるだろうな。

思いつきり自慢してやろうかしらね。

……自慢した結果、私は毎日服や靴をスラム街の入口に置く約束をさせられたわ。

どうやら舞い上がっていたみたい、反省しなくちゃ。

そして、驚いたことにユウキは毎日服や靴を作ることを快諾したのよ。

いえ、良かったのよ。

でないと私達のグループは全浮浪児の敵になっていたから。

ありがとうございます、ユウキ。

どうやらユウキは私達を驚かせるのが大好きなようね。

いったいどこの世界に銅貨や金属ゴミから武器防具を作る浮浪児がいるのか。

Bの銅貨と錆びた水道管から青銅の盾を製造したのも十分驚いたけど、鋼の大剣まで作ってくるとは私の常識の範疇を超えていた。

確かに、鋼の大剣を作る設備が鍛冶屋にあるとはいえ（王都だから）限度というものがあるでしょう。ここまで運んできた鍛冶屋の若い職人が呆然としていましたよ。「俺ってまだまだ井の中の蛙だったんだなあ」とブツブツ呟きながら帰っていったわ。

ユウキはそれどころじゃないくらい疲労してベッドに倒れたから

知らないでしょうけどね。

それに、鋼の大剣を普通に買おうとすれば二千Gは下らないわよ。
どうやってそれを一個五S以下の屑鉄から製造できるの？

ユウキに尋ねると「俺はもっとすごい武器を作っていた」と、冗談なのか本当なのか判断に悩むセリフを吐いたわ。

「いゝやゝ、たゝすゝけゝてゝ！」

キツカが叫んでいるけどこればかりはどうしようもないわ。

だって勉強しないキツカが悪いんですから。

知恵を働かすには知識が必要。

知識を蓄えることを怠れば芳しくない結果が待っているわ。

さて、私達は外で飲み物でも飲みながら一服しましょうか。

鬼の居ぬ間に洗たく。

ユウキがキツカに構っている間は存分に休めるわ。

キツカの要望通りユウキは全員分の装備を作ってきた。

キツカは当然のことだけどクロスも重装備に身を固めて満更じやなさそうだったわ。

そう言えばクロスは最近騎士になりたいとか呟いていたわね。

浮浪児だったあの頃はそんなことを言わなかったけど、やはり衣食住が安定すると夢を追いたくなるのかしら。

キツカも前よりまして行動力が上がっていたわね。

前々から底なしのエネルギーの持ち主だったけど、近頃は輪をかけてその傾向が強いわ。

あんなにも快活で活き活きとしたキツカなんてしばらく見てなかった気がするわね。

そして、ユキに魔法の才能があることは素直に驚いた。

ユキは前々からユウキと何をしているのか分からなかったけど、どうやら魔法を教えられていたらしいわね。

後でユウキにそのことを追及するとユウキは「ユキが黙っておいとくれと言うから」とユキが口止めしていたみたい。

あの子にも誰かを驚かせたいと思う所があったようね。

まあ、そんな私も皆を脅かせようと密かにユウキからボウガンの扱い方を学んでいたけど。

けど、その驚きの半分はユキに取られちゃった。

少し悔しいわ。

後でお礼として詐欺師が使う人の騙し方について教えてあげてください、少々厳しめにレクチャーしようかしら。

ユウキがブチ切れる可能性があるけど、しばらく一緒に暮らしたからある程度怒りの境界線は判断できるわ。

ふふ、こんなところで浮浪児だった経験が役に立つとは思わなかった。

今日も私は一人で魔物を狩る。

始めの内は四人揃ってから魔物を狩っていたけど、段々とそれがじれったくなったので各自がバラバラに行動しようと提案したのよ。

ユウキは「それは危険だと」難色を示していたけど、私から言わせればスラムより百倍安全だわ。

武器もあるしポジションも持っているからそうそう大事にならないわよ。

スラムで培った危険を察知する能力を舐めないでちょうだい。

そういった説得の結果、渋々ながらもユウキは単独行動を認めて

くれるようになったわ。

私は街の外にある森に身を隠し、気配を絶ってあるポイントに魔物が来るまで待ち続ける。

そして、魔物がそのポイントに入った瞬間に矢を放つ。

ユウキの作ったボウガンの糸は鋼糸を使用しているので、通常のより何倍も強い。

至近距離ならばベアー程度の頭蓋骨を貫通する程よ。

全く、本当に危険な代物を作ってくるわね。

急所を貫かれて絶命した魔物を確認した私は愛用のボウガンをコツンと叩いた。

「あら？」

私は肉が焦げる匂いが漂ってきたのを感じた。

「どうやらユキもやっているようね」

ユキも積極的に狩りを行っているわ。

順番でいうとキツカ＞私＞ユキ＞クロス＞ユウキね。

ユウキはポーション作りがあるから仕方ないにしても、クロスはもうちょつと頑張れないかしら。

あれだけの重装備に身を固めているならばちょっとやそつとのもので死なないから思いつき戦っても問題ないはずなのに。

私はクロスの臆病さは騎士としてやっていけるのか憂いた。

「つとと、今はそれよりもユキね」

ユキは魔法使いなので、私達より打たれ弱い。

万が一があつたら困るので私は様子を見に行くことにしましょう。

誤解の無いように言っておくとポジションのための材料は日替わりローテーションで個人個人が集めてユウキに渡しているわ。

さすがに材料集めを行わないほど私達は恩知らずでないと自覚しているわよ。

どうやら私も三人に感化されたようね。

ユウキがいない時に私達が集まると、決まって話すのが将来についてだったわ。

どうも私は隠密行動を好む傾向があるから、将来はレンジャーとして活躍したいわ。

キツカは冒険家、ユキは魔法使いでクロスは騎士。

ちょっと前の自分達が今の私達を見たら絶対驚くわね。

そして、キツカは魔物狩りをこの近辺だけでなく、隣街の周辺にまで足を伸ばしたいみたい。

けど、そこまで行っても私達は浮浪児だから通行証がない。

通行証があれば一度自分が行った街だと一瞬で行ける装置が使えるのだけど、市民しか貰えない。

ユウキがいてくれれば問題ないのだけど、生憎とユウキはポーシヨン作りで忙しい。そしてユウキ抜きで外で一泊できる程私達は自惚れていないわ。

そして、魔物狩り以上に私達は独学の限界を感じ始めていたわ。

もちろんユウキが教えてくれるのだけど、ユウキは体一つしかなく、食い扶持を稼ぐために私達に構ってあげる時間がない。

私達が満足するまで教えてくれる場所は学校にしかなかった。

私が行きたいのは弓など隠密行動を主とするレンジャー育成学校。

ここはレンジャーの登竜門と呼ばれるほど徹底的に教える学校。

ここを出れば私の夢へまた一つ近づく。

けれど問題が一つ。

学校に通えるのは一部を除いて市民以上の称号を持つ者のみ。

残念ながら私達は市民じゃないので学校に通えないわ。

もしかしたらユウキなら何とかしてくれる。

一瞬その思考が頭によぎったけどすぐに打ち消したわ。

おそらく皆もユウキに頼むという選択肢についてはあったのかもしれないけど、誰も言い出さないでしょうね。

何せユウキには非常にお世話になっているわ。

私達四人を養うために毎日ポジションを作り、暇を持て余した私達に武器や防具、そして戦い方まで教えてくれる。

そして最も凄いのが、それらのことに関してユウキは全く文句を言わずに平然としていることよ。

私ならユウキの様な対応は無理だと断言できるわ。

「まさかこれは」

「そう、アイラの想像通り、俺達の家だ」

……もしかして私はとんでもない人物に出会ったのかもしれない。

ユウキは買った屋敷の前で得意げにしているけど、普通の常識で考えて十二歳の子供が家を持つことなんてあり得ないのよ。

今更ながらにあの時の選択について考えると寒気がするわね。

もし、あの時パンの持ち主に興味を持たなかったら。

金貨を貰って引き下がっていれば少なくとも私は今この場になかった。

全く、匂いすら感じさせずに通り過ぎ去る。

本当にチャンスというものは分からないものね。

あら？ まだ何かあるのかしら。

ユウキが小箱を持ってこちらへ向かってきます。

そしてそれを目の前で開け、入っていた物は。

「そう、これが市民証明書だ」

もう説明は不可能ね。

私が。いえ、私達があんなにも望んでいた物が目の前に出てきたのだから。

本当にユウキは何者なの？

今なら私はユウキが神様だといっても「ああ、やっぱり」と納得

するでしょうね。

そんなユウキは気を良くして屋敷へと向かう。

と、ここでアクシデントが起こったわ。

普段は物静かなクロスが大声でユウキを引き留めたのよ。

ユウキがつんめのためって扱ける様は失礼だけど笑ってしまったわ。

「ふむ、それは本当か？」

普段とは全然違うユウキの気迫に私は生きた心地がなかったわ。

ユウキ、あんな目もできたのね。

まあ、あれだけの力量を持っていればたかが浮浪児ぐらい黙らせるのも訳ないわね。

およそ二十分の間ずっと黙っていたけど、私の人生の中でこれほどの威圧を経験したことはなかったわ。

たった一言、「学校に行かない」と言えば良かったのかもしれないけど、それは言えなかった。

目の前のユウキから発する『恐怖』よりも『願望』の方が強かったのよ。

それは皆同じ。

だからこそ、誰も言葉を発さなかったのよ。

「Be ambitious 大志を抱け」

ユウキが呟きました。よく聞き取れませんでした。ユウキは一つの決心をしたようです。私達は息を殺して次の言葉を待ったわ。

「良いだろう」

その瞬間、周りの空気がふっと軽くなったわ。

クロスも「では」と言葉を紡いでいたから、それは錯覚じゃない。

「自分が望むままにやってこい」

ユウキはそう紡いだ後、ふっと微笑みました。

その笑みは遠い記憶の中の顔も知らない両親を彷彿させるような慈愛の表情。

「」「あ、ありがとうございます」「」

いつの間にか私達は自然と、心から頭を下げていたわ。

よく師匠に弟子が頭を下げる場合があるけど、その時の弟子の心境がようやく理解できたかもしれないわね。

敵わないのよ。

自分のためにこれほど多大な労力と時間を割いてくれる存在がありがたすぎて何も言えない。

だから私はこのままユウキ、いえ、ユウキ様がなくなるまで頭を下げようと考えていたけど隣のキツカが震えだし、そして突然奇声を上げてユウキ様に突撃し出したわ。

よく見るとユキやクロスも駆け出している。

これは遅れるわけにはいかないわ。

ユウキ様ごめんなさい。

最後のわがままです。

感謝の気持ちを表現させて下さい。

「必ず（ユウキ様のご期待に）応えます」

その後の私達は学園の筆記試験のためにユウキ様自らが字の読み書きについて教えてくれました。

これ以上ユウキ様のお手を煩わせたくないという想いは全員が共通していたようで、あのユキでさえ真面目に勉強していたわ。

その甲斐あってか私達全員が試験に合格。来ティルスの入学式に参加できるようになったわね。

しかし、最難関と呼ばれた王立魔法養成学校にユキが合格できるとは予想できなかったわ。

噂によるとユキが唯一の市民だとか。

いつの間にか私達の仲間に入ってきたことといい、ユウキ様を見つけてきたことといい本当にユキは何者かしら。

「もう準備はできたか？」

ユウキ様が私の荷造りについて心配してお声を掛けてくれました。

私達が通う学校は全寮制で寄宿舎暮らしです。

そのため昨日は全員で下着や制服の素材やらを買いに出かけ、ユウキ様が徹夜で全て仕上げてくれました。

「はい、もう少しです」

私は努めて平静に答えます。

本当はユキのことを考えて全然進んでいないことは口が裂けても言えません。

ああ、そうだ。約束を忘れていたわ。

「申し訳ありませんがユウキ様、少々時間を頂けませんか？」

「そう言ってもそろそろ馬車が来るぞ」

「はい、承知しております。しかし、これから先しばらくキツカ達と会えなくなりますから最後に言葉を交わしたいのです」

「ああ、そういうことか。それなら仕方ないな」

ユウキ様は一つ頷いてこの場を去っていきます。ありがとうございます、ユウキ様。

大急ぎで荷造りを終えた私は集合場所へ向かったわ。

その場所は屋敷の裏側にポツンと生えた木。

「急いで急いでアイラー」

「………遅い」

「転ばないよう気を付けて」

どうやら私が最後のよう、本当に恥ずかしい。

さてと、気を取り直して私は木の前で円陣を組みました。

これから先はしばらく会えない。

だからこそ、最後に皆の心を合わせるために円陣を組もうという提案をしたわ。

ここが第二の人生。

ユウキ様の目となり手となり、そして足となって動くための生活が始まる。

キツカやユキ、そしてクロスの様子を確認すると皆固い意志を瞳に宿していた。

うん、満足。

私だけじゃないみたい。

全員でユウキ様を守り抜く決意が満ち溢れている。

まず始めにキツカから。

「私達は」

「」「」「心同体」「」

次にユキ。

「……最後まで」

「」「」「信じぬく」「」

クロス。

「後悔は」

「「「「ありえない」「」」」

最後に私です。

「この命を誰に捧げる」

「「「「ユウキのために」「」」」

番外編 アイラの視点（後書き）

稚拙な駄文を最後までお読み頂きありがとうございました。

普段の生活　く午前く（前書き）

今回は二部形式です。

普段の生活　　（午前）

十四歳の俺は以前と比べて大分力が付いた様に思える。

身長も伸びたしやれることも増えた。

だが、俺の心は未だにあの時から動こうとしない。

ベッドに寝ていた俺は何となくステータスウィンドウを開いてみる。

名前、装備、スキルなどが並んでいる枠の中に一つだけ空白が存在していた。

「やはりログアウトできないか」

その項目は夢から覚めるための必須場所。

それが無いということは、覚めない夢と同じこと。

覚めない夢Ⅱ現実と置き換えることはできると考える。

つまり俺はこの世界は仮想空間でなく、現実ではないのかと疑い始めていた。

いくらゲームが好きな俺とはいえ1年以上ゲームの世界に浸ることなど出来やしない。

精神はともかく体がもたないのだ。

だが、今のところ俺の体に変調はない。

つまり体は元気そのものだということになる。

「この世界は妙に現実感があるんだよな」

ゲームの世界ではありえなかった空腹や病気などの異変。

現実ではありえないステータスウインドウの出現。

「……胡蝶の夢」

俺は何ともなしに呟く。

胡蝶の夢とは中国の荘子の偉人が思想であり、ここが現実か否かを論ずることよりも蝶なら蝶で、皇帝なら皇帝でその場を精いっぱい生きれば良いということを説いていた。

次に俺は自分のステータスを確認する

名前… ユウキ||カザクラ

レベル… 23

装備… 武器 ミスリルダガー

防具 風のマント

頭 ミスリルヘルム

足 軽業師の靴

装飾品 厚手の手袋

称号… 市民

お金 54600G

ステータス	剣	14
大剣	3	
魔法	20	
槍	1	
斧	18	
採取	25	
弓矢	14	
農耕	15	
料理	15	
鍛冶	45	
調合	56	
裁縫	43	

アイラ達と別れてからもう二年が過ぎ、昔と比べて相当スキルが上がった。

特に鍛冶や調合等はもうそれで食べていけるレベルだ。

「あいつらの学費を稼ぐために相当頑張ったからなあ」

俺は過去を振り返る。

四人が学園に向かった最初の一年は特に忙しかった。

入学金やら学費の支払いやらでお金がどんどん飛んでいく。

必要な金を稼ぎ出すために俺はポーションのほかに武器や防具を作って売っていた。

始めは正体を隠すつもりだったがもうそんなことを言っていられ

る状況じゃない。

これまで封じていた露天商まで行って金を稼ぎ出さなければならなかった。

幸いにも露天商を行っていた期間で闇の者が絡んでくることは無くてホッとする。

半セアソンぐらい続けると俺の作った物は出来が良いと評判が出来て、次第には俺の家まで押しかけて来る冒険者が現れる始末。

商売も軌道に乗ってとりあえずは金の心配はなくなったのが1年前。

今はわざわざ売りに行かなくとも待っていれば客が来る状態だ。

だから俺はボーっとしていて良い

していて良い……はずなんだけど。

「いつまで寝ているのですかこの怠け者が」

罵声とともに俺は文字通りベッドから叩き起こされた。

「さっさと起きなさい。今日の分の仕事は山のようにあるのですよ」

「エルファさん、一応俺は主だよ？」

俺が涙目で抗議するがエルファさんは素知らぬ顔をしてさっさとベッドメイキングに取り掛かっていた。

俺を罵倒するのは最近雇ったメイドさんのエルファ嬢ラフルだ。

年は十七歳前後。きめ細かい白磁の肌と鮮やかな緑色が映えた腰まである長い髪と瞳が印象的な少女。例えるならフランス人形、ただそこに佇んでいても絵になる美しさを秘めていた。

食事も掃除も文句の付けようはないが、主を主とも思わない言動が玉に傷の、扱い難い困った人だった。

本人いわく、ちゃんと主らしく振舞えばこちらも誠意ある対応を取るらしいが、エルファが納得する主の振舞い方とは一体何だろう。前に聞いてみると。

「人に聞く時点で主失格です」

……一言で切って落とされた。

言っておくが俺にM属性はない、貶されて喜ぶという特殊な性癖は持っていないぞ。

どうしてエルファさんがここにいるのか。それは二年前に遡る。

俺は四人を見送った後、屋敷が広すぎてとても一人では管理出来ないと悟った俺は誰かを雇うことにした。

そのことをポツリとティータさんに漏らすと「じゃあ良い人を知っているわよ」と人を紹介された。

ティータさんの紹介なら何かと大丈夫だろうと判断した俺はろくに面接もせずに採用した。

しかし、それが運の尽き。

ご存じの通りエルファさんは俺に対して人間扱いしてくれません。

ティータさんは「愛情表現よ」と笑っていましたが、どこの世界に愛情をサドな言動で表現する輩がいますか。

「なにボサツとしているんですか、朝飯が冷めるからさっさと起きてください」

はい、分かりました。すぐに下へ向かいますから毛布でバサバサしないで下さい。

俺は高速で着替えた後、逃げるように下の食堂へ向かった。

食堂には人二十人が座れるほど巨大な長テーブルが置かれている。で、入口から見て最も遠い上座の位置に俺の朝食が用意されていた。

パンに牛乳、季節のサラダやベーコンエッグで、デザート付きなど、普通の水準から見れば豪華な部類に入る料理が並んでいた。

俺はまだ湯気を立てているパンを齧ってみる。

パンは出来立てらしく口に含んだ瞬間にほっこりとした。

「うん、美味い」

食堂は清潔が行き届いており、敷いてあるテーブルクロスも皺一つなかった。

綺麗なことは綺麗だが、アイロンもない時代にどうやって皺を伸ばしているのか。

「失礼します」

その方法について頭を悩ませているとエルファさんが手にある物を抱えて食堂に入ってきた。

「何を聞きますか」

エルファさんはバイオリンを肩に乗せて俺にリクエストしてくる。

「そうだなあ、少し明るい感じで」

「了解しました」

俺の意向を聞いたのか、エルファさんが知っている中で楽しめのポップな旋律がバイオリンから響いてくる。

その演奏はとてもアマチュアとは思えないほどレベルが高い。

「しかし、まあ」

俺は演奏に集中しているエルファさんを眺めながら考える。

確かに言動は最悪だが、それを補って余りある程の長所を彼女は有している。

俺がエルファさんをここに置いている理由もそれだ。

料理も美味しく、掃除も行き届いてかつ演奏を楽しめるのであれば多少の言動ぐらいいは我慢してやろう。

「次は悲しめの曲で」

そろそろ終わりそうだったので俺は新たなリクエストをエルファさんに注文した。

「師匠、おはようございます」

朝食も食べ終わり、紅茶を飲んでいるとその声と共に食堂に入ってくる人影。

親のお下がりののか頑丈なつなぎ服に身を纏っている。しかし、それによって美しさが失われることはない容貌を持っているのは。

「ああ、サラか。おはよう」

俺がそう微笑みかけるとサラは恐縮したのかペコリと頭を下げた。

俺より頭一つ分高い身長と大人びた物腰ゆえに見た目二十歳実年齢十四歳という年齢詐欺を犯しているサラⅡキュリアス。親が職人

で、幼い頃からの手伝いをしているせいかな作業しやすいようにレング色のくすんだ髪を肩口で揃えており、体も同年代の女子と比べるとやや筋肉質だった。

「師匠、今日は武器を作るんですよ」

目をキラキラさせて尋ねてくるサラに俺は苦笑して肯定する。

サラは俺のことを師匠と呼ぶ。

サラ曰く、鍛冶屋である親の所に、武器の修理に訪れた冒険者がその武器を絶賛していたので、冒険者に頼んで試しにそれを奮ってみると雷にしびれた様な衝撃を受けたそうだ。

あれほどきめ細かい出来栄えなのに実践重視で作られている。形式美と実戦美を兼ね備えたあの武器を作ったのは一体誰なのかを知りたくて探った結果、俺の家に辿り着いたらしい。

「師匠、見学しますから」

サラは俺と同レベルの鍛冶職人になりたいそうだ。しかしまた、女性で職人とは厳しい道を選んだものかと感嘆する。

鍛冶職人の中の暗黙のルールとして子供はともかく鍛冶場に女を入れないというのがある。よく分からないがそういう決まりがあるから、彼女が鍛冶職人として生きていくのは厳しいだろうと俺は考えている。

が、ドエスのエルファ曰く、常識無視の塊であるあんたの弟子が職人達から村八分にされるわけがない、例え敵に回したとしても、

あんたの腕前なら例え前人未到の場所でも武器を求めて買いに来る客が後を絶たないとえらく捻くれた褒め言葉を頂いた。

実際問題として職人達から嫌われたとしても、サラが後悔せずに生きていけるんだったらそれで良い。

そう結論づけて俺はこれ以上考えるのを止めた。

「師匠、何の武器を作るのですか？」

離れの竈に向かって共に歩いているとサラがウキウキした様子で聞いてくる。

「昨日の魔物狩りで風の石を見つけたからな、それを『鋼の剣』に付加させてカマイタチを飛ばせる『風の剣』を作ろうと思う」

「魔法使いでないのに風を扱えるのですか、凄いですね」

「厳密に言うと風を飛ばせるだけだからな」

目をキラキラさせるサラに俺はそう釘を刺した。

一般的に武器は鍛冶屋によって性能が若干異なるが、それでも俺の域までには及ばないだろう。鍛冶レベルが低かった頃にも同じ材料で重さや切れ味が数段上なのをいくつも作っていたが、鍛冶レベルが二十を超えると俺は本格的に独自路線を歩み始めた。

簡潔に言うとも武器に属性を付与。

常に高熱を発する槍や帯電している斧などを作って売っていた

俺の武器は既存の概念をひっくり返すほどの衝撃を与えたらしく、鍛冶職人の間では俺のことを鍛冶職人の始祖であるメテルギウスの生まれ変わりと持て囃された。

まあ、どうでもいいので、俺のことをなんて呼ぶかは自由に任せている。

とにかく、俺は武器に属性を組み込める唯一の鍛冶職人として評判を得ていた。

俺は原材料の鉄鉱石と風の石、そしてエレメントの欠片を手元に並べる。

どのように配分すれば出来上がりの剣に風を付与できるのか、俺はゲーム内での記憶にある精製法を引っ張り上げた。

「うん。よし、これでいくか」

頭の中で一通りまとまった俺はハンマーを振り上げる。

近くでサラが真剣に見ているのを気配で感じながら俺は灼熱に溶けた鉄鉱石を打った。

カーンっ！　　っと、小気味の良い音が辺りに響いた。

武器の生成は一日に一本、しかも午前中に終わらせる。

今回は単純に一属性だけ付与するので二時間あれば完成する。だが、もし全ての属性を付与するとなれば今日だけでは間に合わない。少なくとも二日間休まずに打つ必要がある。

そういった武器の生成はレベル的にも体力的にも無理。あの時から成長したとはいえまだまだ子供。一晩中武器を作り続けるのは無謀だった。

まあ、ゆくゆくは作ることになるけどな。

俺はそんなことを考えながら、完成したばかりの『風の剣』を振ってみる。

軽く振ったつもりだったが、発生したカマイタチは一般の魔術師が放つウインドと同威力だった。

「ほら、振ってみろ」

サラが試し切りしたそうだったので渡す。

するとサラは大喜びでカマイタチをあちこちに放った。

カマイタチが出ることによほど嬉しかったのか夢中で剣を振り続けるサラ。

そして俺はというと。

「こら、サラ。ストップストップ！ 俺が輪切りになる！」

サラが放つかマイタチを必死に避けていた。

出来上がった『風の剣』を携えて本館の方へ戻る。

もういい時間なのかエルファが昼食の準備を始めていた。

「完成しましたか、そろそろ昼食ができますのでそれまでに汗を落としてください」

レディーファースト。だからまず始めにサラを水場へ行かせる。

サラは「師匠より先に入るなんてとんでもない」と恐縮していたが、俺が入るよう命令すると従ってくれた。

俺に対する敬意を持っているのは構わないけど、その使い方が間違っているのではないかと考える。その躊躇を新しく完成した武器を試す時に使ってほしい。

そんなことを考えているとサラが上がったらしく、次に俺が入った。

屋敷の一角に備え付けてある水道は特別製で、常にお湯が出るよう改造されている。この発明はエルファも嬉しかったらしく「たまに

は良いことしますね」と呟いてくれたのが印象に残っていた。

サラとの付き合いはここまで。

家に昼食を用意しているとかで俺に今日の礼を言った後、サラは自宅へと帰って行った。

普段の生活　く午前く（後書き）

次回は午後についての内容です。

メイドのエルファの口調に違和感がありすぎましたので、訂正しました。

普段の生活　　午後

「今日の午後は何をしますか」

「魔物狩りだな、そろそろ素材のストックが切れてきたので補充したい」

「ティータからポジションの催促がきてますが」

「先日、大量に作っておいたからそこから出してくれ」

「了解しました」

その後、俺は昼食を取りながら『風の剣』の販売価格をエルファと相談するのだが、悔しいことにエルファは鑑定眼も備えているのか適正な価格を算出してくれるので俺の出番はほとんどない。仮に言ったところで「節穴」と馬鹿にされて終わる。

本当に、本当にこの罵倒さえなければエルファはもつと――

と、考えてしまうのは仕方のないことであろう。

午後からは街にあるゲートを使用して遠くの場所まで素材を集めに行く。

俺が普段よく行くのは『カナキア高原』と呼ばれる場所で、そこに

出没するエレメント系の魔物が落とす素材は属性武器を作成するのに必須だった。

カナキア高原は標高三千カール（三千m）の場所にあり、見渡す限り一面に高原植物が繁茂している場所だ。

そして、観賞に適した絶景ポイントの一つであり、ここから遠くの景色まで見える。

「最初ここに来た時の感動は忘れられないよな」

俺は過去を振り返ってウンウンと頷く。

ゲートは自分が行った場所でしか繋がらないので一度自分の足でここに来なければならなかった。

カナキア高原の最寄りのある町までコツコツと進み、いざ、踏破となると三日分ぐらいの食料を背負ってガイド付きで登った。疲労感や空腹などゲームには無かった要素のせいで心が折れかけた分、ゲートのある地点まで辿り着いた時の感動もひとしおだった。

「と、まあ感傷に浸るのは後で良いか」

俺は頭を振って気持ちを切り替え、獲物を探し始めた。

「いたいた」

目当てのグリーンエメントを発見した舌なめずりする。

エレメント系はブヨブヨとしたゼリー状に覆われた特殊な魔物で、一定の形を持っていない。

そして核として炎や水、そして風が中心で渦巻いていた。

俺は腰に差したミスリルダガーを取り出す。エレメント系は実態が無いので、通常の武器での攻撃は効きにくい。だから奴らを倒そうとすれば魔法か、それとも俺が持っているミスリルのような特殊な物質で作られた武器が必須だった。

幸いにも向こうはこちらに気付いていない。

俺は息を潜めて佇んでいるグリーンエメントに近づく。

そして射程範囲まで入った瞬間一息で核となる部分を貫いた。

一撃必殺。

もしエレメントに感情があるとすれば、呆氣に取られていただろう。何せ気が付いたら死んでいたんだからな。

「うん、やはり気持ち良いな」

相手を一撃で仕留める感覚というのは何度味わっても気分が高揚する。まあ、プロのレンジャーと比べるとまだまだだけだね。あいつらは気配どころか姿すら消すからな。職業補正があるとしてもあれは反則だろう。

「そういえばアイラはレンジャー志望だったよな」

俺は想像してみる。

ある日、突然真後ろから刃を突き付けてくるアイラの姿を。

「……怖すぎるな」

容易に想像できる光景に俺は身震いをした。

エレメントを倒した俺は自身に異常が起こっていないか簡単にチェックする。すると動悸が早くなっていることに気付いた。

「あれだけの動きでもう息が上がったか……」

俺が一撃必殺にこだわる理由がもう一つある。そして、こちらは深刻だ。

カナキア高原は高度が高い場所にあるので他の場所より空気が薄い。通常なら動作でもすぐに酸欠に陥りやすくなるので、激しい戦闘を行うとあっという間に身動きすら取れなくなり、魔物にとって格好の餌食である。くれぐれも気を付けなければならない。

「何も落としていないな」

呼吸を整えながらグリーンエレメントがいた場所を探索しても何も見つからない。

「まあ、ドロップアイテムは時の運だ。見つからない方が多い」

俺はそう自分を励ました後、その場を去った。

「ん？」

エレメントを狩っていると何やら人の気配がした。

ここ、カナキア高原はその特性上訪れる冒険者が少ない。

それはそうだろう。

俺だって属性武器を作るための必須素材がここに無ければ出来る限りきたくない。

通常より疲労しやすいこの場所に来るのは修行者かそれともレア素材を集めに来る俺ぐらいなものだろう。

「あまり人と会いたくないんだよな」

俺の名は良くも悪くも知れ渡っているため、俺を見た瞬間「武器を売ってくれ」と交渉を始める者が後を絶たない。しかも諦めの悪い奴らも多く、俺が頷くまで離れようとしないので狩りの邪魔になる。

結論から言うとその懸念は杞憂に終わった。

彼らは俺の正体を知らないらしく、俺に対して軽く手を上げるだけに終わった。

見た所頑強な戦士八人と魔法使い八人、そして僧侶四人の大所帯だった。

「さて、どうして彼らがここに来たのか確認でもしようか」

俺は両手を上げて攻撃の意志がないことを示しながら彼らに近づいた。

「こんにちは、神のご加護があらんことを」

俺は一般の冒険者が使う挨拶を行うと、先頭に立っていた三十代のリーダーらしき男が返してきた。敬虔深い信者らしい。

「しかし、すごい大人数ですね。何をするのですか？」

「ああ、この奥にいるマスターエレメントの討伐ですよ」

「マスターエレメント？ 大丈夫ですか」

マスターエレメントは高原の奥で彷徨っている全属性の攻撃を行うボス級モンスターだ。俺もすっかりエンカウントしてしまっただけがあるが、さすがマスターなだけあってデカイ。核となる部分だけで俺の身長と同じぐらいある。

もちろん逃げたよ、今の俺のレベルで戦ったら奴の一撃で終わりだもん。

「失礼ですがレベルは大丈夫ですか？」

「全員四十近いです、万が一でも負けませんよ」

男は自信に充ち溢れているが、俺はそれを聞いて暗澹たる思いになった。

足りない。

特に火力が少なすぎる。

俺は一度前の最強データで戦った経験があるが、マスターエレメントの最大の特徴はその回復力にある。

マスターエレメントは危なくなると他のエレメントを呼び寄せ、吸収して回復する能力がある。

ゆえに、マスターエレメントを倒そうとすれば防御や回復を捨て、短期決戦で臨むこと。

極論すれば二十人全員が魔法使いでも良い。

それぐらい奴の回復力は高かったし、何より空気の薄い環境における戦闘での心得だった

俺はそのことを指摘してあげても良かったが。

「そうですか、頑張ってください」

相槌を打つことで話題を終わらせた。

レベル的にも年齢的に俺が説明してもまともに取り合ってもらえない。それに僧侶が四人もいるから危なくなれば退避するだろう。

幸いにもマスターエレメントは敵意がなければ攻撃してこないの
で、戦意をなくして逃走しても追ってこない。

死んだらどうなるのかを前にティータさんに聞くと、死んだらそれで終わりらしい。

ここら辺は現実と同じだなと納得したのを覚えている。

「それでは御武運を祈ります」

後ろ髪を引かれる思いに駆られながらも俺は一つ会釈してその場を去った。

もちろんその後は今の出来事を忘れるためにがむしゃらにエレメントを狩ったことは言うまでもない。

「日が暮れるな」

もういい時間になった頃、俺は今日の戦利品について確認した。

久しぶりの素材集めだから本心としてもっと狩りたいが、陽が落ちるとエレメントの動きが活発化する。

光もない闇夜にエレメントの輝きが目立つので、狩りはどちらかというと夜が適しているのだが、光を全く出さないブラックエレメントとエンカウントするとヤバイからここで引き揚げることにする。

そう判断した俺はゲートを使用して街に戻った。

夕食時、またもエルファさんはバイオリンを弾いてくれた。

「エルファ、負けると分かっている戦いに臨もうとする者がいたとすれば君はどうする？」

今日のことであっても頭から離れなかった俺はエルファに聞いてみた。するとエルファはピタリと演奏を止めて。

「何かおありになりましたか？」

と、聞いてきたので俺は今日の出来事についてありのままに話した。

全てを聞き終えたエルファは一つ頷いて。

「その者の安全という観点から見れば主の選択はベターです」

「ベター？」

「そう、ベター。主の見立てによるとそのパーティはバックアップもしっかりして、かつ容易に逃げられる相手だったのでしよう。それなら死ぬ可能性は低いので放っておいても大丈夫です」

「そうか」

「ちなみにベストはその相手の特性を詳細に伝えることです。情報は勝敗を左右するほど重要なファクター、そこを怠ったのはマイナスですね」

「しかしなあ、敵の情報を詳細に伝えたと俺の正体がばれる危険性があったぞ」

相変わらず厳しいお言葉だが俺はそれに反論するとクツクツクツと嘲るように笑った。

「主にとって大事なことは何ですか、素材を集める事？ それとも彼らの安全を守ること？」

「……」

さすがにその返しには反論できなかった。

彼らの安全のためという視点で考えると先刻のことはベストより低いベターだが、素材を集めるという観点からだど、情報を与えるということは相手と長く接することであり、その期間が長いとパーティ内の誰かが俺のことを思い出す危険性が増えるのでバッドだろう。

「優先順位を付けることです。体は一つしかないのだから、二つも三つも同時に出来るわけがないのです」

そこまで言ってエルファはバイオリンの演奏に戻った。

「やはりエルファさんは厳しいなあ」

俺はそう漏らしたが、エルファはそれに反応することは無かった。

演奏を聴きながら俺は夕食を取りながら明日の予定について考える。ちなみに作った剣をエルファさんは五千Gで売ったというのを聞いた。

「まあ、明日は街へと繰り出すか」

街の散策ついでにキツカやアイラ達の様子でも見に行こう。ちょっとややもやしたので明日は気晴らししたいと感じた。

二、三曲聞いた後に眠気が襲ってきたので俺はエルファに「もう下がって良い」と注文し（嫌味の言葉はスルー）俺は自室へと戻った。

番外編 ブラッディX（前書き）

この番外編は私が衝動に任せて書いただけの自己満足小説です。
番外編ですので読まなくても本編に支障はありません。

アイラ達四人が主人公に手紙を送り、それを主人公が突っ込みながら読み進めるという下らない内容です。

かなりはっちゃけていますので人によっては多大な不快を与えることになると思います。

それでも良いという方のみお読みください。

番外編 ブラッディX

「主、お手紙です」

朝食を食べ終えてゆっくりしているとエルファが4通の封筒を持つて現れた。

「ああ、ご苦労。そこに置いておいてくれ」

「畏まりました」

エルファは一礼してその場を後にする。

「ふっふっふ、ついに来たか」

俺は4人からの手紙を見てほくそ笑む。

それは3ヶ月前に送り出したキッカ、アイラ、ユキそしてクロスからの手紙であった。

キッカ達が学校に行く直前。4人の学力が著しく劣っていると判断した俺はある薬を4人に渡していた。

その名もブラッディX

これは己の潜在能力を限界にまで引き上げ、レベルアップした際通常より3倍のステータス上昇という効力を持っていた。

効果は3時間。

ゆえに1日3回飲むように言伝ていた。

もし、俺の言うことを守っているのなら素晴らしい効果が見えているだろう。

さあ、見せて見よ。

「まずはクロスから」

そう判断した理由に深い意味はない、ただ目に付いただけだった。

「えーと、何々……」

クロスの字はその性格が端的に現れており、力強い字の中に自信なさげな様子が見え隠れしていた。そして最初の方は季節の挨拶と何故四人同時に手紙を送った理由について記されている。ふむふむ、単に四人で連絡を取り合った際にそうしようと約束していたらしい。

可愛いところがあるなと思いつつ俺は手紙を読み進めた。

——ユウキさん、ご無沙汰しています。

「うん、ありがとう」

——ユウキさんのご厚意のおかげで僕はこうして騎士学校に通うことができています。

「ああ、それは良かった」

――さすがに騎士となるだけあって厳しい訓練の毎日です。

「まあ、そりゃそうだろうな。国を守る騎士だから」

――日の出から日の入りまでエンドレス筋力トレーニング

「ほう、それはキツイな」

――相方を背負っての雪山登山。

「ん？ 12歳でそんな厳しい訓練するのか」

――24時間耐久マラソン

「ちょっと待て、書いてある内容がおかしいぞ」

――甲冑を着た上での遠洋

「おい、一体何をやってるんだ？」

確かクロスは12歳だった気がする。12歳といっても体の成長具合は俺と変わらない。そんな訓練を行えば一般の子供は必ず体を壊すぞ。

そんな疑問を感じたが俺は次の一文で全てが解けた。

――僕の周りの同級生は皆20歳だけど仲良くやっています。

「どうして大人に混じっているんだよ!？」

俺は我知らず絶叫した、文章はまだ続く。

——最初は僕と同じ年代の子と一緒にいたのですが、僕の力が大きすぎて通常の訓練では意味がないと、その上にある士官学校の方へ放り込まれました。

「そういえばクロスの力は異常だったからなあ。パーティの中でたった一人だけ、大人ですら悲鳴を上げる鋼の重装備に身を固める12歳。うーん、今思い返すとあれは異常だったな」

俺は過去に思いをはせる。俺達五人パーティの中で1人だけ異様に浮いていたクロス。しかも軽装備に身を固めた俺達と同程度動いているにも関わらず息一つ乱していなかった。

「そうか、クロスに飲ませるとこうなるのか」

20歳の大人と同等の体力を持つ12歳。恐るべし、ブラッディX。

俺はため息をついてクロスからの手紙を読み終えた。

「さて、次はキツカにするか」

俺は最も派手な封筒の封を切って中身を取り出した。

キツカは多少の誤字はあるものの、字の一画一画に生命力が迸っている。

手紙の序文はまたも前口上と同時期に全員が手紙を出した理由について述べられていた。

「さてさて、鬼が出るか蛇が出るか」

俺は幾分緊張しながら本題を読み始めた。

——やっほー、キツカです。

「相変わらず変わらないな」

字だけでも伝わってくるキツカの元気に俺は苦笑する。

——ユウキのおかげで私は人生最高の瞬間を送っているわ。

「そう言ってもらえると俺も学費を払った甲斐があるな」

俺は感慨深く頷く。

——もう幸せすぎて学校に革命を起こしたわ。

「は？　　どういうことだ？」

——学校ってありえないのよ、どうしてそんな役に立たない知識を教えるのかしら。全部技能だけで良いじゃない。

「いや、良くないだろ。知識として知っておかなければならない事柄はいくつもある」

——幸いにも私と心を同じにする同志が何人も見つかったわ。

「おい、他人を巻き込むなよ」

——そしてある日、決行したのよ。館内で行われる全校集会をジャックして全冒険者候補生の前で解放のための演説をね。

「で、失敗したんだろ」

——成功したわ。皆涙を流しながら感激してスタンディングオベーションの祭り状態だったわ。

「おい、嫌な想像しか思い浮かばないぞ」

——その後に先生方が静止に入ったけど、真実に目覚めた候補生の前には無意味だった。

俺は嫌な汗が首筋からタラリと落ちる。ブラッディXは確か力なぞそういったものに効果がある。カリスマなど目に見えない力言作用するなんて聞いてことないぞ。

——で、学校中を巻き込んだ大乱闘に発展したわけ。もう怪我人続出、全クラス崩壊、学校側は不祥事を隠すために必死で隠ぺい工作していたわ（笑）

「笑い事じゃすまない」

——まあ、最終的に学園側に落ち度があったことを認め、私達の要求を一部吞んで何人かの教師と数人の理事を退職させる形で決着が着いたわ。

「で、お前はどうか？ 学校を退学になったのか？」

——同志、学園長と理事長の存在は大きかったわね、嚴重注意ですんだわ。

「学校側がグルだったのかよ！？」

始めから仕組まれていた出来事だったらしい。推測するに反乱分子の存在を駆逐するためにキツカのカリスマ性を利用した一大茶番。手紙を最後まで読み終えた俺は脱力して背もたれにもたれる。

「学園側のバックアップがあったとしても並の人間ならキツカのような候補生を心酔させる真似など出来ないよな」

将来革命家として恐ろしい存在になりそうだな、と。俺はキツカの未来を案じた。

俺は大変な奴の能力を開花させたのかもしれない。

合掌。

「ええと、次はユキか」

精魂を使い果たしていたが俺は次の封筒を開く。

「達筆だ……」

俺はユキの字を見て呻き声を上げた。いったいどこでそんな書き

方を学んだのか、あまりに凄すぎて全然読めないぞ。

しかし、それでも俺は時間をかけて手紙を読み進めていった。

——こんにちは。

「ああ、こんにちは」

——何から話せばいい？

「知らんがな、そんなこと手紙に書くなよ」

——そうそう、最近また胸当てが苦しくなったわ。

「ぶっ!？」

俺は急ぎ込んだ。

ユキよ……お前には先月大きいサイズのを送ったはずだろう。一体どこまで発育するんだ、その胸は。

もしかしてこれもブラッディXの効能か？

——そして、魔法学園の『市民』初の生徒会長に就任した。

「あれれ？ キッカと同じようにカリスマ性に作用する効能なんてあったっけ？」

王立魔法学園は数ある学園の中で最難関であり、最も保守的であ

るということでは知られている。よくもまあ『貴族』による嫉妬を受けなかったものだ。

――私のファンクラブがあつて彼らが熱烈に私を支持したみたい。

「ファンクラブ？　どうということだ？」

――よく分からないけど、私の他の生徒会長候補の生徒は次々に学校からいなくなっている。その原因が私のファンクラブによるものらしい。

「何というか、恐ろしいな」

――そうそう、それで生徒会長演説の時にユウキのことを話した。

「え？　ちょっと待て、嫌な予感しかしないぞ」

――私の心と体はユウキのもの、そういう風な演説をしたわ。

「何をやってんだよ！？」

俺は頭を抱える。そんな誤解を与えるような発言を公式の場でして良いと思っているのか、下手すれば退学だぞ。

――安心して、皆、『ユキは純粹だからねえ』という理由で納得してくれたわ。

「俺から言わせるとそれで納得する事実の方が不安なのだが」

一体王立魔法学園はどういう風になっているのだろう。一度でい

いから覗いてみたい衝動に駆られる。

——でも、私のフアンクラブの会員は血の涙を流していた。

「……」

突然体中に冷水を流し込まれた様な嫌悪感が体を包む。ユキの生徒会長対立候補生を退学に追い込む様な過激派だ。そんな連中に目を付けられたとなると。

——『ユウキを呪い殺してやる』と呪詛の儀式を行っているそうだから気を付けてね。

「誰のせいだよ」

俺は突っ込む気力がないほど脱力してしまう。しかし、魔法エリートの中からは恨まれるというのは本当なのか。そういえば最近を振り返ってみると体がいやに重いんだよな。心臓もバクバクいつているし。けど、薬を飲んでも治らない。これって気のせい？ もしかして本当に呪いのせいじゃないのかな。

「アハハハハハハハ」

まさか、そんなことはあるまい。

俺は乾いた笑いを漏らした。

「さて、最後の一通だ」

俺は最後に残った気力をかき集めて封筒を取る。毒を食らわば皿まで、ここまで来たら最後まで付き合ってやろう。

「さて、アイラは一体何を見せてくれる!!」

俺は気合を入れて手紙を開いた。

すぐさま本文へと入る。

そこにはアイラらしい丁寧で細かい字が羅列してあった。

——ユウキ様、レンジャー養成学校というのは外での隠密だけでなく街中での密偵も兼ねるそうです。

「まあ、レンジャーはその特性上魔物よりも対人関係の方が威力を発揮するからな」

隠密に長けたレンジャー。このゲームでも人と人が争う戦争ではナイトや剣士などよりもまずレンジャーを使いこなした方が勝利するので、ゲーム内では戦争にレンジャーの数が前もって決められていることもあった。

——先日、訓練の一環として目標の人物にしばらく張り付いて行動を逐一報告する試験がありました。

「どうしよう、誰を監視していたのか容易に想像できる」

——で、私はその試験の対象としてユウキ様をしばらく監視していました。

「予想通りだよ」

俺はガツクリと項垂れる。一体いつの間にストーキングしていたのやら、聞くのが怖い。

――サラとかいう少女やティータとの関係について私が一人前となつてユウキ様と対面した際じっくりと話してもらいますからそのおつもりで。

「怖っ」

――そういえば常にユウキ様に対して理不尽な仕打ちを繰り返しているメイドがいましたね。

「ああ、エルファのことか」

――あのメイドを亡き者にしようと闇討ちを仕掛けましたがあえなく返り討ちにされました。

「何やってんだよ!？」

――私の隠密は元プロの教官に褒められるほど完璧だったはずなのにあのメイドはアツサリと見破りました。

「え？ エルファがレンジャーの隠密を見破った？」

――しかもその後教官ですら見落としていた私の欠点について細かく教えてくれました。

「エルファ、君は一体何者なんだ……」

どうしてそこまでの技量を持ちながらメイドなんてやっているの？
もっと他に生かせる場所があるだろう。

——まだまだ私の力量不足という所です。しかし、安心して下さい。
必ず近いうちにユウキ様に平穩が訪れさせてみせます。

「頼むから何もしないでくれ」

俺はガツクリと項垂れて手紙を閉じた。

「ヤバい、体力と氣力を根こそぎ奪われた」

正直言うと俺はもう今日は何もしたくない、サラには悪いけど今日は体調が悪いから休ませてもらおう。

「しかし、実験は成功だ。ブラッディXは凄まじい効果を發揮した、
が」

何か怖い。

これ以上与えると俺はとてもつもない大災厄を引き起こしそうな予感がする。

「……あれは封印した方が良いな」

成功すると新しい商品として売ろうと考えていたが、どうも効果
が大きすぎて不安を拭い切れない。

「やれやれ、新しい商品を考えてろくなことになるな」

俺は天を仰いでそう呟いた。

番外編 フラッディX（後書き）

駄文を最後までお読み頂きありがとうございました。

また何か衝動的に書きたくなれば今回の様な番外編の形で載せようかと考えています。

その時はまたよろしくお願いします。

ご指摘いただいた箇所を改編しました。

街中

「やれやれ、街に出かけるにも変装しないといけないのか」

「冒険者や商人達と鬼ごっこを楽しみたいのなら普段の恰好で行けばよろしいかと」

「……止めとくよ」

朝、街へ出かけるために俺はクローゼットから顔まですっぽりと覆うフード付きの分厚いローブを取り出していた。

季節はまだ寒いのでこれで大丈夫。よく魔道士がこのローブを愛用しているので、注目を集めることはない。

「さてと、俺は行くけど買ってきて欲しいものは――無いよな」

「はい、その通りです」

しばらく共にいるけど、意図的なのかエルファの好みが全然わからない。生活感がないというか彼女は俺の前では決して弱みを見せないのだ。

エルファ曰くメイドの嗜み、とすまし顔で申したが二セアソンもの間隠し通せるものなのか。

俺はエルファが「実は私ロボットでした」と言っても驚かない自信がある。

「街で食べてくるから昼食はいらない、夜には帰る」

俺の言葉にエルファは一言「畏まりました」と頭を下げて俺を送り出した。

カルギュラスは城を中心とした同心円状に広がっている。

さらに、街の構成は第一区画、第二区画そして第三区画と城からの距離によって分かれていた。

俺のいる場所は第二区画。商会のオーナーや大地主など『市民』の中でも中、上流階級に位置する人がこの区画に住む。

ここら辺の人々はお金を出し合って冒険者やレンジャーを雇って徘徊させているので治安が良い。ちなみに薬屋のお姉さんであるティータさんが経営している店は旅人が滞在する第三区画にあるが家はこの第二区画にある。

まあ、薬を調合できるのであれば金に困ることはないからな。

いつの世にも病と貧乏は無くならない。

そして、これから俺は今日の分のポジションを持っていく所だ。

時間もあつたし、それに「恩人にぐらい顔を見せたらどうですか」と、半ば無理矢理ポジションを持たされた。

最近ティータさんと会っていないのは認めます。

ただ、言い訳させてもらおうと俺がティータさんの店に出入りしていることがばれると、そこで待ち伏せされる危険性があったと言いたい。

ティータさんも買いもしない客を待機させるのは望ましくないことだろうしな。

「……俺は誰に言っているんだろう」

最近独り言が多い気がする、本当に疲れているのかな。

俺は頭を振って思考を切り替えた。

馬車を使うという選択肢もあったが、おそらくエルファは許してくれない。彼女は何か固定概念があるらしく「元気なうちは歩くべきです」と言われた。

この第二区画で馬車を使わずに歩いているのは多分俺一人。

あ、また馬車とすれ違った。

……本当に、エルファが望む主の姿とは一体何なんだろうか。

「ここが分岐点か」

しばらく歩いていると大きな十字路に出くわす。

このまま真っ直ぐ行けば第二区画のままで、左に曲がればティータさんの薬屋がある第三区画で右に曲がれば『貴族』が住む第一区画があった。

第一区画は『市民』の上である『貴族』が住んでいる。王都の華らしく、その区画は整備が行き届いておりごみ一つすら落ちていない。建物も一軒一軒が全体と調和するように建てられていた。ただ、その区画は『貴族』や『王族』以外立ち入り禁止となっている。その区画のあちこちに警備の目が光っており、許可証を持っていない者が第一区画へ足を踏み入れようものならすぐさま兵士が駆け付けてきて追い出されてしまう。第一区画に住むことはシマール全国民にとってステータスとなっていた。

「しかし、あそこはあまり行きたくないよな」

鍛冶屋として生計を立てている俺はたまに『貴族』の連中から呼び出しがかかることがある。

その際に第一区画へ足を踏み入れるのだが、道を歩いている『貴族』らしき連中が俺を見る目が嫌なこと嫌なこと。

何か汚らわしい物を見るかのような視線を向けてくるし、それを隠そうともしない。

しかもそれは俺に武器や防具を注文する『貴族』も同様に、俺を使用人か奴隷かと勘違いしている思惑が透けて見える。

何が楽しくて『貴族』共の見栄のための武器やその子供のためのおもちゃを作らなければならないのか。

「いかん、思い出したら腹が立ってきた」

大きく深呼吸。すってー、はいてー……ふう、落ち着いた。

「俺には縁のない場所だ」

俺は左の道を進みながら一人愚痴る。

キツカ達が学園を卒業するまで後一年。十五歳となればこの世界では立派な大人だ、それを待って俺は工業都市ジグサールへ移住する。

俺についてくるか、それとも残るかは彼女達が決めれば良いだろう。

「まあ、もし残るのであれば魔物大進行の日付時にはティータさんを含め、拉致してでもジグサールへ招致させているけどね」

カルギユラスがいつ滅びるかわかっている俺にはそれぐらい造作もないことだった。

「まあ、俺が知らない輩がどうなろうと知ったこっちゃないがな」

ククク、と俺は底意地の悪い笑みを浮かべた。

俺には関係ない、と考えるのが勝手だが人生万事塞翁が馬。

俺はこれから先『貴族』と嫌でも付き合うことになるうとは想像すらできなかった。

二年前に俺が倒れていた場所は第三区画にあたる。

第三区画は行商人や下働きの弟子など下層階級に位置する市民が暮らしている。ティータさんの店は第三区画の治安が比較的安定している東部にあった。

東部から南部にかけては冒険者や商人が利用するので活気があり、いるだけ楽しくなってくる。

「いやあ、気持ち良いなあ。もしこのローブを外せばもっと気持ちがいいんだけどなあ……アハハ」

俺の武器を求める冒険者や商人の目を欺くためとはいえ、変装をしなければならぬ事実にとっても悲しくなってきたのでさっさとティータさんにポーシオンを届けることにした。

けど、この道を選択しなければキツカ達を学園に送り出すことなんて不可能だったんだよな。

「ティータさん、今日のポーシオンだよ」

ティータさんの前では子供口調に戻る俺。自分でもかなり気持ち悪いが、俺口調で話すとティータさんが悲しみそうな予感がするのでまだこの口調のままだった。

「はい、あれ？　今日はボクが来たんだ」

俺が届けに来たのが予想外だったらしい。まあ、俺が家を持ってからエルファが届けるのが常だったからな。

他にティータさんと顔を合わせる時と言えばティータさんが俺の家に遊びに来た時だけだな。

そして、その晩エルファは俺を寝室に閉じ込めて二人で騒いでいたけどな！！

「あれ、どうしたの？」

どうやらダークサイドに堕ちていたらしい、俺は首を振って何でもないことをアピールする。

「エルファさんに『たまには恩人に顔を見せなさい』と怒られてね。だから来たんだよ」

「あらあら、そうなの」

ティータさんは口に手を当てて苦笑した。

「どう、ボク。最近困ったことはない？」

「まだ僕を子共扱いするんだね」

「そりゃそうよ、だってまだ十四歳なんだから」

当然のように言うがこの世界では十五歳から成人だったはずだ。おそらくティータさんは何歳になっても俺のことをボクと呼ぶんだろうなと悟った。

「困ったことと言えば、エルファさんを何とかならない？ 言動が酷過ぎて少し疲れたんだけど」

「まあまあ」

ティータさんは笑うだけで真剣に聞いてくれない、俺は結構切実なんだけど。

「エルファは他人に対して少々厳しいからねえ」

少々どころではない、過多だ。

「エルファはエルファなりに頑張っているのよ、だから暖かい目で見て頂戴」

セリフは立派だけど笑いながら言わないでほしい、全然真剣さが伝わってこない。

「失礼ねえ、私はボクに感謝しているのよ。ボクのおかげでエルファはずいぶん表情が豊かになったわ」

「え、そうなの？」

それは意外だ、やはりティータさんとエルファは付き合いが長いからエルファも打ち解けやすいのだろうか。

「ええ、ボクの落ち込む顔や嫌がる顔を見るのはとても楽しいと嬉しそうに話していたわ」

「って、おい!!」

なんだそれは？ 一体どこの女王様だ？

何度も言うけど俺は甚振られて喜ぶ趣味は無いぞ。

「……冗談よ」

俺の異常な剣幕に驚いたのかティータさんは目を丸くする。

俺はハアーツと脱力して。

「お願いだから性質の悪い冗談はやめて」

一瞬本気で解雇しようかと思ったぞ。

ティータさんがゴメンゴメンと謝りながら。

「けど、ボクのおかげでエルファが感情を表に出しやすくなったのは本当よ。出会った時は本当に酷かった。何をしてでも無反応、まるで『奴隷』そのものだったわ」

ティータさんが遠い目をしながらポツリと呟く。

「エルファさんは過去に何があったの」

俺はエルファの過去について興味を持ったので聞いてみたが、ティータさんは微笑むだけで俺の質問に答えてくれそうになかった。

「エルファは過去を話してないのよね。じゃあ私から言うわけにはいかないわ。本当のことはエルファ自身に聞いてちょうだい」

俺はもやもやしたがこれ以上追及しても無駄だと悟った俺は諦め、そしてティータさんからポーションの代金を受け取って店を出ようとした、が。

「そういえばエルファのお土産は用意したの？」

「いや、要らないと言っていたから何も買わない予定だが」

俺が正直に答えるとティータさんは額を抑えて天を仰いだ。

「女性の発言を真に受けてどうするの。ここは気持ちを察知して用意するのが紳士よ」

ティータさんは優しく叱りつけるが、俺は理不尽な心境になる。

せっかく選んで買ったのに、それが原因で怒られるのは辛いんだぞ。

「どうやらボクはまだまだボクのようなね、今から私がメモを書くからそこに記されたお店で書いてある品物を選びなさい。そして私が選んだことをエルファに教えちゃだめよ。あくまでボクがエルファのために選んだのよ。いい、分かった？」

ティータさんの剣幕に俺は頷く他なく、メモを記す間の十分ほど

俺は店内に留まり続けた。

「さてと、何か食べるか」

ティータさんと長く話していたこともあり、店を出た時にはもういい時間帯だった。

「さてと、どこで腹ごしらえしようかな」

どこかに良い店はないか、俺は左右を見渡しながら進んでいると一軒のパン屋が目にとまった。

そこは『浮浪者』でも入れるマークが示しているパン屋。そう、俺がこの世界で目覚めてから最初に口にした食料であり、キツカ達と出会うキツカケとなった場所でもあった。

「何かの縁だ、今日はここで済みますか」

あの時と比べて財力もあるので他にもっと良いパン屋で買うという道もあったが、俺はあえてここを選んだ。

パン屋の店員は『市民』の俺が入店したことで多少驚いたが金を払う客なので何も言わずに商品を渡した。

二セアソン前と同じ、ついでに飲み物を購入し、あの時に座ったベンチに腰を下ろす。

ふと、ユキと同じ浮浪児が来るかもしれないと辺りを見回したが、当然そんなご都合主義は起きるわけがない。

俺はそのパンを口に含む。

安い小麦粉にオオムギを混ぜているため普段家で食べるパンより味が劣るのは仕方のないことだろう。

しかし、俺はそのパンを特に不味いと感じることもなく全てを食べ終えた。

「そういえばサラが住んでいる鍛冶屋兼自宅もここら辺だったよな。ついでに様子を見に行くか」

俺は表通りの華やかな道を通り抜けて狭い裏道に入る。

その裏道は表通りの半分しか道の幅がなく、しかも日の光が入らないので薄暗く、湿っていた。

この道を通るとある商店街に出る。それは表通りの商店街と違って華やかさはなく、逆に不気味さを醸し出している。

ノクターン商店街——そう呼ばれていた。

ここは知る人ぞ知る商店街で、この裏道に並んでいる店の中には掘り出し物が多く存在し、下手すれば表通りの店よりも高品質かつ安価な品物が陳列されている。

が、玉石混合であり、治安も悪いのでよほど眼と腕に自信がなければ裏通りで買物避けた方が無難だろう。

「確かこの辺りだな」

商店街をしばらく進んだ後に右方を見ると目的の鍛冶屋があった。

キュリアス工務店

工務店の別名はリペア屋。

ここは武器のケアを専門に行っている上級者向けの店だった。誰だって愛着のある武器は存在する。しかし、長期間使っているとどうしても錆やガタが来てしまう。

いつまでも同じ武器を使っていたい、その想いを答えたのがリペア屋の存在だった。

「そういえば俺も初めの頃はよく利用したなあ」

武器のケアには高レベルの鍛冶スキルが必要なため、保守派である俺は最初の頃にリペア屋をよく利用していた記憶がある。

「まあ、全ては過去の話だけだな」

リペア屋を利用したのはログアウトができた昔のこと。生きるために必死で、武器への愛着がなかった今の俺はもう武器を壊れるに任せている。もし、この店を再度利用するときは伝説クラスの武器を入手した時だろうと考えていた。

「あ、師匠だ」

「おーい、元気かー？」

店に入るとサラが店番をしていたらしく、すぐに見つかった。

「どうしてここに來たの？ お客？」

俺の目を覗き込むようにして聞いてきたので俺は手を振って違うと答える。

「たまたま近くへ來たからな、ついでに顔を見ておこうと思って」

「へえ、よくここまで道に迷わずにこれたね、すごいよ」

サラが賞賛の眼差しを向けて來るが、それはエルファが受けるべきだろう。

どうしてか知らないがエルファはサラの住所を突き止めていた。

サラの奥にある鍛冶場から鉄を打つ音が響いてくる。その音からサラの父に迷いはなさそうだと判断した。

「繁盛していて何よりだ」

「まあね、うちの親父はああ見えて腕が良いから。それに常連客もいるのでそう簡単には潰れないと思うよ」

「そう思うのならもっと表通りに構えたらどうだ。親父さんなら大

丈夫だと考えるが」

俺の提案にサラは手を振って。

「あー、親父はああ見えて頑固だから。先祖代々続くこの場所から離れる気はなさそう」

「それはそれは」

俺は苦笑せざるを得なかった。

「親父さんに会いたいんだけど……やはり今回は無理そうかな」

「うん、今新しく入ってきた武器のリペアで忙しい。ああなると親父は何クロノもそれに没頭するから何を話しかけても無駄かな」

「そうか、それは運が悪い」

俺は肩を竦めた。するとサラが言葉をつなぐ。

「けど、親父も唯一武器に属性を付加できる師匠に会いたいと言っていたから今度時間が空いた時に来てね」

「ああ、分かった」

俺は鷹揚に頷いた。

「んー、でもね。最近武器のリペアが多いんだよね」

「何か不満なのか？」

俺の質問にサラは頬をポリポリとかいて。

「なんというか空気がね、ピリピリしている感じがするのよ。だからちょっと大事が起きそうな気がして」

「……」

俺はそれを黙って聞いていた。

俺の店でもここ半セアソンから武器の受注以来が多くなっている。最初俺は何でもないように考えていたのだが、武器の値段がどんどん値上がりしているのを見ると不気味さを感じる。

「……自警団の規模を増やすよう今度提案してみるか」

「ん？ 師匠、何か言った？」

「いや、こちらの話だ」

俺は首を振って何でもないとアピールした。

「サラ、今度家に来るときからは馬車を使い、その分のお金を俺が出すから心配するな」

「ええ、それはさすがに」

サラは遠慮するが俺は首を振って。

「これは師匠命令だ、嫌ならもう来るな」

こう言々とサラは頷くしかない、不承不承ながらサラは了解してくれた。

「……」

「……」

やはり少し気まづくなってしまった。俺はその雰囲気を開くために家から持ってきた物を披露する。

「そういえばここまで来て手ぶらというのも味気ないな。普通ならお菓子やらおもちゃやらを持ってくるべきだけど、サラにはこれが良いだろう」

「わあ、これってもしかして」

サラは俺が持ってきたある物に目を輝かす。それは普通の女の子であれば顔をしかめるであろう代物であるが、鍛冶職人に憧れているサラにはピッタリだろう。

「ミスリルの原石。これを上手い具合に加工すれば上質なミスリルが生成される」

魔力を帯びている不思議な金属——ミスリル。普通なら流通に乗らない代物だが俺は名が売れているため、たまにこういった貴重な原石を売りに来る商人が訪れる。今回のミスリル原石もその伝手によって手に入れた逸品だった。

「ありがとう、師匠。今度行くときには必ずこの原石をで生成した

武器を作って持っていくからね」

頬を紅潮させて喜ぶサラ、先ほどの険悪な空気もどこかへ吹っ飛んでしまったようだ。

だって、年頃の女の子がそんな原石を貰って喜ぶはずがないと考えるじゃん。サラにも乙女心があり、これを拒否するかと恐れていたが杞憂に終わったようだ。

「それじゃあ、また今度」

「うん、師匠。またね」

健気にもサラは店を出、俺が見えなくなるまでずっと手を振って見送っていた。

そして俺は来た道を引き返して元の表通りに出る。夕暮れ時のせいかお昼と比べて人通りが少なくなっているが、まだまだ活気は失われていない。

「さてと、気晴らしは出来たからもう帰るか」

俺はウーンっと伸びをして体の凝りを解す。この時間帯ならテイータさんが推薦する店に行って品物を買って帰ると、ちょうど夕飯時には家に着くだろう。

そう判断した俺はばれない様ローブに付いていたフードを深く被

り直し、人ごみに紛れながら目当ての店へ向かって行った。

その後、ティータさんが選んだ品物をエルファに渡すと彼女は微笑かに目を見開いた。

その反応を見て俺はティータさんに心の中で感謝の念を送る。

お土産が功を奏したのか、夕食時に弾くバイオリンは普段より優しい音色だったような気がした。

街中（後書き）

この回は伏線が結構張り巡らされています。
それを全部回収できるかどうか怪しいですが頑張っていきたいと思っています。

エルファの真意（前書き）

内容を大幅に変更しました。

これは主人公の話よりもエルファにスポットが当たっていますね。

エルファの真意

俺は相手によって最低限態度を変えないよう心がけている。

ちゃんと己の責務を果たしている者は例え奴隷であろうとも敬意を示すし、そうでない者は王様であろうとはそれなりの態度で対応する。

これを客と店について置き換えてみよう。

どれだけマナーがなっていない客でも商品を買ってくれるのであれば店は文句を言わない。

つまり俺が何を言いたいのかということ。

「何じゃ、この鈍らにそんなに金を払えというのか！」

「作らせておいてそれは無いでしょう、その金の剣の装飾も見栄えも貴族のあなたが設計した図の通りです。その通りに製造したわけですから必然的に額も跳ね上がります」

「お前は何様じゃ！？ 余を誰だと思っておる！！！」

「ユコイルⅡAⅡサマルフィール侯爵、大切なお客様です」

広間でふんぞり返り真っ赤になりながら、わざわざ第一区画にある貴族邸にまで足を運んだ俺に説教する二世のボンボン。年齢はおそらく二十を超えているだろう。普段から美味しい物を食べ、さらに運動をしていないので腹が出ていた。それでは剣を振ろうにも腹

につかえてしまうだろう。

人に注文通りの品物を作らせておきながらいちゃもん付けて値切ろうとする輩は例え貴族の称号を持っていたとしても言いたいことは言う。

大体その金の剣一本を作るのにどれだけの金が飛んだと思っているのか。その剣の材料となった金のインゴットと幾つかの宝石の額を合わせると軽く家一件が建つぞ。

「そう難色を示すのであれば品物はお返してください。そして、ユコイル様が望む代金で作る私より優れた職人に作ってもらえればよろしいかと存じます」

俺が作った武器は冒険者どころか貴族の連中も垂涎の的だ。その金の剣は実用性とはかく、装飾品として見ると一級品。

エルファが示した金額は目の前のユコイルに提示した額よりも三割ほど高い。ここで売れなくともエルファに渡せば他の場所で売ってくれるだろう。

「それでは、これで失礼します」

「そ、それは困る……」

俺が打ち切ろうとするとユコイルがうろたえ始めた。

「確かにその剣は世が予想していた金額より高かった。しかし、全く要らんというわけではない。どうじゃ、余が示した金額の半分なら支払っても良いぞ」

ふざけてんのか!!

俺はあまりの怒りに言葉が出てこなかった。

「いやいや、その剣は本当に良い出来じゃ。余の記憶の中でもこれ以上はそうあるまい。そうじゃ、半額は酷過ぎた、3／4程度でどうじゃ？」

俺が何も言わなかったことを素敵に解釈したユコイルは饒舌になって早口に捲し立てる。

やれやれ……本当に……貴族という連中はどうしてこんなに非常識なのか。

俺は怒りを通り越して呆れ返ってしまった。

「待て、どこに行くつもりじゃ」

「帰りますよ、これ以上貴族様のご高説に私は耐え切れそうにありませんので」

俺は品物である金の剣を仕舞うために剣に近づくのだが。

「ちょ、ちょっと待て！」

ユコイルはその巨体から信じられないスピードで俺と剣の前に立ち塞がった。

「……何の真似ですか？」

俺は内心呆れながら聞くと貴族であるユコイルは俺の足に縋りついて懇願し始めた。

「4／5、4／5が限界じゃ、これ以上の出費は母上に怒られてしまう」

家の事情など知らんがな！

「そこは母親とよく相談するべきでしょう」

俺は正論を言ったのだが、ユコイルはブンブンと首を振って。

「母上は最近恐ろしいのじゃ『いい年して結婚も働きもしない、これではご先祖様に顔向けできないわ』とキリキリしておる」

うわー、怖いな。サマルフィール家の妻は。

「そんな状態でそんな額の出費を出してみい、『あんたの様なごく潰しは士官学校で鍛えてもらいなさい！』と強制入学させるに決まっておるわ」

何故だろう、母親の選択は間違っていない気がする。

「サマルフィール家の事情には立ち入りませんが、私はキャンセル料を取らないのです。ですから他の職人に頼めば良いでしょう」

「父上の誕生日までそんな余裕はないのじゃ、父上は余のプレゼントを心待ちにしておるのじゃぞ」

だから知らんで！

「父上には大変お世話になっておるのじゃ、不機嫌な母上をいつもまあまあと宥めておる。だから誕生日には憧れていたそなたの剣を贈って労ってやりたいのじゃ。どうじゃ、親孝行じゃろう？」

心持ちは立派だけど、本当に親孝行したいのなら働いたらどうだ？ その方が遥かに両親を安心させられるぞ。

「参考にお聞きますが、今回のお金は一体どこから出ているのでしょうか？」

「ん？ 家からに決まってるでおろう。何を言っておるのじゃ」

首を傾げるな、クズが！

「はあ……自宅からですか」

ここはせめて自分のお小遣いからと言っておけよ。いや、お小遣いも家から出ているから一緒といえば一緒か。

「余に余裕はないのじゃ、友人達との付き合いやらナンシーに贈る宝石とやらで一杯一杯じゃ」

余裕ありじゃねえか！ と、俺は渾身の力を込めて突っ込みたい衝動を抑える。

「ナンシーとやらは彼女ですか？」

「うむ、そうじゃ。そなたと同じ市民だが結構可愛いし愛嬌もある。いつも『あれを買って』と甘えてくるのじゃ。」

それは彼女ではありません、向こうはあなたを彼氏でなくドル箱として見ています。

「えーと、なんて言えば良いか分かりませんが、贈り物は自分のお金で贈るべきですよ。あなただってナンシーがあなたから貢いだお金で贈り物を貰っても嬉しくないでしょう」

「ん？ 余は嬉しいぞ」

駄目だこいつ……早く何とかしないと。

「えーと、何と言いますか。この場合はお心の籠った品物——例えば料理を作るとか工作で何かを作るとか手作りの物が喜ばれると思います」

「何を言う！ 誇り高き貴族がそんな市民と同じような真似が出来るか！」

黙れニート！ お前が貴族の誇りなど口にするな！

「うーん……私から言えるのはユコイル様の母親の仰る通りあなた様は士官学校に行くべきではないでしょうか」

今なら言える、こいつの母親の選択は間違っていない。士官学校で根性を叩き直してもらって社会というのを知るべきだろう。

俺は頭が痛くなってきたので目頭を抑えていると。こいつは何を

勘違いしたのか泣きじゃくりながら感情に訴え始めた……もう貴族の誇りなど欠片もない、そこにいるのは二十を過ぎた大きな子供だ。

とはいえ、一応相手は貴族だから相槌だけ打っていたけど、不意に耳慣れた言葉がこいつから飛び出した。

「それにそなたに剣の作成を依頼するのにエルファとかいうメイドにいくら根回ししたと考えておる」

「は、エルファ？」

意外なところでエルファの名前が出てきて俺は目をパチクリさせる。

脈ありと悟ったのかユコイルは早口に捲し立ててきた。

「エルファは鬼じゃ、余の足元を見て無理難題言ってきたよ。そなたに剣を作成させるために、余から漏れたことをばらさない条件で父上の書斎にある金庫からいくつかの国家機密の書類を渡したぞよ」

「エルファ一体何やってんの!？」

我知らず俺は絶叫した。

「それだけではない、カールセンドー公爵やカルタドーク伯爵の息子達の弁によると彼らにも同じ様な取引をしたと聞いておる」

何も知らない二世のボンボンから国家機密に該当する情報を引き出すメイド。

一体エルファは何者なのだろう、もしかして他の国から送られた刺客なのか？

もしそうだとすると、俺は国家転覆の肩を担いだ共犯として処刑台送りだ。

俺は知らず、嫌な汗がタラリと首筋から落ちた。

とにかく、早急に真実を確かめる必要がある。何も知らないまま十字架にかけられるのは御免だ。

「……下手すると国にいらなくなるよな」

いつかはこの国から出る時が来るとはいえこんな形で出奔など冗談ではない。しかし、事によってはそうせざるを得ないだろう。

「お話はよく分かりました、ですから剣の代金は4／5で結構です。さあ、父親の誕生日を祝ってやって下さい」

とりあえず俺の脚に縋り付いているユコイルを引き剥がす。

「ほ、本当か？ おお、そなたは本当に優しいのお」

感激して涙を流すのは勝手なのだが、果たしてこいつは自分が行った事の重大性を意識しているのだろうか。国家機密の漏えいは下手すればお家取りつぶしの重罪だぞ。

「では、私はこれで失礼します。良いお誕生日をお迎え下さい」

……そして、ユコイル様の母親は一刻も早くこいつを士官学校に

入学させて下さい。

俺は心の中でエールを送りながら家路へと急いだ。

「エール〜ファ〜!!」

「お帰りなさいませ主。随分お早い帰宅ですね」

俺の鬼気迫る心境を知ってか知らずかそんな感想を漏らすエルファ。これはわざとやっているのだろうかという疑心暗鬼に駆られる。

「今日サマルフィールのバカ息子に会ってきた」

「はい、確かに今日は剣の納品でしたから」

全く表情を変えずに淡々と返すのを見ると俺の方が不安になってくる。

「そこでエルファの名前が出た。バカ息子曰く、エルファに国家機密の漏洩と代わりに俺との約束事を取り付けたそうだ。さてエルファ、何か弁解はあるか？」

これが事実ならさすがの俺も何か手を打つ、これは笑って済まされる話ではないからだ。

「お、おいエルファ。どこへ行く？」

が、エルファは俺の問いに答えずあるうことか主である俺に背を

向けた。

「何って掃除を始めるのですが。もう主の話は終わったそうなんです私は本来のメイドの業務に戻ります」

礼儀正しく背筋を伸ばして階段を登っていくエルファ。そのあまりの堂々とした態度に俺は毒気を抜かれてしまう。

「ああ、それと今回の件ですが。サマルフィール侯爵の御子息の話は本当です」

ですが。と、エルファは続けて。

「その件が原因で主が不利な状況に陥ることはないと言言できます」

「……」

エルファはこちらを振り向くことなくそう宣言する。

相変わらず淡々とした抑揚で話すのでエルファの真意が掴めない。

俺が呆然としてエルファが2階へ消えていくのを眺めることしか出来なかった。

父親の偉大さ（前書き）

最近迷走気味です。

今回も明るいとは言い難い内容ですので心してお読み下さい。

父親の偉大さ

「……激しい雨だな」

――夜

自分の部屋でランプに明かりを付け、眠気がくるまで安楽椅子で揺られていた俺はふと外を眺める。

窓には大粒の雨が打ちつけ、外の景色は自宅の庭の全貌さえ見渡せないほどの土砂降りだった。

「おお、雷だ」

突然一本の閃光が走り、次の瞬間には山が崩れ落ちた様な雷鳴が鳴り響く。

くわばらくわばら、念じていると俺の口からあくびが漏れた。

ようやく眠気が来たようだ。

俺は蠟燭の明かりを消してベッドに潜り込む。

さてと、明日は自分のレベルでも上げるか。

そんなことを考えながらうとうとしていると、突然ドアがノックされる。

「主、起きていますか？」

「エルファか、入れ」

「失礼いたします」

ガチャリと開けられて三つ又の蠟燭台を持ったエルファが慇懃に入ってきた。

フランス人形の様な整った顔立ちと鮮やかな緑色の髪が蠟燭に照らされてよく映える。外見はこれ以上ないというぐらいメイドなのだが、いかんせん俺を主として見ていない節があるのが玉に瑕だった。

「で、どうした？」

ベッドから起き上がった俺は続きを促すと、エルファは書類を読み上げるかのように淡々と語り出す。

「先ほど、玄関からドアを叩く音が聞こえたので外を確認すると、サラが玄関先で蹲っていました」

「サラが？ どうして」

俺は眠気も吹き飛ぶような大声を上げたが、エルファは動じずに先を紡ぐ。

「詳しいことは本人に聞いてみないと分かりませんが、長時間雨に打たれていたせいか酷く憔悴しています。この状態では話すのを酷だと判断しましたので、濡れた服を着替えさせて温かい飲み物を飲ませ、客間で寝かせました」

「そうか、御苦労」

サラがどうしてこんな夜中に来たのか、すぐにでも理由を知りたいが本人が話せる状態でないのなら無理させることはない。

「明日の予定は全てキャンセルすることにする。そして明日はサラの分の朝食も用意してくれ」

「はい、畏まりました。しかし、明日の予定といいますが実質予定なしなのでから格好付ける必要はないかと存じます」

うるさいな、言ってみたかったんだよ！

俺の無言の抗議が伝わったのかそれともいないのか。エルファの表情から判断することは出来なかった。

翌朝、サラの様子を気遣いながら俺はパンをかじる。

俺の向かいにいるサラは以前と打って変わって塞ぎ込む様子は痛々しい。

「サラ、食べないとスープが冷えるぞ」

俺は何とか会話しようとサラに話題を振るのだが、サラはずっと俯いていた。

一体どうすれば良い？

俺はバイオリンを弾いているエルファに助けを求めるが、エルファは何もしようとしない。

……本当に薄情だなエルファは、俺が困っているのを見て楽しいか？

エルファはあてにならないので、俺はどうしたもんかと言葉を考える。

そして出てきたのが。

「言いたくないのなら言わなくても良い」

無難な言葉だった。本当に、もうちょっと気が利かせられないのか、俺？

「部屋もあるし食事も心配するな。好きなだけ滞在してもいいから、気が向いたら話してくれ」

「……」

本当に、何か反応ぐらいしてくれよ。この空気は居た堪れないのだぞ。

俺は頭をバリバリと掻き毟る。ああ、どうして俺はこんな朴念仁なんだ。これならもっと女性と付き合って経験を磨いておくんだっ

「主、それは方向性が違います」

え？ 心の中を読まれた？

俺は驚愕の面持ちで振り返るのだが、相も変わらずエルファはそこに佇んでいた。

こうしている間にもこの気まずい雰囲気はどんどん進行していく。

仕方がない、あれを試すか。

俺はコホンと咳払いして立ち上がり、サラの隣にまで移動する。

「……………」

サラは放心状態なので、俺が隣に来て何も反応しなかった。

本当に、やって良いのか？

俺は最後の確認という意味でエルファに視線を送ると、エルファは微かに顎を縦に振った。

ええい、後は野となれ山となれだ。失敗しても知らん！

俺はサラの手を掴んで引っ張った。

突然手を引っ張られたサラはバランスを崩し、俺の方向へと吸い寄せられる。

「はっ、え？」

サラは俺より身長が高いが、今は椅子に座っている。だからサラの頭がちょうど俺の胸あたりに来た。

「ちょ、ちょっと待ってください師匠！？ 何をやっているんですか？」

サラがバタバタと暴れるが、俺はサラを離さない。

体は十四歳だが、普段から魔物狩りや武器作りで鍛えられた体はこの程度の抵抗でビクともしないぞ。

「大丈夫、大丈夫だから……」

俺はそう囁きながらサラの背中を優しく撫でる。そうするとサラは初めのうちは暴れていたものの、徐々に大人しくなり、最後には肩を震わせて俺の服を濡らし始めた。

「ふむ、少々ありきたり感があり、さらに行動も遅かったですがりギリ及第点です」

それら一連の行動をそう論評するエルファ。

何故だろう？ 何故か殺意が 沸いてくる。

俺はエルファを食堂から叩き出そうとした。が、エルファは俺が全力で押しても岩のようにビクともしなかった。それでも俺は諦めずに押し続けているとサラが「もう良いです」という形で仲裁に入

って現在に至る。

「家を追い出されました」

サラはそう口火を切って昨日のことを話し始めた。

昨日の夕食時にサラが両親と共に俺の鍛冶場で作った武器について話していると、突然親父が「これ以上ユウキ殿の家に行くな」と言ったそうだ。

もちろん当初は冗談だと思ったそうだが、父は冗談など言わない職人筋の人間だ。サラどころか母親さえも父は本気だということを悟って翻意を促したがすべて無駄に終わってしまった。

「最後通牒という意味でこの家に残るか師匠の家に行くか決めろと突き付けられました。もし家に残るなら師匠のことなどスッパリ忘れろと、師匠の家に行くならばもうお前はうちの子じゃないと宣告されました」

二者択一。

究極の選択の一つだろう。

「私がそんなこと決めたくない」と喚くと、父は突然私の腕を掴んで外へ放り投げました。そして私が呆然としている間にドアをピシャリと閉められたのを覚えています……ごめんなさい、そこから先の記憶が曖昧です。私は家の扉を叩いていたはずなんですけど、気が付いたら師匠の家で寝かされていました」

そう言ってタハハと笑うサラ。無理にでも笑おうとしているのか顔

がきこちない。

「……」

俺はすべてを聞いて暗澹たる気持ちになる。

職人の間で女を入れることが法度なのは周知の事実。

俺も当初のころ、サラを鍛冶場で見学させていたことを職人組合から相当叩かれた。おかげで一時は俺の武器を持っている奴はこの街の鍛冶屋は相手にしないとここに来る商人や冒険者に通知され、「ユウキⅡカザクラの作った武器は欠陥品」と誹謗中傷の連続だった。

あの時は本当に辛かったな、金など経済的な面でなく精神的なダメージが大きかった。

幸いにも俺が属性を付加させた武器を生成できることが広まり、職人組合よりも俺の武器を選ぶ者が増えたのでそういった弾効運動は潜めたはずだが。

「それにしても何故今頃なのか、サラの親父さんはあの時でもビクともしなかったのだが」

危害はもちろんサラの自宅にも向かっていた。そこでも俺と負けず劣らずの非難を浴びたのだがサラの親父さんはサラがここに来ることを禁止しなかった。

「この無神経が」

どうしてエルファに毒づかれなければならないのか、全然わからん。

しかし、突然の出来事に戸惑っているのは俺も同じ。これは一度親父さんと話す必要がある。

よし、行くか。

俺は自分に気合を入れると勢いよく立ち上がった。

「サラ、俺はちょっと用があるから席を外す。何か困ったことがあればエルファに申し付けてくれ」

「え、ちょっと、どこに行く気ですか」

俺の突然の行動にサラは動揺した。ここでどこに行くのか話すのは得策でないと判断した俺は嘘をつく。

「日課の散歩だよ。だから心配しなくていい」

サラが次の言葉を述べる前に俺は背を向けて食堂を後にした。

「こちらだよ」

前に来たときは店先で終わってしまったため、奥まで入ることはなかった。

俺はサラの母親に案内されて小さい居間に案内される。

そこは年季の入っており、多少汚れているが、日ごろの掃除のたまものなのか見かけほどもろくは無さそうだ。

「主人はもうそろそろ来ると思うねえ」

サラの母親は身長こそ俺と同じだが、横が俺の二倍ほどある。かといっても、それは不快に感じることはなく、逆に包み込む暖かさを内包しているように見えるのでむしろ安らぎさえ感じた。

「ありがとうございます、おばさん」

ふっくらした顔立ちの、笑顔が似合いそうな顔なのだが昨晚の件が影響しているのだろう。多少やつれて見えた。

「……」

俺はサラの母親が淹れてくれた水を口に含みながら静かに時を待つ。

すでに賽は投げられた、オロオロしていても仕方ない。

二、三口ほどコップを傾けると、親父さんが奥からノツソリと姿を現した。

例えるなら岩。体は鋼のように鍛えられ、服の上からでも筋肉が盛り上がっているのを確認できる。そして、その瞳はギラギラと輝いており、生半可な覚悟ではその瞳の前にたちまち吹き飛ばされてしまうだろう。

「こんにちは、おじさん」

俺は背筋を畏まらせてまず始めに挨拶をした。

「サラの師匠を務めているユウキⅡカザクラです。よろしく願います」

「キュリアス工務店のジドⅡキュリアスじゃ。ユウキ殿の活躍は耳に届いている」

本人は何気なく言っただけだが聞いているこちらとしては体の奥にまで響く重低音の響きがある。さすが長い間この店を守ってきただけのことはある。貫禄が滲み出ていた。

「サラについて伺いました。事情を聞いてもよろしいでしょうか」

「話す必要はない」

つっけんどんに突っ張られる。その言葉に俺はどう反応していいか困っていると、さらにジドさんが言葉を重ねる。

「あいつとはもう親子の縁を切った。もう赤の他人じゃ。ユウキ殿が煮ようが焼こうがわしには関係あるまい」

どうやらそれで話は終わりのようだ。ジドさんは立ち上がろうとしたので俺は慌てる。

「ちょっと待って下さい。サラは、サラは突然ことで混乱していました。せめてサラに何か言葉を掛けてあげてください」

「サラという娘は知らん。だからワシには関係のない話じゃ」

どうやらこれで話は終わりらしい。ジドさんは立ち上がって背を向けた。

やばい、終わりにしてはいけない。俺はまだ何も知っていない。

どうする、どうする。

考え抜いた先に出た言葉は。

「サラは泣いていたんだ!!」

俺は敬意をかなぐり捨てて腹の奥から叫んだ。ジドさんの足がピタリと止まる。

「いつもは明るく、気丈なサラが見る影もないくらい憔悴していたんだ! あんたは何も思わないのか!」

「思わんわけあるまい!!」

大地が揺れたと思うぐらいの一喝。俺はすぐにでも逃げ出したい衝動に駆られたが、ありったけの力を込めてジドさんを見返す。

「わしはな! サラが赤子の時から知っておる! サラが生まれてから今までの間! サラのことを考えんかった日など! 一日もあるまい!」

こちらを見下ろしながら放つ一言一言が魂を抉り取るような衝撃を持っている。怖い、止めたい。そんな弱気な感情が胸の奥から出

てきてしまう。

「だったらこそ！ 何で勘当なんかしたんだ！ サラを大切に思うなら！ 泣かせるような真似をするなよ！」

「黙れ若造！ 青二才が知ったような口をきくな！」

人間は本当の恐怖を感じるとその場に凍り付くことを思い知った。ジドさんから発する冷たい怒りに俺は身動きすら出来ない。

「サラは貴様のことを話すたび目をキラキラさせよる！ いつかは貴様のような武器を作りたいと訴えておる！ 女は職人になれないのは知っておろう！ 貴様が、貴様さえいなければこのような事態は起こらなかった！ 貴様はそのことを理解しておるのか！」

ジドさんの魂の叫びに俺は狼狽えてしまう。確かに俺さえいなければサラは鍛冶屋の娘として過ごし、誰かと結婚して幸せな生涯を歩んでいただろう。

しかし、俺に出会ってしまったからサラは鍛冶職人になりたいという夢を持ってしまった。平凡な人生を俺が壊してしまった。

サラの人生を狂わせた責任は俺にある。そして、だからこそここで引くわけにはいかない。鍛冶職人の道を希望したサラのためにも俺はジドさんを説得させる必要がある。

「……今しか知らない」

本当の恐怖を感じながらも逃げてはいけない場面が存在する。俺はガクガクと震えながら、しかし決して視線を逸らさずに上を向い

た。

「俺は『今』しか知らん！ 『過去』も『未来』のことも分からん！ だからこそ言える！ 『今』のサラは俺が誰よりも理解している！ そして、『今』のサラが何を望んでいるのかも！」

「……」

「……」

しばらくの間、俺とジドさんは見つめあったまま動こうとしない。俺のほうはほぼ空元気だったが、ジドさんはどうなのか分からない。まだ底があるのかもしれないが、それでも俺は最後まで付き合おうと決めていた。

「……やはりユウキ殿は見かけによらず芯が通っているな」

ジドさんがそうポツリと洩らして目を瞑った。

「ユウキ殿のような方であればサラを安心して任せられる」

先ほどの剣幕が嘘のように消え、ようやく息が楽に据えるようになる。

「それならサラに会って下さい。そして、家族三人で話し合うべきです」

俺はそう提案したが、ジドさんは寂しそうに首を振る。

「サラが帰ってくればわしらから離れなくなるじやろう、それだとサラの夢を壊してしまうからそれは無理じゃ」

「そんな、それとこれとは別でしょう。鍛冶職人と両親、今まで通りに両立できますよ」

「はっはっは、ユウキ殿よ。わしはサラのことを誰よりもよく知っていると言ったであろう。サラは優しく、そして弱い子じゃ。優しさがゆえに自分の夢よりもこの老いぼれを選んでしまう。そして、弱いがために鍛冶職人への未練を抱きながら腐っていくことは容易に想像できる」

「それは……」

俺が何と言おうか言葉に詰まっているとジドさんは続けて。

「サラにこう伝えてくれ『生まれてきてくれてありがとう』と」

ジドさんは最後にそう言い残し、その場を立ち去った。

「お水をありがとうございました」

俺はしばらくその場で呼吸を整えた後に席を立つ。

もうここに来ることはあるまい。

何となくだが、そんな予感がする。

「お待ち」

俺はそのまま立ち去ろうとしたが、その背に声が掛けられる。何だろうと思って振り返るとサラの母親が一抱えある荷物を両手に持っていた。

「サラの私物だよ。身一つで飛び出していったから、ユウキさんにさぞかしご迷惑を掛けているだろう。少しでも軽くなればと思ってね」

その中にはサラの服といくらかのお金が入っていた。金は要らないと断ったのだが、サラの母親は頑として受け取ろうとしない。

こういうところは両親に共通しているんだなあと心の中で苦笑していたが、手荷物の奥の方にある一品を見て俺は目の色を変える。

「おばさん、これはさすがに受け取れない。これはサラがいた証として自宅に置いておくべきだ」

俺が突き返したのは先日贈ったミスリル原石から作られたナイフ。形状も切れ味も無骨だが、丹精込めて作られたことは容易に想像できる。

「おばさん、サラについては安心してください。必ず後悔させません」

俺はサラの母親の手を握りながら力を込めて訴えた。

「本当に、本当にサラのことをよろしくお願いします」

サラの母親は目に涙を浮かべながら腰を深く折り曲げて俺を見送っていた。

「おかえりなさいませ、主」

「サラはどこにいる？」

「サラ様は客間です」

自宅へと帰った俺はエルファにサラの居場所を聞いて客間へと向かう。

サラはまだ元気がなかったものの、朝から大分回復したようだ。

「これ、サラの母親から」

俺はまずサラの母親から受け取った荷物を渡す。

「……お母さん」

サラはそれを見るとうつすらと涙が滲んできた。

「後、父親からの伝言だ『生まれてきてくれてありがとう』」

俺は居心地が悪くなったので背を向けながらジドさんからの伝言を言った。

案の定、鼻をすすする音が後ろから聞こえ、さらに嗚咽が漏れてきた。

「明日は剣を作る。ちょうど良い機会だから次はサラが作ってみろ
これ以上この場に居るのは耐え切れない。

俺は早足でその場を後にした。

扉を閉めると同時に部屋から鳴き声が聞こえてきたのは言うまでもない。

「やれやれ、今日は疲れた」

俺は歩きながらそう呟く。正直な感想、一日中魔物狩りを行った日よりも消耗が激しい。

「ん？ エルフア、何か用か？」

途中にエルファが待ち構えるように立っていたので俺はそう声をかける。

「いいえ、何も。ただ、今日の主は主らしくございました」

「それはありがとう」

俺は艶然と微笑むエルファの横を通り過ぎて自室へと戻っていった。

父親の偉大さ（後書き）

昭和の父親ってこんな感じでしょうか。

平成生まれの私には父の恐ろしさというのがよく分からないんですよね。

王国の内憂（前書き）

9月22日 大幅に改稿しました。

王国の内憂

有名になるということはメリットよりもデメリットの方が大きい。自分の名声が高まるにつれてその光に吸い寄せられる害虫も出てきてしまう。

「ふむ、どうしても払えないと」

俺はヴォルダーク伯爵に最後通告を行う。

今回も無理矢理貴族からのお呼び出しによって強制的に剣を生成する羽目になっていた。

「くどい、何度言えば分かる！」

俺の眼前でふんぞり返っているのは痩せぎすな壮年の男性。落着かないのか視線をキョロキョロさせており、常に貧乏ゆすりをしている。

鶏がらの様なヴォルダーク伯爵は甲高い声音で俺の質問に異を唱えた。

「それではこの話を無かったことにして下さい。払えないのであればこの『プラチナソード』はお渡しするわけには参りません」

「待て、貴様は約束を破ろうと言うのか？ 注文したのはこちらじゃぞ」

「何を言っているのですか。こちらは適正な価格を示しています。

金より高価な白金を使えばどうなるのか予想が着いたでしょう」

そこまで言って俺は用意した品物に手を伸ばした。

「……貴様は貴族に対する礼儀というのを欠けておるな」

あまりの怒りに顔が青白くなっている。というか、沸点低すぎだろ、よくそんなんで生きていられたな。

「お客様に対しては礼儀というのを弁えております」

つまりお前は客ではない、クレーマーだ。ということと言外に伝える。

「よし、分かった。それなら遠慮はいらん。皆の者、出会え出会え」
ヴォルダーク伯爵の号令と共に控えていた私兵がわらわらと集まってきた。

「確認しておきますが、これは私に対して喧嘩を売るという意味ですか」

「違うな、愚か者を矯正させてやろうというありがたい慈悲だよ」

金が払えないからと言って暴力に訴える行為のどこが慈悲なのか。俺は笑いを堪えることが出来なかった。

「貴様、何を笑っておる!？」

ニヤニヤと、小馬鹿にしたような目つきで笑っているとヴォルダ

ーク伯爵が目を向いた。

「お前ら、遠慮することはない。奴を痛めつけてやれ」

その言葉と同時に一斉に襲い掛かってくる私兵。

が、彼らの攻撃は俺にあたることはない。いや、正確に言うと私兵は俺の周りを攻撃しているのだ。

「何をやっている！ お前らは馬鹿か！ そこだ、そこ！」

ヴォルダーク伯爵は私兵がなぜ俺の周りを攻撃するのかわかっていないのだろう。いくら攻撃しても俺にかすりもしない、私兵も不思議な事象に慄いている。

装備..

武器 メンタルイーター

防具 陽炎のマント

頭 なし

足 アサシンの靴

装飾品 守りの指輪

陽炎のマントというのは幻惑魔法が埋め込まれており、相手に自分の姿を誤認させる機能がある。装備者に近づくほどその効果は大きくなるので、ヴォルダーク伯爵と私兵ではその認識に差が出ていた。

「やれやれ、こうなれば私も応戦せざるを得ませんね」

そう言って取り出したのは刀身の部分が紫色の煙で覆われている不気味な剣。俺が一振りすると刀身の部分は煙らしく遅れてついてきた。

「わ、分かっているのか？ 貴族及びに貴族の私兵に傷つけるのは重罪だぞ」

市民は貴族に逆らうことができない。それは法律で明文化されており、例えどんな理不尽な目にあおうとも、市民に反撃は許されなかった。

「ええ、分かっていますよ。私は貴族やその私兵を肉体的に傷つけようと考えていません」

その言葉と同時に俺はメンタリーターで近くにいた私兵を薙ぎ払った。

私兵は最初、ポカンとしていたが、段々と顔が驚愕に染まり、最後には床でのた打ち回りながら叫んだ。

その私兵は斬り後どころか掠り傷さえない。しかし、その表情は鬼気迫るものがあり、容易に嘘と判断することは出来なかった。

「な、何だ？ その剣は」

目の前で起きた不気味な現象に私兵すら後ずさる。

「なあに、対貴族用ですよ。決して相手の肉体を傷つけることのない剣です」

メンタリイーターは刀身が煙なので相手にダメージを与えることはない。ただ、この武器の生成のために必要な素材を持つゴーストナイツは幽体で、回復アイテムもしくは光属性しかダメージを与えられない特性を持つ。

メンタリイーターで斬られると体は何ともないが、その奥の精神に作用して本当に斬られたと錯覚させることができた。

……この武器を作成するためだけに俺は『忘れられた墓場』を夜にうろつかなければならなかったのだぞ。生者の俺によって来るゾンビが怖いこと怖いこと。本当に、ホラーゲームだったよ。銃があればど欲しいと思ったことは無かった。

相手が恐れていようともこちらが加減する道理はない。俺は次々に私兵を屠っていく。

「まさか、その私兵は私が選抜した猛者だぞ。レベルも全員五十は超えているはず……」

私兵が面白いように倒れていくのは、俺の次の動作を読めなかっためだった。

そして、読めなくしているのはアサシンの靴の効果。これは音もなく標的を仕留めるアサシンの如く、筋肉の微細な動きや瞳孔の移動など相手に情報を全く与えなくなる。

これは熟練した相手ほど効果が大きい。ヴォルダーク伯爵の私兵のレベルの平均は五十前後、そこまで高ければ頭で考える前に勘で動く、そして、その勘を働かせるための情報を与えないのだから、赤子の手をひねる赤子の如くだった。

そして、たまに攻撃を食らうことはあるが、それは守りの指輪のおかげでダメージは皆無に等しい。

――十分後

広間に立っているのは俺だけになり、その周りには斬られたように錯覚している私兵が転がっていた。

「さてと」

俺は改めてヴォルダーク伯爵に向き直る。

ヴォルダーク伯爵は自分を守る私兵がいなくなったことを知り、甲高い悲鳴を上げた。

「この剣はご存じのとおり、物的証拠を残すことはありません。つまりどういふことかお分かりですか」

「わ、分かった。提示された金額の三倍払う。だから止めてくれ」

「三倍は当然のこと、そして他に額の十倍を払う旨の契約書を書いてもらいましょうか」

「十倍！ 貴様は悪魔か」

「ご安心ください。そちらは執行させようと思いません、保険のためです」

「そんな契約書にサインなどせんと言えば？」

「地獄を見てもらいましょうか。言うなれば等活地獄、自我を喪失するほど気が狂うまで斬られてもらいます」

「あ、悪魔め……」

どちらが悪魔だか、約束を破ったのはお前だろうが。

「さあ、どうします？」

俺が剣を振り上げる仕草を見るとヴォルダーク伯爵は観念する。

「それではこの契約書にサインを。ああ、血印もよろしく願います」

俺は予め用意していた契約書の中の金額を加算させてヴォルダーク伯爵にサインさせる。

「念のために忠告しますが、決して約束を反故なさないように。でないとこの十倍の契約書を訴訟貴族に売り渡しますから」

貴族と市民との契約は一方的に破棄されようとも泣き寝入りを決め込むしかないが、貴族と貴族とは違う。契約は必ず履行されなければならず、破った貴族は罰せられる。

そのため、市民による訴えを代理で行う——訴訟貴族と呼ばれる貴族が存在していた。

俺の本気が伝わったのかヴォルダーク伯爵はコクコクと頷いてくれた。

さて、もうここには用はないから家に帰ろうか。

俺はマントを翻して広間を後にした。

「お疲れ様です」

帰宅した俺に頭を下げるエルファ。本当に、エルファはどんな時でも変わらずに接してくるな。

「あ、師匠。お帰りなさい」

エルファとともに床を掃いていた執事服のサラが俺に気づいて顔を上げた。

サラは先日 の件によって俺の家に住み込んでいる。

俺はサラに働かなくていいと言ったのだが、サラは「さすがにそれではご迷惑です」と、武器を作らない間はエルファの手伝いをしていた。

……俺が言うのもなんだが、サラの執事服は似合っているな。ボーイッシュなサラに似合うよう、既存の執事服を女性っぽくなるよう色々改造してみたのだが結構いい線をいっていた。

「やれやれ、この変態主が」

……はい、エルファさん。そのことを否定できません、そして何度もう言うように心を読まないでください。

サラはエルファの言った意味が分からなかったらしく、可愛く首を傾げていた。

うん、分からなくていいよ、もし知ったらサラは俺を軽蔑すると思うし。

「また貴族が約束を破った。最近の貴族のモラルはどうなっているのか」

夜――夕食を食べていた俺は今日の出来事を二人に話す。

エルファは耳だけを傾け、そしてサラは食事の手を止めて聞いていた。

「へえー、そんなことがあったんだ」

「そんなことって、これでもう五回目だ。いい加減辞めたくなる」

「辞められないの？」

サラが率直な疑問をこちらにぶつけてきたので、俺はどう答えようかと気を揉んでいると。

「『貴族の命令書』に市民は逆らえないのです」

エルファが代わりに答えた。

貴族からの命令は絶対である。もし貴族からの招集がかかれば応じなければならず、どれだけ理不尽な要求でも、それを怠ると市民が罰せられてしまう。

「俺が一度断ると次は貴族の命令で来るからな、どうしても断れない」

「すごく理不尽ですね」

サラが無然とした顔で腕を組む。

「と、言いましてそんな代物は滅多に発動されるようなもので無かったのです。何故なら、それを乱発すると市民の国に対する忠誠が著しく悪化しますからね、しかしどうも最近……」

「国王が病に臥してから貴族の横暴が酷くなっているからな」

最近、シマール国の国王が高齢のため病に伏して倒れ、次の国王に座る者が派閥を組んで争っている。おかげで国の行政は滞り、治安も悪化していた。

「今のところ有力なのは貴族からの支援がある第一皇子で宰相のフォルター、ついで騎士から推されている第二皇子で騎士団長のキルマークだな。確か他にも国王の子供が六人ぐらいいたな。そして、唯一王女がいたけど。ええと、名前は……」

「ベアトリクス様です」

「おお、その通りだ。しかし、よく覚えていたな」

エルファの突然発した言葉に俺は驚く。

口調こそ普段と変わりない冷静そのものなのだが、心なしか動揺しているように聞こえた。エルファが俺の心を読めるように、俺も少しはエルファの心の機微が分かるようになっていた。

「え？ 王女なんていたの」

俺はエルファに王女と何かあったのか聞こうとしたが、先にサラから続きを促されたのでそちらを進める。

「知らないのも無理はない。何せベアトリクス王女は病弱だから表に出ることなど滅多に無いからな」

「……そのあまりの恐ろしさに閉じ込めざるを得ないのです」

エルファが何かを呟くが小さすぎて聞き取れない、だから俺は続けて。

「まあ、例えばベアトリクス王女が元気であったとしても他の国との政略結婚に利用されるのが決定しているから次の国王になど指名されることはまずないな。しかも年齢も俺と同じ十四だから若すぎる」

「ところで話は変わるけど、もう王様が死ぬのは決定しているの？」

「国中の薬剤師や僧侶を掻き集めても無理だったからな、世間ではもう諦めている」

「師匠でも？」

「いや、俺はまだ方法があると考えているぞ」

「本当ですか？」

「またもエルファが口を挟んできた。一体どうしたんだ、王族と何か関係があるのか。」

俺は訝りながらも口を開いて。

「伝説の薬、エリクサーを調合できる技術を俺は持っている。だから材料さえ揃えば作ることができる」

「最近調合レベルもようやく八十に達したから全薬の調合が解禁になった。これで鍛冶以外にも食える手段が出来た。」

「国のごたごたなんて俺には関係のない話だ、下手に突っ込んで厄災を招くのは御免だからな」

「どうせ後数か月でキッカ達が卒業するんだ。俺はそれを以て拠点をジグサールへ変える。幸いにもジグサールはまだこの国の属国だから煩わしい許可書を取らずに済む。」

「属国というのは、表向きはその国の領袖が代表を務めているのだが、実務など裏方はシマール国の送り込んだ者で占められており、実質傀儡国といっても差支えなかった。」

「さて、この話は終わりだ。エルファ、後片付けを頼む」

どうせ滅びゆく国だ。どうなろうと興味がなかったので、俺はそう打ち切って立ち上がった。

俺は気が急いていたのだろう。だからこそエルファの瞳に宿った暗い光に気付くことはなかった。

「主、起きて下さい」

数日後の夜。

ゆさゆさと体を揺らされて夢心地だった俺はまどろみから目を覚ます。

そこにはエルファが俺の体を右へ左へ揺らしていた。

「一体どうしたこんな時間に」

まだ日も昇っていない時間帯にエルファが俺を起こすのは珍しい。

「突然のご無礼失礼します。主に会わせたい人物がごいますのでこの夜遅くに参りました」

「明日にしろ、俺は眠い」

そう言って会話を終わらせようとしたが、エルファはそんな俺を引き止める。

「もし、主がお会いになるのを嫌がるのであれば、私は命に代えても会わせなければなりません」

いつもの淡々とした様子とは違う切羽詰まった口調に俺は目を覚ます。

エルファがそこまで言ってしまう相手に興味を覚えたからだ。

「そうか、それなら会おうか」

俺はベッドから出て外出用の服を羽織った。

外に出ると、すぐそこに馬車が待機してあった。

二頭連れの立派な馬車だが、馬も柄も闇に溶けるような漆黒の色で統一されている。

カーテンを閉められたので外の様子は確認できず、そのまま揺られること数十分。

そして着いた場所は。

「……お城かよ」

第一区画の先にある本拠地。普通の市民なら生涯に一度、立ち入ることが出来るかどうかのカルギュラス城が俺の目の前にあった。

「こちらです」

エルファを含めた他数名が俺を取り囲むようにして先導する。

重厚な石造りの壁や大理石の床。ところどころに飾られる美術品の値段はそれだけで市民が一生遊んで暮らせるだろう。

廊下を進み、階段を上り、次は下り、と自分が今どこにいるのか分からなくなった頃によりやくエルファは止まった。

「お入りください」

エルファが扉を開けて中へ促す。他はどうするのかを確認すると、直立不動でその場に立っていた。

俺は何となくこの先の予想がついていた。先日エルファと会話した内容からおそらく待っているのは。

「はあーい、ボク。お元気？」

……予想の斜め上を上回る展開に俺はずっこけてしまう。

「ティータ、お遊びは止めなさい」

エルファが鋭く注意した。

「ごめんごめん、つい出来心で」

テヘッと舌を出すティータさん、エルファとティータがこの城でごく普通に会話しているのを見て俺は混乱する。

「え？ 何？ どういうこと？ ティータさんが王女なの？」

王女の年齢は十四歳。しかし、ティータさんはエルファと同じ十七歳。全然違う。いや、待て、クロスやサラの例があるから見た目で判断するのは良くないな。

「ごらんなさい、主が困っています」

俺の様子を見たエルファがため息交じりにそう呟いた。

「えーと、ごめんねボク。最初に言っておくけど私は王女じゃないよ」

ああ、良かった。何故か安心する。

「けど、私がただの薬屋のお姉さんじゃないことは事実。私は『草』よ、市井を見て回って市民の動向を確認する役目を持つ一人、ボクのことは最初から注視していたわ」

ティータさんにそんな顔があったとは。俺は驚きを通り越して恐怖する。

「あー、誤解しないでね。『草』と言っても基本的に市民とは変わらないわ。ただ王宮とのパイプがあるだけよ」

手を左右に振ってはにかむティータさん。王宮とパイプを持つだけでも十分凄いのだが。

「話を戻すけど、ボクがどうしてもここに呼ばれたか想像はついてる？」

「何となくはね」

ティータさんの存在は予想外だったが、それ以外は間違っていないだろう。

「そう、なら話は早い。だからまず王女様にお目通りさせるわ」

そう言ってティータさんは一つ頷き、俺の横に並ぶ。

そしてエルファは逆に俺と対面へ歩を進める。

「ベアトリクス王女が御出座になります」

エルファが凜とした声で宣言すると同時に隣のティータさんは膝をついて頭を垂れた。俺もそれに習う。

ヴェールの衣擦れ音が聞こえたので、おそらく奥にいた人物が出てきたのだろう。

コツ、コツ、と。ま俺たちの方へ靴音が近寄ってくる。

「面を上げなさい」

涼やかな、しかし有無を言わさない声が響く。

純白のドレスに身を包み、銀色の髪を輝かせた姫が目の前に立っている。長い幽閉生活のため肌は絹のように白いので儂げな印象を与え、半眼に閉じた澄み切ったサファイアの瞳が俺を捉えた。

「シマール国王女、ベアトリクスⅡSⅡシマールです。我が父、国王陛下の病状を回復させる方法があると聞いてユウキⅡカザクラ殿

を招聘しました」

王国の内憂（後書き）

エルファを拉致でなくお願いに変更しました。

絶対悪（前書き）

えーと……前回による終わり方によって
思いつきりダークへと突っ走る結果となりました。

とりあえずここが折り返し地点です。

何とかユーザー様を飽きさせず、興味を失わせず
頑張っていきます。

絶対悪

世の中にはカリスマと呼ばれる先天性の素質を持った人物がたまにいます。

曰く、その人物がいるだけで場が支配され、その人物のためなら命を投げ出すこともためらわなくなるという。

俺はそれに懐疑的な方だった。

カリスマと呼ばれる人間というのは、群衆の気分をハイにさせたり連帯感を意識させたりするなりして場の空気をコントロールすることに長けた人間だろう。

場を上手く作れる人間をカリスマ性があると俺は考えていた。

だが、俺の目の前にはそういった固定概念を粉々に打ち砕く存在がいた。

シマール国王女、ベアトリクスがそれだ。

エルファが彼女を真の主と呼んだのも理解できる。俺と彼女では月とすっぽん、太陽と花火だ。ベアトリクスを見つめていると、何もかもがどうでもよくな……

ゴンツという鈍い音が部屋に響き渡った。

ベアトリクス以外の全員が不可解な表情を作る。

「いや、虫がいたのですね」

俺は突き抜けるような痛みを悟られぬよう無表情を装った。

左手の感覚がない、右手に渾身の力を込めて左手の甲へ振り下ろしたのでおそらく折れているか、よくてもひびか。

後でポジションを飲まなくてはならなかったが、とりあえずベアトリクスからの魅力から逃れることができたので良しとしよう。

「ふむ、あなたは面白い人ね」

ただ一人、ベアトリクスが俺の奇行をそう評価する。

「私に会った人間は二通りの行動を取る。兄上方のように嫌悪して私をいなかったことにするか、それともその二人のように私に崇拝するかどちらか」

ふとエルファとティータの様子を確認すると、二人とも熱に浮かされたようにぼうつとして、ベアトリクスの動きを一挙手一投足で食い入るように見つめていた。

二人の気持ちは俺にも理解できる。

目が離せないのだ。

ベアトリクスの存在があまりに美しく、無邪気で、そして恐ろしすぎた。

そして、その二人を心酔させている張本人は両手を広げて謳うよ

うに言葉を紡ぐ。

「しかし、あなたは違う。私に恐怖を感じながらも目を逸らさず、陶酔の感情を持ちながら嫌悪を忘れてはいない始めての反応をしてくれた。いいわ、ユウキ、私はあなたを気に入った」

アハハハハハ。と、王女は何がおかしかったのか笑いながら回りだした。

どういうことだ、何がおかしい。

俺はベアトリクスの突然の奇行に声すら出せない。

「ベアトリクス様、横道に逸れています」

エルファがそんな籐の外れたベアトリクスを諫めた。

「おっとと、そうね。本題に入らなきゃね」

コホン、と咳払いして居住まいを正すベアトリクス。

「さて、ユウキは我が父の病状についてご存知か」

俺は肯定の意味を込めて頷く。国王が病に伏せていることは周知の事実であり、カリギュラスに住む全員がその行く末を心配していた。

「私は先日、草の一人であるエルファからあなたが万病を直せるエリクサーを作れると聞いた。それに間違いない？」

俺はまた首肯。そう聞いたベアトリクス王女は美しい美貌をニヤ
ーッと歪ませて。

「じゃあ私から言わせてもらうわ、ユウキはエリクサーを作らない
で」

……………は？

「聞こえなかった？ 私は我が父の病を治さないでと言ったの」
マジマジと見つめてベアトリクスは同じことを繰り返す。

こいつは正気か？ いったい何を言っているんだ。

予想とは違う話に俺は混乱の極みに陥る。

「ベアトリクス様、ユウキ様は混乱しています。理由を説明してく
ださい」

「仕方ないわねえ、一回しか言わないからよく聞いてちょうだい」

「ベアトリクス王女、顔が近すぎるんだが」

俺を真正面から見ようと屈みこんで俺と瞳を見据える。吸い込ま
れそうなサファイアの瞳が怪しい光を放つが俺は折れた左手を動か
し、その痛みで正気に返らせる。

「へえ、ここまでされてもまだ堕ちないのね、ますます気に入った」

ニコニコと、あどけない無垢な少女の笑顔で、額と額がくっ付き

そうなほど接近して衝撃の言葉を言い放った。

「ユウキ、この国は数年後に滅びるのでしょ？」

「なっ！」

俺は雷に打たれたように痺れ、左手の痛みも忘れるほどの驚愕に襲われる。

「あ、やっど驚いてくれた」

俺の驚いた顔を見たベアトリクス王女は満足そうにニンマリと唇を釣り上げる。

「ユウキの言うとおり、この国はあと数年で滅びる、だからその前に国そのものを崩壊させて何が悪いかしら？」

またもクルクルと回転するベアトリクス。俺は彼女が回転している間に千路に乱れた思考を取り纏める。

「権力争いに夢中な貴族と愛想を尽かす市民達。どうせ滅びるのならそれのお手伝いをしてあげるのが王族としての務めじゃない？」

「……滅びるといっても単なる世迷言だ。確たる証拠もないから誰も信じない」

「私は信じるわ」

回転を止め、ピタリと目の焦点を俺に合わせる。

「誰が信じなくとも私が信じる、世界中が嘘だと嘲笑っても私だけは本気で信じてあげるわ」

その言葉は時と場所が揃えば愛の告白にもなるだろう。だが、国が亡びるといふ譚言を信じる場合なら、それは狂気でしかない。

「そ、それはまだわからない。滅びるかもしれない、だ。もしかするとこの国はまだ健在の可能性もある」

しどろもどろになりながらも俺は何とか答えを紡ぎだす。俺の眩きを真に受けて滅亡の手助けなどしてほしくないからだ。

「あら、ユウキは数年後に国が滅びないと言えるの？」

「それは……」

俺が言葉に詰まったのを見てベアトリクスは不気味な笑いを浮かべる。

「決定ね、この国は滅びる。だから好きなことをやっていい。国王は死に、権力争いで血が流れる。うん、とても面白いじゃない」

「……」

俺は目の前の少女に何と声をかけて良いのか分からなかった。

何と言えいいだろう、目の前のベアトリクスは本気でこの国が滅ぶと信じている。いや、本気で滅びてほしいと心の底から願っていた。

「そしてユウキ、あなたは私のものになりなさい」

「は？」

「ユウキがエリクサーを作れると知ったから本当はエルファに有無を言わず殺してもらおう予定だったけど、エルファからの進言で会って正解だったわ。こんなに心ときめかせるなんて思わなかった」

うっとりとして、目を細めて夢見る乙女の格好から、悪魔のごとき言葉が紡ぎ出される。

「新しいお洋服も買ってあげる、毎日私からご飯を食べさせてあげる。毎日私のそばで暮らし、共に滅びの時を迎える。それは本当に素敵なことじゃない？」

ヤバイ。と、俺は直感した。

ベアトリクスは嘘を言っていない、100%本心からそう言い、それを100%実行する。

「外で待機している衛兵、ユウキを用意した部屋へ連れて行きなさい。ああ、先ほど怪我をしたからポーションが必要ね。後で飲ませなさい」

ガチリ、といつの間にか現れた城の衛兵に両脇を固められた。

このままだと俺は一生ベアトリクスの愛玩奴隷として滅びの時を迎える可能性がある。マズイ、それは避けなければならない。

何か言葉はないか。

ベアトリクスに興味を引く言葉。

何でもいい。

この状況を打開できる言葉は……

「……ゲームをしようか？」

ベアトリクスが反応した。

それに重ね合わせるように俺は言葉を重ねる。

「どうせこの国は近いうち滅びるんだ。だから一つ遊ぼう」

「何の遊び？」

よし、食いついてくれた。

「俺はこれからエリクサーを作る。それを完成させられたら俺の勝ち。その前に国王が崩御したら君の勝ち。至ってシンプルだろう」

「何言っているの、それじゃあつまらないわ」

ベアトリクスは顔をむくれさせて不満を示す。場所と時さえ違えば可愛いだろうが、この状況だと反って不気味さが際立つ。

「まだだ、今の国の状況を知っているだろう。国王の後釜に座るのはだれか、その暗闘が日夜行われている。しかし、ここで一つ考えよう。もし、国王の後釜に誰が座るのかを決めなくて良くなっ

たら、国王の病を治せる薬を調合できる人物が現れたらどうなると思う？」

すでに世間は国王の完治を諦めている。それゆえに王宮内では誰を次代の国王にするか、貴族も含めて熾烈な戦いが行われていた。

「アハハ、そうか、そういうことね。そういった権力争いが無に帰り、それを嫌う兄上方はユウキを暗殺しようと動き、国王の見込みがない兄上方はユウキを守ろうとする。うん、いいんじゃない。すごく面白いわよ、それは」

俺の意図が正しく伝わったらしい。ベアトリクスは両手を広げて天を仰ぎ、狂ったように哄笑していた。

「全てが無駄になる！ 全てが無に帰す！ 兄上方の涙ぐましい努力が全て水泡の泡となる！ なんて楽しく、心躍るのかしら！」

俺はベアトリクスの心境は分からないし、分かりたくもなかった。肉親の努力を無くすことに、どうしてそんなに気持ちよく笑えるのか理解したくない。

狂気の王女——ベアトリクスⅡSⅡシマール

その体に抱える闇の深さに俺は吐き気さえ催した。

「うん。乗ったよ、その勝負」

両腕の拘束が緩くなったので俺は内心安堵する。

良かった、これでひとまずの危機は凌げた。

「んゝ、でもユウキが逃げられると困るし、死んだらもっと困るわね。そうだ、エルファ、ティータ。あなた達はユウキに離れずについて経過を私に報告しなさい」

その言葉を聞いた瞬間、俺は恐怖を上回る怒りが灼熱となって俺の全身を駆け巡る。

「お前はこういう神経をしている!!」

よりにもよって俺を数年間騙し続け、さらに最悪の形で裏切った二人を俺のすぐ傍に置くというのは拷問に等しい。

「いいわね、その表情。ああ、彫刻にして保存して置きたいぐらい惚れ惚れするわ」

笑顔でそう返され、俺はやり場を失った怒りを壁にぶつける。

部屋全体が揺れてもベアトリクスは微笑みを崩さなかった。むしろ楽しそうに笑みをますます深める。

「なら、別の監視を付ける代わりにサウをユウキが来るまでの愛玩奴隷にしようかしら。たぶんすぐに壊れちゃうけど仕方ないよね」

「……お前は!!」

怒りに任せて掴み掛ろうとしたが、城の衛兵が俺の頭を押さえつけて拘束した。どれだけ暴れようとも普段から鍛えられた衛兵による拘束は非力な15歳の俺に解くことはできなかった。

「ユウキ、選ばせてあげるわ。エルファとティータをゲーム中ずつと傍に置いておくか、それともサラが私の愛玩奴隷になるか」

アハハハハハハハ

楽しそうに笑うベアトリクスの前には俺の選択肢などなかった。

「「「……」」」

俺としてはしばらく二人に会いたくないのだが、それも許されない。どうにかして俺の両隣にいる二人に何か罰を加えてやりたい。

「ああそうだ。あれがあった」

俺はポンと手を叩いてあれの存在を思い出す。

「ん？ 何何？ 何か良いことあったの」

俺の言葉が聞こえたのかティータが俺にそう問い詰めてきた。

……ティータは俺を騙したことなどどうでもいいんだな。エルファもずっと口を閉じたままだから話すに値しないのだろう。

「君達二人をここに入れても俺が不快にならない良い道具を思い出してね。なあに、すぐ分かる。明日を楽しみにしてくれ」

湧き上がる暗い炎を必死に抑え込み、笑顔でそう言った。

――翌朝

「これを付けてくれ」

俺は徹夜で完成させたある物を二人に見せる。すると案の定疑問符が浮かんだ。

「これは……」

「やだ、首輪？　もお、ボクっておませね」

「首輪じゃない、チョーカーだ。しかもあまり目立たないよう補足して色を塗ってある」

「ふーん、でも良いわ。それぐらいお安い御用」

「……」

ティータが疑問に思いながらも頷き、さらにエルファも後に続いた。

「じゃあ、俺が着けてあげる」

俺はそれを見て陰でほくそ笑みながら二人にチョーカーを着けさせた。

「これはね『奴隷の首輪』と呼ばれる装備品さ」

チョーカーを付けた二人に俺はそう言い放つ。

「この装備品を付けた人を主とみなし、さらに主以外は外すことはできない代物。そして、これが持つ能力として、例えばエルファ。昨日の晩、俺がいない間に何かしなかった？」

「……………ッグ！」

黙秘を続けていたエルファは突然顔を歪めてチョーカーを掴む。

「これは主に対して無言、または嘘を吐くと首が締まるんだ」

「逆にティータ、『ありがとう』」

「やだ、何？ 体が熱い」

俺が褒め言葉を口にするとティータは体を押さえてもじもじし出した。

「こういう風に主に対して褒められると快樂がチョーカーから発生する」

これはPKを行ったプレイヤーに着けられる拘束具の一つでジョークアイテムとして作られていた。こんな物があるとともにプレイができないので、付けられたプレイヤーは拘束期間が途切れるまで人に会うことが出来なかった。

「よし、もういいよ」

俺が手をパンツと効果が切れて叩くと二人がへたり込む。

「……ボク、かなり……鬼畜なアイテムを……作るじゃない」

快楽によって頬を紅潮させて絶え絶えとなりながらティータがニヤリと笑うので俺はそれに笑い返ししながら。

「安心しろ、あまり変な命令はしない。何しろサラがいるからな、彼女にはこんな事実など知ってほしくない」

住み込みメイドのエルファと薬屋のお姉さんは王国の『草』の一員で、ずっと俺達を監視していました。

そんな真実を知っても誰も得はしない。

いや、ベアトリクスだけは狂喜しそうだな。

奴が床を叩きながら爆笑する場面が目に見え、俺は唇を歪めた。

「今日からティータがとある事情によって泊まりに来た、そしてエルファはいつも通りにふるまう。いいな、そのシナリオで行くぞ。そしてそのことを守っている間はチョコーカーを発動させることをしないと誓おう。しかし、真実がサラにばれた場合、どうなるかわかっているよな？」

「……はい」

エルファは首が締まることを避けたのだろう、蚊の鳴くような声で恭順の意を示した。

「さて、そろそろサラが起きる時間だ。俺は今回朝食は要らないから三人で食べてくれ」

俺は二人にそう言い残して自室へと戻った。

「は……は……」

自室のカギを閉め、俺はそのままドアを背もたれにして蹲る。

「く……うう」

寒い、体の奥から悪寒が湧き上がってくる。

ベアトリクスⅡSⅡシマール

奴はヤバイ。

俺が今まで接してきた嫌な連中の中でも別格の存在感を放ち、奴の前にはサマルフィール侯爵やヴォルダーク伯爵さえも霞んで見えてしまう。

市民に金は払えない——そうのたまう貴族は今振り返ると何て可愛かったんだろう。

ベアトリクスが見せたあの狂気と比べると赤子のように頼ずりしてしまうほど可愛い。

「……なんて約束をしてしまったんだ」

奴が人の不幸を心から喜んでいるのを見た時、俺は奴の背後にある『闇』を見た。

あどけない十四歳の少女をあそこまで壊れさせる『闇』。

俺は今からそこへ飛び込まなければならない。

シマール国権力の中枢。

もしかするとベアトリクス級の大物が跋扈しているかもしれない魔の沼がそこにある。

嫌だ、入りたくない。

だが、進まなければ地獄が待っている。

前門の皇太子五人、後門のベアトリクス。

逃げ場はない。

どれくらいの時が過ぎただろう。

気が付けば夜がすぐそこにまで迫ってきていた。

「明かり、明かり」

闇が怖い。

この暗さにいると全てを失ってしまいそうに錯覚する。

いつもは一本だが、今回は五本全部使う。

「ふう、落ち着いた」

一本だと心もとないが五本も使うと部屋の隅まで照らすほど明るい。

「一本じゃ、全てを照らすことはできないよなあ」

と、何気なく呟いた瞬間、俺の中に天啓というべきアイディアが閃いた。

そうだ、何も一人で立ち向かう必要はない。

こんな時こそ彼らの助けを借りる。

俺はそう確信すると、机に向かって猛烈に何かを書き始めた。

「はい。お久しぶりね、ユウキ」

始めに現れたのはキツカだ。

二年前に比べて凛々しさが格段に上がっており、そのしなやかな体は豹のように隙がない。しかし、口元に笑みを浮かべたその表情は昔の面影を残していた。

「……一番じゃなかった」

次に現れたのがユキ。

確信して言えることはおそらくユキが最も成長している。体の発達具合もそうだが、ミステリアスな雰囲気をもった彼女はおそらく見つめられているだけでゾクリと震えてしまうだろう。

「遅れました、本当にごめんなさい」

大柄な体格を精一杯動かしながらこっちに向かってきているのはクロス。

士官学校で鍛えた成果だろう。体系こそ変化していないが、その中身に宿った筋肉はこちらを威圧させるほどパワーが発散させられていた。

「どうして私が最後なのですか」

そんな呟きとともにアイラが登場する。

レンジャーとして相当な訓練を受けてきたのだろう。俺を含めた全員がアイラが声を出すまでその存在に気付かなかったほどだ。真っ黒なローブに身を固めたアイラは昔と変わらない澄ました顔をしていた。

「みんな、集まってもらってすまないな」

俺は卒業前にも関わらず無理を言って集まってきた彼らにそう謝罪した。

「期間はおそらく二週間前後、それだけの間授業を休んで大丈夫か？」

「いって、いって。どうせこの時期の授業なんてあってないよ
うなものだし」

キツカが笑いながら手を振ってくれるのを見て俺はいくらか安堵する。

「……生徒会の引き継ぎも終わった。後は自由登校」

相変わらず表情が読めないユキだが、ユキ本人がそういう限り大丈夫そうだ。

「元々僕は飛び級でしたから」

どもりながらもちゃんとした返事を返してくれるクロス。

「とっくに卒業試験を終わらせています」

アイラはそう淡々とした表情で述べた。

……良かったよ、君たちがいてくれて。

キツカ、アイラ、ユキそしてクロスの顔を順に眺めながら俺は内心からこみ上げる衝動を必死に抑えた。

「コホン、さてと。君たちのやることは簡単だ。俺がエリクサーが作れることを王宮に報告し、実際にエリクサーを国王に飲ませる間まで俺の傍にいてくれ」

かなり無茶苦茶な意見だったと思う。突然呼び出され、変な命令をされたにも拘らず彼らは躊躇いもなく頷いてくれた。

よし、これで大丈夫。

キツカ、アイラ、ユキそしてクロスがいれば俺は『闇』にも耐えられる。

奴の前にもう一度立つことが出来る。

待っている、ベアトリクス!!

絶対悪（後書き）

主人公を連れていたり抑えつける役目をモブキャラへ変更しました。

エルファがベアトリクスのことを王女と呼ぶよう変更しました。

番外編 エルファの実力（前書き）

番外編です。

今後の展開を考えると大幅に修正しました。

番外編 エルファの実力

「ねえ聞いた、最近噂になっているの」

私、キツカは久しぶりにアイラやユキ、そしてクロスの三人と談笑していた。

明日、全員の都合が合ったので、これは何かするしかないでしょうということで四人で明日何をしようか決めている最中よ。

そして、私は最近学校で人を惑わす九尾の剣がシマール国の北部にある『メキラス大森林』に出没している魔物が持っているという噂が実しやかに広がっていることを話したわ。

私も始めは出任せだと考えていたけど次々に九尾の剣の目撃情報が入っていくうち、疑念が確信に変わったわのを覚えている。

「これは私たちに見つけてくださいと剣が訴えているのよ」

私は自信に満ち溢れた様子で言ったのだけれど、他の三人の様子は芳しくない。

アイラは「平均レベル80の場所に私達が行くなど愚の骨頂」とぼやいて。

ユキは相変わらず何を考えているのか分からないし、クロスさえも愛想笑いに終始しているのよ。

……むう、かつて学園を虜にした私のカリスマが効かないのかし

ら。

私が一声かけるだけで冒険者候補生は私の思い通りに動いてくれるというのに、どうしてかこの三人だと効果が薄いわね。あの気弱だったクロスでさえも私が見つめても目を逸らしてくるし。

「キツカの提案は面白いけど、私はあのメイドを成敗しに行かなくてはならないの、だからそういうのは遠慮しておく」

アイラが手に持った飲み物を少し口に含んだ後、澄まし顔で言う。

前々からアイラはユウキの家にいるメイドに指導を受けてもらっているのというのは私達にとって周知の事実だ。アイラ曰く、あのメイドはレンジャー育成学校の元プロの教官よりも腕が数段上らしい。だから最近は学園よりもそのメイドからレンジャーとしての指導を受けていると言っていたわね。

「ねえアイラ、そのメイドって何者なの？」

単なるメイドではあるまい、少なくとも一級レンジャーより上の技能を身に付けているのなら、そちらで生かせば良いのではないかと考える。

「さあ、人の前歴に興味ないわ。肝心なことは私に技能を教えてくれ、さらにユウキ様を守っているという事実よ。それさえあれば文句などないわ」

最近アイラはレンジャーとしての心構えが出来てきたのか、大分ドライになってきているわ。そりゃあ、闇の世界で生きる職業だから無用な好奇心は持つ必要はないけど、興味持たなすぎじゃない？

興味から発する好奇心こそ人生を楽しく生きる要素よ！

「クロス、あなたはと思う？　あなたは行くことに賛成よね」

アイラの説得を諦めた私はクロスにターゲットを変えたわ。アイラは昔からこう決めるとテコでも動かない頑固な性格だったけどクロスはまだ余地がある。熱意で押し切れば賛成に回ってくれるかもしれないわ。

「んー、さすがにパス」

申し訳なさそうに、しかしハッキリと否定を口にするクロス。何よ、昔と違うじゃない。

クロスはこの二年間士官学校で鍛えられていたけど、成長したのは肉体面だけじゃないみたい、断るなんて選択肢が無かった浮浪児時代と比べると精神面においても相応に伸びているわね。

「ねえ、ユキはどう思う」

これまで会話に入らず、頬杖について眠たそうにしていたユキに話を振ってみたわ。

「……眠い」

「うん、それは眠たそうだね。何かあったのか知らないけれど、瞼が半分閉じかかっている、それを根性で支えているのはよく分かるから」

ユキはいつもボーっとしているけど、今回のようにあからさま眠

気を表に出すことはなかったわ。浮浪児暮らしのころは弱みを見せるわけにいなかったけど、学園生活に慣れたユキは段々と緊張感が薄くなっているように感じるわ。

「……ユキはいつもボーっとしているけど、今回のようにあからさま眠気を表に出すことはなかったわ。浮浪児暮らしのころは弱みを見せるわけにいなかったけど、学園生活に慣れたユキは段々と緊張感が薄くなっているように感じるわ」

「!?!? 心の中を読まれた!?!」

ユキは私が抱いていた感想を一言一句正確に繰り返してきたわ……全く、人の心を読むなんて少々オイタが過ぎるんじゃない?

「……痛いのは止めて」

「だったら変な真似はしないで!」

私だって好きでおこるわけじゃないのよ、時間とエネルギーを消費するだけだし。

「……そうそう、時間とエネルギーの無駄」

「ユキ? 王立魔法学園の生徒会長だからと言って少々調子に乗ってんじゃないかしら?」

ユキは私達にも信じられないのだけど、学年で唯一市民出身で学園史上初の市民出身の生徒会長というところでもない経歴を持っているわ。アイラがありえないと呟いていたけど、確かに冷静に考えたらありえないわね。けど、私から言わせれば浮浪児時代はペタンコ

だった胸が、今では道行く人々の全員の興味を引くほど成長していることの方がありえないわ。いったい何を食ったらそんなに大きくなるのかしら。

「……さあ、いつも通りの食事」

「どうやらユキには心の中を読むとどうなるかをその身に教えないと駄目みたいね」

私が拳をポキポキと鳴らしながら立ち上がると、ユキは危険を察知したのかクロスの後ろに隠れた。

「クロス、そこをどきなさい」

「……クロス、絶対どいちゃダメ」

私とユキに挟まれたクロスはどうしていいのか分からず、苦笑しながらアイラに助けの視線を送ったわ。

「人もたくさんいるからあまり派手なことをしちゃ駄目よ」

忠告はするけど助けに入ることはないようね。アイラは興味なさげにパンを頬張っていたわ。

そして四人で何をするのか話し合い（主に私が提案）を進めると、アイラが突然起立して後ろの方向へ向いたわ。

「ん？ 何かあったのかしら」

アイラの不可解な行動に私達全員がアイラとその方向へ注目したわ。

「アイラですか」

アイラが起立してその数秒後に、鮮やかな緑色の紙にカチューシヤを着けた一般的なメイドさんが現れたわ。

「こんにちは、エルファ様」

そう述べた後にアイラは腰を深く折ってエルファとかいうメイドに頭を下げたわ。

「こんにちは、アイラ。そして左からキツカ、クロス、そしてユキね。ふむ、やはり報告通り全員何か類希な才能をお持ちのようね」

「え？ どうして私達の名を？」

少なくとも私達は会った記憶がない。アイラから伝わった可能性があるけど、あのアイラが余計な情報を漏らすことは考えられないし」

「ああ、申し遅れました。私はエルファⅡララフル、ユウキ様のメイドをやっています」

スツと、如才なく腰を折り曲げるエルファさん。それは先ほどの緊張でガチガチだったアイラの礼とは天と地との差があったわ。

「え？ じゃああなたがアイラの教官？」

見た感じ私達より少し大人びた程度の年齢で中年のベテランレンジャーに勝る技能を保持しているとは信じられないわ。

「フフフ、アイラからはそう呼ばれていますね。アイラはとても優秀ですよ。ただ、隙を見せると噛み付いてくるオオカミです、が！」

滑るようにエルファさんの体が後ろへ流れると同時に、アイラがナイフを持ってついその場まであったエルファさんの位置を通過する。

アイラが驚愕すると同時にエルファの手刀がナイフを持つ手にあたり、ナイフを取り落すと同時にエルファさんは細くて綺麗な膝をアイラの鳩尾へ叩き込まれ、アイラは悶絶した。

体感時間2秒。そのあまりの速さに通行人は気付かず、私達はポカンとしていた。

「私が息を吐いた瞬間に狙ったのは見事でしょう。ただ、まだまだ殺気が隠されています。殺気を出さずに相手を殺さなければまだまだ一流とは言えませんよ」

腹を押さえて蹲るアイラにエルファさんは先ほどの攻撃について反省と考察を行う。

「はい……ありがとうございます」

アイラ大丈夫？ あんな見事な膝を叩き込まれてよくもすぐに話せるわね。私なら絶対無理よ、クロスならどう？

私がそう水を向けるとクロスはブンブンと首を振った。どうやら士官学校でもあのような耐久訓練は行われないようね。そりゃそうよ、下手すれば心臓が止まるわよ、あれ。

アイラは脂汗を浮かばせながらテーブルを杖代わりにして立ち上がり、残りの力を振り絞って椅子へと体を投げ出したわ。

その様子を見たエルファさんは満足げに微笑んでくる。

「しかし、初めのころと比べて格段に良くなっているのは事実です。これなら中堅クラスのレンジャーと比べても何の遜色ありませんよ」

アイラ、苦しいのは分かっているから無理に微笑むのは止めなさい。顔を青ざめさせながら笑っても、ただのやせ我慢にしか見えないわよ。

「エルファさんだっけ？ あんたは一体何者なの？」

獣の生まれ変わりと呼ばれるほど勘の良い私でさえ予測できなかったアイラの動きを察知・反撃を加えるなんて人間とは思えないわ。

「ただのメイドです」

うーん。そうニッコリと笑われるとこれ以上何も聞けないわ。

「ああ、主がそろそろ帰宅なさいますので失礼します」

エルファさんは私達にこれ以上詮索されるのが嫌みたい。

私が何か声をかける前にサッサと行ってしまったわ。

「絶対に敵に回したくないわね」

プルプル震えているアイラを見るとそう考えてしまう。あんな化け物に勝利する姿なんて想像できないわ。

「……帰る」

ユキが突然立ち上がってそう宣言したわ。相変わらず突拍子のない行動を取るユキだけど今回は賛成。あれを見た後だと呑気な話題など出来ないわ。

「……私はもう少し……休んでおくわ」

うん、そうしておきなさい。出来れば話すのも止めなさい、口を開くとアイラの口から先程の食べたものを戻しそうで気が気でないわ。

「それでは僕もこれで」

門限があるらしいクロスも賛同したので、私達は自然解散となったわ。

アイラ以外皆が各々の場所へ戻っていくのを確認しながら私も歩を進める。

「ユウキにエルファさんがついていたら大丈夫ね」

あれだけの達人よ。

並の相手では敵対どころか相対することさえ敵わないわ。

「さて、私も明日の予定を考えましょうか」

私は明日、誰とパーティを組んでどの場所へ冒険に行こうかを考え始めたわ。

不穏な空気（前書き）

えーと……心も落ち着いてきましたので連載を再開します。
私の都合によりお騒がせしてしまい、本当に申し訳ありませんでした。

ただ、次回から2日に1回の投稿になることをご了承ください。

不穏な空気

立ち入り禁止

俺はその立札を立てて調合台がある部屋に入った。

不死鳥の羽

神の涙

ユニコーンの角

世界樹の薪

聖なる灯

が調合台の上に置いてある。

これはエリクサーを作るための材料。

これだけの材料を揃えるだけで何十万Gが飛んだ。

後で王宮に請求できるとしてもこの出費はこれまでに得た利益を全て吹き飛ばしてしまうほど大きかった。

俺は世界樹の薪に聖なる灯で火をつける。

それら二つの材料を使って発生した炎は通常よりも高く、そして安定した温度を保つ。

神の涙を沸騰させ、そこに千切りにしたユニコーンの角を加えながら時期を見て不死鳥の羽を加える。

そしてそのまま6時間ほど一定の速度でかき混ぜ続けた。

「……」

この速度が少しでもずれると失敗になる。

疲れてきたらポーションを口に含んで体力を回復させる。

誰もいない。

気が散ってしまうと困るからエリクサーの作成中は誰も傍に近寄らせないことにしている。

ジワジワと、真綿で首を締め付けられるような孤独や疲労から逃れるために俺は心を無にし、ただ目の前のエリクサーの原形をかき混ぜ続けた。

「……出来た」

抽出した白濁の液体を瓶に詰めて俺はそう呟く。

だが、俺は浮かない。

何故なら、これは不完全な代物だからだ。

エリクサーは本来無色透明である。

にも関わらず白濁しているのは失敗したからではなく、エリクサ

ー作成に必要な材料が一つだけ入っていなかったからだ。

その材料はエレメントの塊。

マスターエレメントが落とすエレメントの塊が必要なのであった。

本来なら全ての材料を揃えてから作るべきである。

だが、そんな流暢なことは言ってもらえなかった。

最近、国王の状態はどうも芳しくない。

死なれると終わりなので、それならば不完全ながらも相当の効果を発揮するのを届けるしかなかった。

「これを国王に」

俺はよれよれになりながらも外に待機していたエルファにこの不完全なエリクサーを手渡した。

「ねえ、本当に王宮に入るの？」

「ああ、そうだ。キツカは入ったことは」

「あるわけないでしょうユウキ様。私達は浮浪児だったんですよ。王宮なんて縁のない場所です」

それもそうか。

いかなな、やはりベアトリクスに会ってから俺はボケているかもしれない。

「……行く」

「待て、ユキ。これから謁見するのは偉い人達だからな。くれぐれも粗相の無いように」

「大丈夫ですよ、僕が見張っていますから」

「頼む、クロス」

俺は1つ頷いた。

「王宮に入るぐらいで緊張するなんて可愛いわね」

「ティータ、お前は黙れ」

「あら、ボクってつれなくなっちゃったわね」

あんな真似をしておいてどの神経がそんなことをの給うのか理解に苦しむ。が、まあ良いか。『草』が考えることなんて気にしても仕方ない。

「それよりも、本当に致命的な情報は漏らさないのだろうな」

一番怖いのが俺がどう考え、次にどう動くのかを逐一向こうに知

られて対策を打たれる場合だ。それをやられるとこちらに勝ち目はない。情報が筒抜けになりながら勝てる戦争がないのと同じだ。

「それは大丈夫よ、ボク。ベアトリクス王女はそんなゲームをつまらなくする行為はしないわ」

ティータに付けているチョーカーが反応しないところを見ると嘘は言っていない。ベアトリクスの気分次第で変わるというのは不安でしかないが、とりあえず今のところは大丈夫だろうと判断する。

「それにしても、エルファは一言も話さないよな」

「……」

エルファは俺が拉致されてから今までの間、強制された時以外に俺と口を利くことがない。初めはそれでよかったが、こうもこの状況が続くと不気味さが際立ってくる。

「エルファ、何を考えている？」

「……」

エルファは答えない。よってチョーカーが発動して首が閉まる、が。

「……」

それでもエルファは答えようとしなかった。

これ以上やると死んでしまう、俺は諦めて手をパニックと叩いた。

「分かったよ、俺は何も聞かない。それで良いだろ？」

「……」

だから何か反応してくれよ。

「こちらへどうぞ、ユウキ様」

俺達一向は家の前で止まっていた国家の紋章が入った前回とは全く逆の白塗りそして2頭の白馬に引かれていた馬車に乗り込んだ。

一般に王宮の謁見室というのは相手を威圧させ、己を偉大に見せるような作りになっている場合が多い。

踝まで埋まる真っ赤な絨毯を引かれ、これ見よがしに武器を持たせた兵隊を壁に並ばせてさらに後ろには厚い垂れ幕が下げられている。上を見ると底が抜けそうなくらい高い天井に天空など圧倒させるような壁画が描かれている。

ふと後ろを振り返るとティータとエルファ以外緊張しているようだ。それはやはりこの場の空気に吞まれているからであろう。

「安心しろ」

緊張をほぐすために俺は笑いかける。

「俺を見てみる、何も強張っていないだろ。だから俺だけを見ておけ、周りなど気にするな」

こういう時は何か目的を持たした方が良い。あちこちに目がいくと心が落ち着かなくなって緊張してしまう。

案の定、4人が俺だけを見つめ始めると、キツカ達の動揺が目に見えて収まっていくのが分かった。

「ふむ、少しは主としての自覚が出て参りましたね」

「え？」

久しぶりにエルファの眩きが聞こえたので俺はどういう意味か問い質そうとしたのだが。

「ケトグリウスⅡBⅡイナルファ様の！ おなーりー！」

その前に最も王座に近かった兵士がそう叫んだため、タイミング逸してしまった。そして、舞台の袖口から1人の老人が現れる。

シマール国？3――ケトグリウスⅡBⅡイナルファ。現国王のアウレリオンⅡXⅡシマールの幼い頃の教育係を務めていた。

すでに80近い高齢だが、背筋はピシッと伸び、その瞳は老いを感ぜさせないほど鋭い光を放っていた。

「そなたがユウキⅡカザクラか。その方の活躍は巷で響いておるぞ。

ただ、それは武器の領分であり薬学の領域でなかったと心得るが」

長年政治の泥沼で戦ってきた賜物だろう、自然と畏怖させる響きを持っていた。

「は、そちらは仕方のないことかと。しかし、先日ある『草』の者から受け取ったお薬はもうお試しになられましたか」

「エルファールラフルを通して受け取った薬を国王陛下に施すと、驚くべきことに目を開き、粥を召し上がりになられた。率直に聞く、あれは何じゃ？」

ケトグリウスの言葉に鋭さが宿る。これは言外に「真のことを言え、偽りは許さぬぞ」と脅していた。

「私の在庫にあった材料で作った万能薬——エリクサーの紛い物でございます」

「エリクサーとな！ 伝説の薬を調合できる者が何故いる！」

まあ、その疑問は最もだろう。伝承によるとエリクサーの生成方法が途絶えたのはもう数世紀前。

現在までに多くの国が国家予算を投じてまで復活させようとしたがついに適わなかった代物がエリクサー。ケトグリウスが驚くのも無理ないことだろう。

「私は過去の記憶を持っております。現代より遠い昔のころの記憶。その当時にエリクサーを生成した記憶がありましたので、それを辿って調合した次第でございます」

嘘は言っていない。

俺はこの世界ではない世界の記憶を持っている。だから俺をそんなに凝視しても、嘘をついていないのだから意味がないぞ。

「ふーむ……まあ良からう。で、ユウキは国王を救えると誓えるのだな」

しばらくの間、俺とケトグリウスが視線を交錯させ合っていた。そして、先に外したのはケトグリウスの方。

ケトグリウスの口から洩れる確認。後ろからキツカ達4人の不安げな気配が、ティータとエルファの無言の圧力が、左右から兵隊達による威圧した空気が、そして前方から強烈に発せられるケトグリウスの厳しい視線が俺に突き刺さる。

この王宮の広間にいる人間全員が俺を注視していた。

俺の呼吸、目線、微細な体の動作全てが読み取られている。

その空気を重さが最高潮に達したところで俺は口を開いた。

「国王陛下に誓ってエリクサーを調合し、国の内憂を取り除いて見せましょう」

「……プハー」

ケトグリウスが姿を消し、俺達の謁見が終わると同時にキツカが思いつき空気を吐いた。

「一体どうした？」

「ユウキ様はどうしてそんなに平穏でいられるのですか。私達4人は息をするのでさえ怖くて出来ませんでしたよ」

キツカの代わりにアイラが浮浪児組4人の思いを代弁した。よく見るとユキやクロスもコクコクと頷いている。

「そんなに緊張したか？」

俺は首をかしげる。確かに張りつめた空気といえば張りつめていたが、そんなに酷いものではない。むしろ心躍るような昂揚感に駆られたのだがその認識は間違っているのか？

「……ユウキの常識をこちらに押し付けないで」

これにはティータとエルファを含む全員が肯定していた。

おい、どういう意味だよ。

「ケトグリウス様は味方だな」

先ほどの謁見を通して俺はそう判断する。病に伏せている国王の教育係を務めていたのだから現国王に対して最も忠誠があるのはケトグリウスだろう。ティータからの情報によるとケトグリウスは国

王の名の下で色々な政策を行ったから貴族達による反発も強い。おそらく誰が次の国王になってもケトグリウスは今の座につけない場合が多い。

「フォルター宰相は敵と考えて良いよな」

貴族からの支援もあり、次の国王としての地位を固めた第1皇太子フォルター宰相はおそらく国王の復活を望んでいない。息子が父の死を望むなどあつてはならないが、権力が絡むと血を分けた者同士が骨肉の争いを起こすなどザラにある。

「ティータ、フォルター宰相はどんな人物？」

政治など疎いからフォルターの人物像を全く分からない。ここは腹立たしいが王宮に通じているティータに聞くのが手っ取り早いだろう。

「んー、フォルター皇太子？ そうねえ、長男っていう感じで真面目だけど自分から動くことは少なかったわねえ」

「あ、そうなの？」

「ええ、何せ生まれてきた時から恵まれていたからねえ。自分が何もしなくとも向こうが勝手にやってくれる状況で育ったから仕方ないんじゃないの？」

ティータさんの言う通りならフォルター宰相についてはあまり心配しなくていいだろう。もしかすると国王の座も周りの貴族から推されただけで本当は望んでいないのかもしれない。

そう考えると今回のことは思ったよりもすんなりと終わる可能性があるな。

「ん？ どうした」

ふと振り返るとキツカ達4人が厳しい顔つきで辺りを見回していた。

「……この感じは」

「ええ、その通りよユキ。まさか王宮で同じ空気を持つ者に出会えるとは思わなかったわ」

「僕はあれをスラムだけの名物だと思っていたけど」

どうしてキツカ達が辺りを警戒しているのかが分からない。途方に暮れているとアイラがそつと耳打ちしてくれた。

「懐かしい気配がしたのです。破滅的かつ刹那的、享乐的なのに抗えない妖しい雰囲気を漂わせる者。昔からスラムでこの空気を持つ者に近づくと絶望が待っているので絶対に近づかないことが暗黙のルールでした」

ここまで聞いて俺も合点がいった。キツカ達が何に対して神経を尖らせているのか目星が付く。

知りたくなかった存在。

できれば関わり合いたくなかった奴が近くにいる。

カッソッ

後ろから何かがちらへ向かってくるのが気配でわかる。

それ以外にも多くの足音があるにも関わらず、それだけは心に響く何かを持つもの。

「お久しぶり、ユウキ。アハハハハハ」

「……ベアトリクス」

色素の薄い髪と肌、折れてしまいそうな嬌やかな体躯を持つにも拘らず、その中身は邪悪そのもので染められたベアトリクスⅡSⅡシマールがそこにいた。

ベアトリクスは俺の数歩先で立ち止まり、何が楽しいのかクルクルと回っている。ドレスが花のようにフワッと広がるが、生憎と俺は嫌悪によって美しさよりも苛立たさが先立っていた。

「ル〜♪ 楽しいわぁ、本当に」

回っていた理由は自分の喜びを表現するためだったらしい。それなら他所でやれ、少なくとも俺の目の前でやるな。

「どうしてお前が王宮にいる」

確かベアトリクスは兄達から恐れられて一室へ監禁させられていたはずだ。だからここに出てくるのはおかしい。

「ああ、私がここにいる理由？ それは簡単、空が青かったからよ。だから私は王宮内だけど移動が自由になったの」

「ふざけるな、なんだその理由は？」

「んー、確かにふざけているわね。けど、私にはその理由で十分。少しでも綻びがあれば私はそこから引き裂いてやるわよ」

回転を止めてニマーツと笑うベアトリクス。

駄目だ、こいつとまともに取り合うとこちらが馬鹿を見る。

「そんなかわいい顔をしないでマイダーリン。あなたも感じるでしょう、この王宮内に漂う素敵な空気を」

言いたいことは山ほどあったがベアトリクスの言う通りに王宮内の空気を読んでみる。すると華やかさの中にギスギスした空気が織り込まれていた。

「うん、そう。ユウキが国王を治せることが王宮内に伝わった途端とても楽しくなったわ。全てが無になる恐怖と焦燥が生まれ、安心した空気が吹き飛んだ。それがあまりに心躍ったから私も外に出たくなったの」

アハハハハハ。

またもベアトリクスが高笑いした。その醜くも済んだ音程に心を奪われそうになるが、根性で耐える。

「さてと、ユウキ。ここで一つヒントを与えるわ」

美しいストレートの髪を指で弄びながら謡う様に告げる。

「権力はね、恐ろしいの。その甘美で危険な毒は容易に人を狂わせる。そう、真面目で実直なフォルター兄上でさえ人が変わってしまうほどにね。これまでの前評判など忘れなさい。そんな権力を得る前の情報など持つだけ無駄よ」

その場でクルリと一回転して背を向けるベアトリクス。

「ごきげんよう、ユウキ。死なないでね」

ベアトリクスが柱の陰によって見えなくなるまで俺達は一言も発することなくその場に立ち尽くしていた。

不穏な空気（後書き）

感想には目を通しますが、それを反映させるとは限りません。ただ、誤字脱字の指摘にはしっかりと訂正させて頂きます。

これを含め、二つの作品は必ず完結させますのでどうか暖かい目で見守り下さい。

後手

フォルター宰相は目立つことが無く、市民の話題でもあまり昇ることは無かった。それは毒のない性格だったがゆえにアクが弱く、どちらかという下次男のキルマーク騎士団長の方が有名だった。

敵を作らない性格ゆえに穏健派の貴族から推されて国王の後継者となった。本人はどちらでも良いというのは大方の認識だった。

だからこそ俺の目に起こっている出来事は信じられなかった。

俺の家は防犯を意識して多くの魔術アイテムを各場所に配置、侵入者を撃退するよう仕掛けが家中に施されていた。

下手すれば伝説クラスの魔術アイテムを使用しての防犯。これなら伝説の怪盗でも容易に侵入など出来ないだろう。

だが、この防犯には穴があった。

これらは侵入した相手を捕縛、無力化させるもの。

つまり単独、または複数犯を想定している。

そう、だから。

数十人で編成されたグループが犠牲を顧みず強行突破する事態など想定していなかった。

「サラ、サラァー！」

完膚なきまでに破壊された門を潜り抜けて俺は鍛冶場へと疾走する。

俺の突然の行動に皆が呆気にとられていたが、今は気にする時間すら惜しい。

幸いにも鍛冶場は無事だ。

どうやら侵入者は全員母屋の方へ向かったみたいだった。

「サラ、大丈夫か！ サラー！」

俺は血相を変えて鍛冶場のドアをこじ開ける。

「あ、師匠。どうしましたか？」

俺の心配は杞憂に終わったようだ。鍛冶場はその性質上防音であり、それにサラは夢中で武器を作っていたらしく、母屋で起こった惨状については全く知らないようだ。

「はあ………」

我知らず俺は地面にへたり込む。

確認のためにそれとなく鍛冶場全体を見直し、争った形跡があるか否かを調べても違和感がない。つまり侵入者は本当にこちらへ来ていないのだろう。

「ああ、ごめんごめん。どうやら気のせいだったようだ、邪魔をし

て悪かった」

俺はそう言い残して鍛冶場のドアを閉めた。

「やられた」

防備のための5重結界が全て突破されていた調合室の前で俺は呻く。

周りの形跡を確認する限り、どうやらここを集中的に狙われたようだ。

確かにサラは無事で、母屋も特に荒らされた形跡はなかったが、ただ1つ、調合室だけは跡形もないほど破壊されていた。

わずかな希望を込めて中に入るが、案の定、不完全なエリクサーどころかその材料さえも全て無くなっていた。

「……何てことだ」

延命を図るエリクサーどころかその材料さえも消え失せた。

これでは国王の延命が出来ない。

俺は構想の立て直しを迫られて唇を噛む。迂闊だった、もう少し警戒していればこのような惨状など起きなかったはずなのに。

「止めよう」

後悔しても事態が良くなるわけでない、早急にケトグリウスと連絡を取らなければ。

俺はキツカ達を呼び寄せ、サラの警護を任せた。

しかし、アイラだけは頑なに断ったので、アイラは俺の護衛として連れ添わせる。

俺とアイラとエルファ、ティータは留めておいた馬車へ乗り込んで王宮へと戻っていった。

「こんな強硬手段を取るとは……フォルター宰相を甘く見ていた」

穏やかな宰相という評判だったから、妨害するにしてももっと穏健な方法を取っているとしたし、このような行動を取るにしてももっと兆候があると過信していた。

「あれ？ エルファは疑わないの」

「どういう意味だか」

「だから予め屋敷の構造について知っていた者が内通していたと言うこと。あんな嚴重な結界に守られていた場所が破壊されるなんて普通は屋敷に詳しい者を疑うのが普通でしょう？」

「エルファではない」

ティータのからかいを俺は一言のもとに切って捨てた。

「エルファが内通していたのなら侵入の形跡すら残さない。門を破壊するなど雑な形跡を残してしまわなければならない不正確な情報は絶対に渡さないからな」

「ん〜？ どうしてそう言い切れるの？」

まだティータは疑問が残っていたので俺は最後に。

「俺とエルファは2年以上共にいたんだ。エルファが取りそうな行動ぐらいわかっている」

エルファの心を読む域にまで達しないにしてもエルファの手法ぐらい予想できる。伊達に長い間一緒に暮らしていたわけではない。

「さすがユウキ様です」

「んもう、エルファったら愛されてるう」

「……………」

外野がうるさい、今はそれどころではないだろう。しかもエルファも無言でじっとこちらを見つめてくるから居心地悪いことこの上ない。

馬車の間の時間がとてつもなく長く感じられた。

「ふむ……つまり賊に襲撃され、エリクサーを作るための材料がなくなっただけ」

「その通りです、弁明の余地さえありません」

本来なら1日に2回の謁見はルール違反なのだが、何故か俺はそのルールが適用されることなく2回目が見舞われた。

そして、俺は顔をあげてケトグリウスの目を合わせて次の口上を述べる。

「今回のミスは私の責任です。いかなる咎も請け負いますからエリクサー材料の探索に以下も追加してください」

実際は俺の落ち度などあまりないが、ここは社交辞令。「俺は悪くない」という態度を取っても俺の自尊心が満足するだけだからな。

が、ケトグリウスは俺の嘆願に答えず、何かを考えるように目を遠くの方へ向けていた。

「やはりユウキ殿も被害にあっていたか」

ケトグリウスは深く悔いるようにその言葉を絞り出した。

「実の息子が親の死を願う、これほど悍ましいことはないというのにあ奴らは分かっている。これではこの国の将来が心配で堪らん」

俺は体中に氷水が流されたような悪寒に襲われた。考えたくない最悪の出来事が脳裏に浮かぶ。

「ユウキ殿の考えておる通りじゃ。突如キルマーク騎士団長が街や村の警備を強化し、素材集めにまで手が回らんと言ってきよった。建前はその通りじゃが、実際は任務の拒否。クーデターを起こしよった」

「そんな、なぜキルマーク騎士団長が？」

噂によるとキルマーク騎士団長は後継者争いが不利なため、今回の国王復活には賛成の立場であるはずだ。それなのにどうして彼が妨害するのかがわからない。

俺の疑問が伝わったのだろう。ケトグリウスは重々しく次のように述べた。

「何故そのような行動を取ったのかは王家の恥故言えん。悲しきことにベアトリクス王女が仲介役となってフォルター宰相と裏で手を組んだ様じゃ」

「し、しかし。国王親衛部隊の者から選抜して向かわせれば」

「国王親衛部隊は守りに特化した舞台じゃ。極限環境で動ける者はすべてキルマーク騎士団長の命令なしで動かせん」

「国の財源を動かして品物を集めれば」

「国の財政は全てフォルター宰相の許可が必要じゃ。しかも宰相は急に闇市場の撲滅に乗り出しておる」

「……」

俺はもう何て言えばいいのか分からない。

国王の後継者として争っていた2人が、国王の回復を妨害するために手を組むなど考えたくない所業だった。そして、それ以上に憎しみを抱いたのは。

「ベアトリクス……」

あの銀髪の悪魔の高笑いが脳裏に蘇る。

いったい奴はどこまで外道であれば気が済むのか。

「そこでだ、ユウキ殿には酷な話だがエリクサーの材料を自ら探しでは貰えんか」

「……!!」

この言葉を聞いた瞬間、俺は奴の真意が分かった。

奴は死なないよう気を付けてと言っていた。

俺は刺客による暗殺だと疑っていたのだが、実際は死の危険がある場所に俺を行かせることが本命。

そうだと分かっていたれば対策を打てたのに。

俺は奴の目論見に気付けなかった悔恨と怒りに身を蝕まれてしま
う。

「……わかりました」

初戦は完敗。

奴の思惑通りの結果になってしまった。

「素材集めの間、サラッキュリアスの保護を願いたいのですが」

あの屋敷の防護は一度破られている。だからそこにサラを置いておくのは危険だと判断した。

「次に私が指定する素材。そして鍛冶場と調合台を貸して下さい」

これから先赴く箇所はどこも危険極まる場所だ。

入念な装備とアイテムが必須の難関の場所。

不死鳥の住処——ヴォルテックス山脈

神々が住むとされる——エウレカ溪谷

ユニコーンが生息しているメイジア湖

世界樹が聳え立つメキラス大森林

世界を照らすトルキア大灯台

正直俺達ではまだ早すぎると考えているが、そんな泣き言など言える状況でない。

ケトグリウスの「承知した」と力強く頷いてくれたことが今の俺にとって唯一の救いだった。

後手（後書き）

次回から冒険になります。

さてと、モデルとなるゲームのステージでも探そうかな……

ヴォルテックス山脈 前編

ヴォルテックス山脈はその付近の山全てが活火山である。

空は相次ぐ噴火による煙で覆われて草木の類是一片もなく、所々にマグマの川が流れていた。

温度は常に60℃オーバーの人間が立ち入ることを許さぬ場所である。

そして、そんな秘境を突き進む7人の影があった。

その7人の順は先頭からキッカ、アイラ、俺、ユキ、エルファ、ティータそしてクロスだった。

本当ならレンジャーであるアイラを先頭に据えたかったのだが、キッカは先頭が良いといって譲らなく、妥協の末にキッカが先頭でアイラが次になった。

次は俺で、何かしら経験を持っているためキッカとアイラに的確なアドバイスを与えるためで、ユキが中央なのはその魔法によって前後ともども支援に回ってもらうためだった。

本来ならエルファとティータは入れたくなかったのだが、ベアトリクスとの約束のため荷物にならない後方へ。

最も防御力のあるクロスは奇襲を警戒して殿へ配属した。

「あっつーー」

「嘘仰い。ユウキ様の装備によってそんなことはないでしょう」

先頭を進むキツカが突然そんなことを喚くがアイラの鋭い返しにタハハと頬をかく。

「いやあ、アイラ。そういうことは分かっているんだけどね。けど、どうしてもマグマの川や火山の噴火を間近で見るとどうしてもそう叫ばずにはいられなくなるのよ」

「しかし、本当に変な気分ですよ。こんなにも火が近くにあるにもかかわらず体感温度は街にいる時と変わらないというのは」

「まあ、それが『氷の羽衣』の効果だからな」

殿を務めているクロスが違和感を覚えるのか己の体をペタペタ障りながら呟いたので俺は頷いた。

氷の羽衣とは冬の女神が織ったと噂される常に冷気を発する糸で作られた衣服である、そして通常の防具の下に着られる薄さだから通常の動きを妨げることもないので、ヴォルテックス火山のような高温地へと向かう際には必須の代物といえる。

「これは普段の生活にでも欲しいわね、特に夏場は最高じゃない」

「凍傷になっても知りませんよ」

「違うって、着るんじゃないで飾るの。そうすれば部屋の中が涼し

いじゃない」

「なるほど、そういう使い方がありましたか」

キツカの知恵周りにアイラが感嘆する。そしてキツカがドヤ顔で皆を見渡す。

「……伝説級の装備で涼を取るな。これ1着作るのにどれだけの手間と金がかかっていると思う？ 俺が泣くぞ？」

糸から発する冷気によって手がかじかみ、あかぎれに苦しみ。着ている者が凍傷にならないよう糸の量を調節して織ったんだ。その苦勞を乗り越えて作った一品をそんな冷房代わりにされては敵わない。

キツカは冗談よと笑っていたが、キツカの性格上絶対に実行する。

俺は苦勞して織った氷の羽衣で涼んでいるキツカを想像して嘆いた。

「……どうしてここから選んだの？」

ユキが話題を変えようとしたのか、エリクサーの素材集めにおいて最も難易度の高いヴォルテックス山脈を選んだのか聞いてくる。

「皇太子や貴族からの妨害を警戒して。まさかあいつらはここから来るだろうと予想していないだろう」

60℃を超えるこの場所に普通の装備で常駐などではしない。俺たちが着ている氷の羽衣のような装備があれば別だが、今のところ

ろこれを作れるのはシマル国に限ると俺一人だから、貴族による妨害は起こらないと踏んでいた。

「……ベアトリクス王女は」

「まあ、予想しているだろうな」

ユキの予想に俺は素直に認める。奴は俺を苦しませることに關しては労力も厭わない。だから俺がヴォルテックス山脈から攻めることは予想がついているだろう、が。

「奴は今回妨害をしない。俺を苦しめるのを至上の喜びとしているなら、こんな序盤で終わらせるのは奴の本意でないだろう」

ベアトリクスが本格的に妨害してくるのは最後かそれともその2番目。だから今のところは奴の心配をする必要がなかった。

そしてしばらくあるいていると開けた場所に出る。中央から端までおよそ50mか、ここならエルファとティータを除いた5人が十分展開でき、罠が張れると俺は踏んだ。

「よし、ここを狩り場とする。ティータとエルファは荷物を持って遠くへ避難してくれ」

俺は振り返り、己と同じぐらいの量の荷物を背負ったエルファとティータにそう指示した。

「……ボク、……ボクは……女性を氣遣う……氣持ちはないのかしら……」

息も絶え絶えに顔を青くしたティータが恨めしそうに述べてくる。顔立ちもよく、人懐っこい雰囲気を持つ女性に大荷物を持たせることは普段の俺でも気が引ける、が。

「戦えないしベアトリクスの手足だろう。そんな奴に気遣う感情は全くない」

「ひどいわね、ボクって」

俺の物言いにティータが本気で悲しそうな顔をした。それにこめかみをひくつかせた俺はティータの前を歩いていたエルファを指さす。

「あのエルファを見てみる、顔色一つ変えていないぞ」

エルファはティータより重い荷物を背負っているはずなのだが、表情どころか息すら乱さず俺達についてきていた。

「エルファと……一緒にしないで」

肩をがっくりと落しながら反論するティータ。しかし、俺から言わせると文句ばかり言いながらもティータも俺たちの動きについてきているので、あまり同情の念は湧かなかった。

ティータとエルファが避難したのを確認した俺は全員に臨戦態勢を取るよう伝える。

「さて、これからどうするの？」

「分かって言っているだろうキツカ、戦うんだよ」

ワクワクと俺が与えたアイスソードの手入れしながら聞いてくるキツカ。

これから先、間違いなく貴族達からの妨害が来る。その時にレベルが足りないせいで負けたとなれば目も当てられない。だからこそ妨害のないここでレベルを上げておく必要があった。

「しかし、大丈夫ですか。ここらあたりの探索推奨レベルは80台ですよ」

極限に近い環境とそれに育まれた魔物の強大さは探索難易度を大幅に跳ね上げる。もっともレベルが高いクロスでさえ42だ。そこから他のメンバーのレベルも推して知るべきだろう。

「まあ、安心しろ。対策は万全だ」

火属性魔物に大ダメージを与える武器に火属性の攻撃を吸収する装備そして何より。

「この場所周辺に結界を張った。これでこの辺りの気温は20℃前後にまで冷え込む」

60℃の環境で生きていたものが20℃の環境で生きていけるだろうか。例え動けたとしても普段通りの力など発揮できまい。50m先にいる俺たちのところまで来たときにはすでに虫の息だろう。

「……魔物は来る？」

「来るぞ、ユキ。いや、正確には来させる」

今、俺達がここに来るまでの間、魔物と接触すれば命に関わるため魔除けである聖水を使用し、さらに魔物とのエンカウントを下げる『忍びの極意』を全員に装備させていた。それでも魔物と戦わざるを得なかったが、対ヴォルテックス山脈装備によって事なきを得ていた。

「使うアイテムはこれ、『匂い袋』」

魔物を呼び寄せる匂い玉が入っている市販品だが、今回は俺特製として火系魔物だけを呼び寄せるよう改造していた。これを辺りにまけばあつという間に魔物が群れを成していやってくるだろう。そう、火属性の魔物にとって非常に不利なこの場所へ。

「勝てますか？」

「勝てるに決まっているだろうクロス、念のためにこれも使う」

STRやDEF、AGIなどの増強する3種類の薬をそれぞれに持たせた。これを飲んでおけば一定時間はレベル60台の敵にも互角で戦うことができる。

「そして、これがブラッディX」

俺は怪しげな薬を取り出してニヤリと笑う。過去にキツカ達の増強のために使用したブラッディXだが、本来の用途はレベルが上がった際にステータスの上昇率が上がる代物だ。今回のように経験値大量獲得の時には相当な効果を上げることだろう。

「さてと、匂い袋を開けるぞ。準備はいいか」

確認のために全員を見渡すが慌てた様子は見受けられない。全員心構えは大丈夫なようだ。

俺は1つ頷いて匂い袋を開けようとしたが、キツカ達のなかで1人だけ異物がいた。

「何をしているエルファ、早くティータのところへ消えろ」

いつ間にか俺たちの戦列にエルファが加わっていたのでシッシと手を振って戻るよう促したが、エルファは一向に動こうとしない。

「主から離れないよう忠告されていますので」

そうだった。

確かそんなルールをベアトリクスと決めていたのを思い出す。

「今はそんなことを言ってられない。お前は死にたいのか？」

これ一種の賭けであり、下手を打てば魔物のエサだ。

キツカ達は予め尋ね、「死んでもいい」と了承を得られたが、エルファに関しては何も聞かなかったし何も言っていなかった。

「俺はお前を危険な目にあわせたくない。だから早くティータのところへ行け。何せ俺とエルファの両方が死ねばサラはどうなる？」

サラにはまだエルファが『草』の一員だということを知られていない。まだ俺専属のメイドだと勘違いしている。だから万が一俺が死んだ場合、悲嘆に暮れるであろうサラを立ち直らせてほしかった。

「主は死にません。何故なら私が守るからです」

嬉しいことを言ってくれるじゃないか。

俺は内心感嘆する。

もし、それがエルファが『草』と知る前に言ってくれば俺は感謝感激の雨嵐だっただろう。全財産を神に捧げてもおかしくはなかった。

が、今はそんなことを言われても寒々しく感じる。

「それはベアトリクスによる命令ゆえか？」

「……」

エルファに近づいて真実かどうか確かめようとしたが、エルファは相変わらず瞳は揺れず感情を読めさせない。

「……ッグ」

主の命令に無視したと認識したチョーカーが装備者の首を絞め始めた。

しかし、それでもエルファは答えようとしなない。

「……もういい」

このままだとエルファが窒息死してしまうと判断した俺は手をパチンと鳴らして解除した。

「お前が俺を守る理由はどうでもいい。だがな、俺はお前に心配されるほど弱くはないぞ？」

気に入らない。

エルファはいったい何をしたいのか。

敵なのか。

それとも味方なのか。

それが分からないから、教えようとしなから苛々する。

酸素を取り入れようと首を抑えてハーハーしているエルファを見ると俺は無性に心がざわめいた。

「……えーと、もういいかしら？」

「止めなさい、3流コントといえども本人達は真剣なのです」

「……パチパチ」

「アハハ」

……エルファのことも気に入らなかったが、キツカ達4人のほう

がもつと気に入らなかった。

俺は怒りを表現するために持っていた匂い袋を地面へ叩き付けた。すると辺りに何とも言えない香りが漂い始める。

しばらくすると開けた場所の端から地面を滑るように向かってくる魔物が現れ始めた。

「ファイアリザードか」

それは全長1mに満たないトカゲで、赤褐色の鱗をギラギラと輝かせる下級魔物だった。

「まあ、ここら辺は予想範囲だな」

下級といえどもこの極限環境で生き残っている魔物だ、決して油断はできない。

この場所で現れる魔物といえばリザードマン、フレイムバード、ファイアエレメントなどだ。

フレイムバードとファイアエレメントはどうにかなるが、リザードマンの中には魔法も唱えてくる奴もいるので侮れないが。

「レッドドラゴンさえ現れなければ大丈夫」

この場所でそんな大物と出会うことなどまずないが、警戒しておいて損はない。何しろヴォルテックス山脈を踏破するためのレベル

を引き上げているのが全種族最高の攻撃力を持つレッドドラゴンの存在。遭遇率は低いものの、奴の存在によってどれだけのプレイヤーが葬られたか。

「さて、いくぞ！」

俺は腰に差していたダガーを抜き取ってそう宣言した。

ヴォルテックス山脈 前編（後書き）

物語はあんまり進んでいないように見えますけど、これだけで約4500文字も使っているんですよ。

ヴォルテックス山脈 後編（前書き）

今回もまた12時を回ってしまった。

うーん……最近執筆速度が落ちているなあ。

ヴォルテックス山脈 後編

？

「……大分狩ったよな」

すでに虫の息であるリザードマンの首にダガーを突き立てて一息吐く。

辺りを見回すと、キッカ達も山は過ぎたらしく、仕留め損なった魔物を追っていた。

ちらりと俺は空を見る。

火山灰によって覆われた空は日光など確認できないが、それでも大体の空の色は予想が付いた。

ふむ、もうそろそろ夜か。

「おーい、ここで野営の準備をするぞ」

日帰りという線は最初から捨ててあるので、どこかで一泊しなければならぬ。

そう考えるとこの開けた場所は絶好の野営場所と言えた。

「もうちょっと待って、後もう少してレベルが75に届く」

「もう良いでしょうキッカ。まだまだ戦闘はあるのですからこちら

辺が切り上げ時です」

「……その通り」

キツカがもうちょっとレベルを上げたいとごねり、それをアイラとユキが諫めているようだ。

「俺が思うにクロスが行くべきだと思うが」

「いやあ、僕じゃキツカを抑えきれないよ」

クロスは俺の問いに首を振るが俺が言っているのはそんなことじゃない。

クロスはキツカと同じレベル74だからキツカを止めて欲しいと言っているのだ。

何せ。

「煩い！ レベル80のアイラとレベル84のユキにそんなこと言われても納得しないわよ！」

アイラはボウガンで遠くから遠距離射撃、そしてユキは魔法で広範囲にわたって魔物を殲滅させたので俺やキツカ、クロスよりもレベルが上になっていた。

「結局お前は何もしなかったな」

戦闘中、影のように付きまとい、かつ本当に俺を見ているだけだったエルファに言い放つが、エルファは視線すら泳がせず無言を貫

いていた。

「えーと、ボク……これは？」

「申し訳ありませんユウキ様、さすがにこれは」

「うん、僕もパス」

ティータ、アイラ、そしてクロスは俺の出したとある料理に明確な否定を出す。まあ、それは予想されていたことだからどうでもいいが、逆に。

「ファイアリザードの唐揚げって初めて食べたけど美味しいわね！」

「……フレイムバードの焼き鳥もいける」

「……」

キツカ、ユキそしてエルファは何の文句も言わず、逆に斬新だと賞賛していた。

今、俺達は野営の準備を終えてご飯を食べている。

パンに干し肉、お湯を掛けるだけでスープに戻る素だけだったのだが、それだけは寂しいと考えた末、魔物を倒した時たまに落とす食材を使用して二品ほど追加させた。

ファイアリザードとフレイムバードの肉を使った料理。リザード

マンの肉はドロップアイテムとして現れなかったので無い。

言い方は悪いがあくまでジョークの品。

皆を驚かせる目的で、食卓に笑いが欲しいから出したのだが、まさかキツカ達3名が美味しそうに食べるとは予想していなかった。

そして俺はというと……

「はい、ユウキ。美味しいよ？」

満面の笑みで出された料理を一口食べて見る。

その味は、豚肉と牛肉を混ぜ合わせて魚醤を掛けたらフアイアリザードの唐揚げ、フレイムバードに至ってはおそらくハトを焼き鳥にしたらこんな味になるのだろう。

食べることは食べるが、不可解な味ゆえに美味しいとは感じない、しかし。

「うん、ありがとう」

作った張本人である俺は食べなければならなかった。

ティータやアイラ、そしてクロスが出されたサバイバル料理を嫌がるのは分かる。

こんな魔物の肉を使用した料理など街で食べることなどほぼ無いからだ。

キツカは冒険者の候補生だからこういった料理を食べるのも分かる。エルファも何らかの機会で食べることがあったのだろう。

しかし、ユキがこれを抵抗感なく食べるのは違和感を覚える。

王立魔法学園はエリートが集まる機関なのでこういったゲテモノに入る部類の料理など出てこないはずなのだが。

「……授業の一環として魔力の増強のためにこの類の物を食すことがある」

これら料理に文句を述べないのはすでに学園で経験済みだったかららしい。しかし、魔法使いとはいえこんなゲテモノを食べる機会など学校側で作るなよ。よく貴族の親からクレームが来なかったな。

「……食べなければ食べないで良い。その代わり魔力は得られなくなるから結局は食べるか学園を去るかどちらかを選ぶことになる」

「なるほどな……って、ユキ!? お前は俺の心を読んだのか?」

あまりに自然だったからスルーしていたが、俺は声に出して独白した覚えがない。

「ユキは心を読めるのよ、だからユキの前では嘘を吐けないわ」

するとキツカが苦笑して俺にそう補足した。

なるほどね、心を読むか。魔法学園ではそんなことも教えているのか。

これは本気で学園に抗議しないといけないな。

「……安心して、ここまでレベルが高いのは多分私だけだから」

「それはちつとも安心できないぞ!？」

――夜

見張りとして交代制を組み込む。

俺とキツカ。

アイラとユキとエルファ。

クロスとティータ

の、3交代制で夜を臨んだ。

テントは2組。

キツカとアイラとユキ。そしてエルファとティータに分かれていた。

俺とクロスは寝袋に入って外で野営。

俺は別にどうということはなく、クロスも了承してくれたのです

んなりとそう決まった。

で、現在。

俺はキツカと共に見張り番をしていた。

聖水と結界の効果によって魔物など滅多に侵入してこないが、それでも少しはこちらへ向かってくる。

特に飢餓状態の魔物など脇目もふらずに一直線に来るから御し難い。

「てりゃっ」

まあ、その代わり動きが単調だからキツカによる軽めの一撃でも十分昇天させることが出来るのだが。

「どうだ、レベルは上がったか？」

「んー、やっぱり一匹じゃ無理みたい」

俺の問いに人差し指を唇にあてて考え込むように述べるキツカ。それに俺は苦笑して「それは残念」とだけ述べておいた。

「……」

「……」

それっきり、お互い無言。

キツカは何か考えているようだが、その横顔から考えを推察することが出来ない。

あの単純を地で行くキツカの表情を読めないとは一体どうしたことだろう。

「……ねえ、ユウキ」

俺が心の中で自己嫌悪に陥っていると、突然キツカが口を開いた。それはいつもの陽気な口調でなく、抑揚の抑えて話すアイラと似通っていた。

「遅すぎたけど言うわ……ありがとう、私達を拾ってくれて」

そう言ってキツカは立ち上がり、空へ向かってウーンと背伸びをする。

「ユウキと出会ってから私の人生は180°変わったわ。今日をどうやって生き延びようか考えていた日から明後日はどこを冒険しようか。ねえ、それってとてもすごいことじゃない？」

キツカはこちらを向かずに語りかける。だから今、キツカの表情がどうなっているのか確認できなかった。

「私はね、世界を知りたいの。大地の終わり、そして海の果てに何かがあるのかこの眼で確かめたいわ」

「……そうか、それは良いことだ。思いっきりやればいい」

キツカの夢は本人の、そして周りの態度から薄々感付いていた。

だから俺はあまり驚かない。

「ユウキのように後援者となってくれる存在がどれだけありがたいか。私の周りは後援者探しを躍起になっているのに」

「キツカは自分を卑下しない方が良い。キツカほどの実力があれば後援者など掃いて捨てるほど集まる」

「アハハ、ありがと」

キツカは肩を震わせて笑った。

「私は鳥よ。この広い世界を飛び回る自由な鳥」

キツカが両手を広げて上を向く。燃えるような真っ赤な髪と元気なポニーテール姿のキツカはまるで今から空を飛び立つ鳥と錯覚した。

「でもね、鳥には帰る場所が必要な。鳥はどれだけ遠くへ行っても必ず自分の巣へと帰ってくる」

ここで始めて俺の方へ振り向く。キツカの瞳は普段のおちゃらけた印象は無く、湖の底を映したような静謐なイメージがあった。

「ユウキは巣よ。いつまでも変わらない、ずっと同じ場所にあって入ると安心する役目がある」

どう言えばいいのだろう、普段と違うキツカの表情に俺はただ黙って聞いているしか出来ない。

「私はユウキが変わってほしくない。ベアトリクスか何だか知らないけどあんな存在によってユウキが変わらなくて良い」

「……それは無理だ」

キツカのその言葉に俺は反射的に首を振る。

ベアトリクスだけは今の俺だと太刀打ちできない。早急に奴を倒せる自分へ変化する必要があると感じていた。

が、キツカはフルフルと首を振り、しゃがみこんで俺と目線を合わせる。

「ユウキはそのままです。無防備な、全てを受け入れるユウキのままです。欲しい。もしユウキの存在を変質させるような奴がいたら、それは私が、いえ私達が排除してあげるから」

「……」

キツカは真剣そのものだ。目も、口も、雰囲気さえも茶々が入る隙間が微塵にも無い。ここで喪失による怯えの色が見えたのなら俺は否と唱えることが出来るのだが、ここまで純粹に想われているとなると口は開けても言葉が出てこなかった。

「ん、ちょっと私らしくなかったわね」

しばらくの間、俺とキツカは見つめ合っているとキツカは立ち上がってニヤハハと笑う。

「ちょっと向こうで頭を冷やしてくるわ、だからしばらくお願い」

俺が何かを言うより早くそう言いきったキツカはクルリと踵を返して奥へと去っていく。その後ろ姿はしっかりと伸び、後ろめたい様子など全く見えない。

「……」

その姿を俺はあらゆる感情を込めてずっと見つめていた。

「さて、ここの山頂が良いな」

次の日――

俺達はヴォルテックス山脈の内、一つの山の山頂付近に立っていた。

その山は他の山と変わらず絶賛活動中で、火口を覗くとマグマがボコボコ音を立てていた。

「うーん、これで噴火したら面白いんだけどね」

相変わらず恐ろしいことを口走るキツカ。

もし噴火すればマグマのと火山岩の雨嵐に俺達は命の危険に晒されると言うのに。

「キツカは普段通りだよな」

活火山の中を興味深そうに眺めている様子を見ると昨日のあれは嘘だったんじゃないかと錯覚してしまう。

が。もし嘘だったとしても俺の悩みは消えるわけじゃない。

キツカの指摘通り、俺はここ最近焦っていたようだ。

ベアトリクスと対面してから俺は落ち着きが無くなり、じっとしていることが少なくなったように感じられる。

「少し自分を見つめ直す必要があるかな」

不安定な状態のままでは奴に敵うまい。

少なくともベアトリクスに相對するためには身も心も万全の状態にしておきたかった。

「不死鳥の羽を取るにはどうするのですか？」

「アイラか。何、これを使う」

そう言って取り出したのは『炎の欠片』。どういう理屈か、燃える物が何も入っていない密封状態の小瓶の中で炎がメラメラと燃えていた。

「炎の欠片は不死鳥——フェニックスの卵だ。これを適当な活火山に入ればフェニックスが誕生する」

ケトグリウスにいくつかの素材を頼んでおいた際、これも含まれていた。

結構レアな代物なのであったら良いという程度で考えていたのだが、実際あった時には「どうしてこれが？」という微かな戦慄を覚えた。シマール国もまだ捨てたもんじゃないらしい。

「エルファ、本当にティータの所で待たなくて良いのだな？」

俺の最後通牒にエルファはコクリと頷いた。

「どうなっても知らんぞ」

俺は小瓶の蓋を開けて活火山の火口へ放り込んだ。

キ———！！

数分後、火口から耳の劈く様な奇声が辺りに響き渡った。

キツカ達が耳をやられていないか確認すると、全員耳を押さえている。

どうやら被害はないらしい。

キツカが「そういうのは早く言ってよ」とジト目で訴えている程度だった。

すまん、忘れていた。

が、遊びもここまで火口から両翼合わせて2 m強の炎の化身が姿を現した。

フェニックス——幼少時にはすでに2 mを超え、最盛期に入ると5 m近くになる危険な魔物。全身が炎から出来ており、その身に近づくだけでもダメージを受けてしまう。

「さて、やるぞ。ユキとアイラは援護、クロスは2人の防御。攻撃は俺とキツカがやる！」

ありがたいことに、俺の命令に4人はそれほど文句も言わずに従ってくれた。

「アイラ！ ユキ！ 羽を狙え、まずは地面に叩き落とせ！」

空を飛ばれていると厄介だ。こちらは何もできず、向こうは攻撃し放題。遠距離攻撃の火炎弾は吸収できるからまだ良いが、ハヤブサ並の垂直落下は洒落にならない。しかも逃げられたら困るし。

「クロス！ 楯を構えろ、来るぞ！」

アイラとユキによって羽を損傷されて飛べなくなったフェニックスは地面へと墜落する。その衝撃は相当大きいが、致命傷にならない。しかもそれどころか損傷した翼をこちらへ振り回してきた。

灼熱を宿らせた翼は例え火属性の攻撃を吸収できるからと言っても、薄い防具ではたやすくその許容量を超えてしまう。

身軽な俺とキツカはすぐさまその場から退避し、それ以外はクロ

スが持つ大楯の裏に隠れた。

ゴバアッ！！

俺の足先数cmを境界線とし、溶けた地面とそうでない地面に分けられた。その間一髪さに冷や汗を垂らす。

「キツカ！ 行くぞ！」

あの羽の攻撃さえ触れなければどうということはない。俺は迷わず赤銅色に溶けた地面を踏み締めてフェニックスへと向かった。

「キツカ！ 狙うは右翼。俺は尾の方からやるからお前は頭の方からやってくれ！」

本当なら一息で終わらせたいが、残念ながら俺達の武器ではあのフェニックスの羽の半分まで進んだ所で溶けてしまうだろう。それほどあの羽には高熱が宿っていた。

「せーの！」

キツカの掛け声と合わせ、アイラとユキの攻撃に集中力を割いているフェニックスの羽を一息に切り裂いた。

キシヤアア！！

フェニックスの絶叫が頭に響く。

それに俺は顔をしかめながら用意しておいた何本もの鉄の棒を取り出してフェニックスの残された羽と尾を地面へ縫い付けた。

「よし！ フェニックスがあれを溶かしきる前にティータの所まで去るぞ！ 全速力でな！」

持ってきてあった鉄の棒の内1本を串代わりに切り裂いたフェニックスの羽を突き刺して俺はすぐにこの場を去る。

フェニックスの容体を見ると、すでに火の耐性がある鉄の棒が溶け始めていた。これでは数分も持つまい。

「あれ、大丈夫？ 私達を襲ってきたりしない？」

俺の横に合流したキッカが聞いてきた。

「いつまでもその場にいれば襲われる。しかし、あのフェニックスは赤子で、しかもけがを負っている。あれを直すためにはしばらく時間がかかるだろうから大丈夫」

フェニックスは火さえあれば容易に回復する。片羽を失っているが、あんなものは火山の火口に飛びこめば1、2時間もしない内に元通りになるだろう。

「止めを刺さなくて良かったのですか」

「アイウ。止めを刺さないじゃなく、止めを刺せないの方が正しいな。俺達の武器じゃすぐに溶けてしまう」

あの高熱の羽を受け止めたクロスの大楯はもうボロボロだ。しかも本体は羽よりもさらに高熱。羽如きに溶けるようでは本体など刺すと同時に蒸発してしまうだろう。

と、言うかそれ以前にフェニックスを倒すことなんてゲーム的に不可能。どれだけ攻撃しても奴本体にはダメージを与えられない仕様となっていた。

「目的は果たした！　後はティータの所まで戻るだけだ！」

通常ならフェニックスは傷を癒すために火口へ入るのが普通だが、あまりの怒りによって俺達を追ってくる可能性も零じゃない。

だから俺はスピードを緩めずにその場を走っていった。

エリクサーの素材その1――『不死鳥の羽』を手に入れた。

ヴォルテックス山脈 後編（後書き）

戦闘シーンはやはり難しい。
今回の話でそれを痛感しました。

エウレカ溪谷 前篇

エウレカ溪谷の最大の特徴といえば大陸最高峰の美しさを持つエウレカ川を中心とした石砂利道だろう。

大小様々な石が道を形成し、たまに苔むすんだ石が彩りを添えている。

神々の住む溪谷——まさしくその名に恥じない美しさだった。

が、それはあくまで観賞するに当たってはそうだが、実際歩くとなるとんでもない労力を強いられる。

平坦でなくごつごつしているのはいわずもがな、体重を乗せるとグラグラ揺れる不安定な石もある。だから怪我をしないよう歩く速度が遅くなるのが一般的だが。

「……これは不思議な感覚」

ユキが自分の足元を見て驚いている。

しかし、俺の作った『フェザーブーツ』はその難問を易々と突破していた。

何の原理か分からないが羽ばたきもせず、常にプカプカと浮いている『ウイングススニーカー』の鱗を特殊加工したブーツで、これを履いている者は僅か数cm程度地面から浮くことが出来た。

だから俺達はデコボコな地面にそれほど苦労せずサクサクと進ん

でいた。

フェザーブーツとよく似た効果を持つ魔法——『浮遊』はあるが、それは魔力によって己の体を持ち上げているにすぎない。つまり、魔力の制御によって前へと進めるが、このフェザーブーツだと空中を地面と同じように踏んで(?)進まなければならない。

キツカ達は持ち前の勘によってこの感覚を至極早めに慣れていたが、ユキだけは魔法使いで運動神経が無いのか全然慣れずに恐る恐る進んでいた。

「おーい、慣れないようだったら魔法を使ってもいいぞ」

これはあくまで魔法を使えない者のためにある装備であり、魔法使いには無用の長物だ。いや、それどころか空を飛ぶ感覚を鈍らせるから使用しない方が良いのかもしれない。

が、ユキは俺の提案に首を振って「これで良い」と答えた。

「……浮遊の消費MPは半端ない」

どうやら浮遊という魔法はレベル80台のユキでさえMPの消費を気にするほど多大なものらしい。

確かに今考えると高レベル魔法使いプレイヤーでも浮遊を使う場面は滅多になかった気がする。

俺は使えなかったから分からないが、便利な魔法はポンポンと使えるようなものではないのだろう。

俺はそう納得することにした。

「クロス、どうしてここが神々の住む場所と呼ばれているか知っているか？」

道中——手持無沙汰なクロスに話しかける。

ここら辺の魔物はヴォルテックス山脈に出てくる魔物より数段階弱いので、不意打ちさえ気にしなければ恐れるに足らなかった。

不意打ちといってもキツカの動物的勘や、アイラのレンジャー譲りの索敵術から逃れられる魔物などこの辺りには絶対いないと思う。

「うーん、景色があまりに美しいから？」

クロスが首を捻りながら答える。

うん、半分の50点。

確かに何も知らなければそのように考えても仕方ないだろう。

しかし、このエウレカ溪谷と同レベルの景観を誇る場所は他にもある。

それにも拘らずエウレカ溪谷だけが神々の済む場所と揶揄されるのは。

「ここには神獣が住んでいるのよね」

俺のセリフをティータが横から奪っていった。

「神獣？」

おかげでクロスの視線が俺からティータへと移ってしまう。俺の無言の抗議を知ってか知らずかティータが続けて。

「神獣というのは一般的に私達と会話できるほど高度な知性を持ち、そして圧倒的な力量を持っている魔物をさすのよ」

その意味ではフェニックスやレッドドラゴンは入らないな。あいつらは相当な力量を持っているが、本能のままに動き、自分以外全てを餌だと考えている節がある。

「ここで生息している神獣は相当な数に上るけど、やはり最も有名なのは常に稲妻を操るトール・タイガーね。それと会ったら変な行動を取っちゃ駄目よ。何しろ、紫電を纏わせたあの毛皮の防御力は恐ろしく高いの。並みの武器じゃあ毛一本すら切ることが出来ないわ」

「恐ろしいですね」

「うん。でも大丈夫。トール・タイガーは基本温厚で言葉も通じるから、ちゃんと恐れずに堂々と向き合えば無傷で済むわよ」

ティータは笑顔でクロスをフォローするが、あれを目の前にして堂々と出来る人間などどれくらいいるだろう。

全長10mは越え、周りは常に帯電してバチバチと放電している。

あの身長の半分ぐらいある顔に正面から向き合えるのは至難の業だぞ。

クロスがこのエウレカ渓谷の由来は分かってもらった。

しかし、俺はそれに納得がいかない。

考えて欲しい。

元々俺は暇つぶしのためにエウレカ渓谷の由来を知らないであろうクロスに話題を振った。

しかし、それを横から搔っ攫われてしまい、俺はティータの説明を横に相槌を打つだけに終わってしまった。

つまり本来の目的は達成されていない。

達成を阻止したティータには少なからず罰を与えなくてはいいけないだろう。

そう、だから。

「ちよ、ちよっとボク!? チョーカーが! チョーカーがキツクなってきたいるのだけど!?!」

ティータの叫びに俺は無言を貫いた。

そんなこんなで進んでいくと、先に浅瀬のたまり場があった。

「うわー、綺麗ね。魚が泳いでいるのを確認できるわよ」

冒険者としての血が騒ぐのだろう。

キツカがウズウズさせている。

「キャッチ&リリースを守ってくれるのなら取っても良いぞ」

「え？ 食べちゃ駄目なの」

おい、どうしてそんな疑問を抱く？ ここへなにし来たのだ。

「食べるために火を起こして貴族の私兵に場所を教えるわけにはいかないでしょう」

俺の代わりにアイラが額に手を置きながら答えた。

ここはヴォルテックス山脈と違って人が入ることが出来る場所なので、当然俺達を妨害することも出来る。

いくらレベルが上がったと言っても俺達は非戦闘員含めて7人。

そんな少人数で、奇襲を受けたら目も当てられない。

だから俺は魚を焼くための焚火を禁止しようとした。

「大丈夫よ、ユキの魔法があるから」

が、キツカは俺達の懸念を上回る解答法を導き出す。

「だが、それはなあ……」

確かに魔法の火を使えば音も煙も出ないが、一定の火力を長時間キープするというのは繊細なコントロールと多大な魔力の両方が必要である。緊急の事態ならまだしもたかがご飯程度でMPを使用するのは抵抗がある。

「私なら大丈夫」

いつになく自信満々に答えるユキ。どうした、何があった？

「美味しいご飯こそ生きる原点。それ比べればMPが零になるくらいどうってこない」

いや、どうってことあるよ！？　それでMP尽きて戦闘に役立ちませんなんて洒落にならないんだけど。

「MPなら心配要らないわよ。ボクがMP回復用のポーションを大量に持っているから」

「ティーター!？」

思わぬところからの裏切りに俺は目をむく。

「万が一が起これば死ぬのだぞ、何危険度上げてんの？」

「アハハ、いいじゃない」

ティータは全く罪悪感を感じていなかったので俺は少しバツを与

えようとしたのだが、キツカから「無粋なことしないの」と止められた。

「諦めよう。この流れになれば僕達じゃ止められないよ」

「クロス……」

俺の肩に手を置いて慰めるように語ってくる。

「クロスは止めようとした素振りは見せなかったな」

俺を励ましてくれるのはありがたいが、確かクロスは賛成も反対もしなかった覚えがあるが。

俺がそう指摘するとクロスは曖昧な笑みを浮かべてごまかしてきた。

「確認したところ、周りに動く物体はありませんね」

そうしている内に先程まで反対していたアイラまで乗り気になっているし。

「じゃあ私は森に行って食べられそうな魔物でも取ってくるね」

言うが早いキツカは俺が止める間もなく川の横に繁茂してある森の中へと消えていった。

「はあ……」

もうこうなれば仕方ない。

俺も諦めて食事の準備もといキャンプの準備をした。

キツカが狩ってきた獣とアイラとクロスが釣った魚をメインと添えた食事はとても美味しかった。やはりエウレカ渓谷は自然豊かなので川と森の幸を十分に堪能できました。

「何かもう、国自体はすごいけど人の腐敗は進んでいるな」

昼食を終えた俺達はそのまま奥へと向かっていると、途中で煙が上がっているのを確認できた。

何かと思ってキツカとアイラに偵察させると、案の定貴族による私兵達だった。

数は20〜30人。その人数から一貴族の私兵によるものだと推測できる。

「私達を油断させる罠かと思って周りを確認しましたが、めばしいものはありませんでした。どうやら本気のようにです」

「それにしてもどうしてこんな人数なのか。普通ならもっと大人数を揃えるのが常だろうが」

「んー、どうやら貴族達の足並みがそろっていないわね。まあ、いち早くボクの首を取った者が褒賞を受けられる通達をフォルター宰

相がしていたから、チームワークを求める方が無理なのかも」

ティータの説明を受けて納得する俺。

なるほどね。

つまり俺達は舐められているわけか。

確かについ先程までレベル30台だったからそう考えるのも無理はないかもしれない。

ちょうど良い機会だ。

今の俺達はどこまで強くなったのか試させてもらおうか。

俺達は音もなく彼らの風下へと移動する。

「本当にやるの？」

ティータからの問いに俺は頷く。

俺達を追っている以上、追跡のための準備はしていると思われるので、遠からず出会うことになるだろう。

必ず出会って戦うのであれば、今先手を打っておいて損はない。

障害物は早目に除去しておいた方が良さだろう。

俺は森の中から彼らの様子を確認する。

食事の方に意識が言っているせいか彼らの表情に警戒心というのを見出せなかった。

「さて、殺るか」

俺はそう呟いてダガーを取り出した。

「震えているのですか？」

と、ここまで沈黙を保っていたエルファが口を開いた。その問いは疑問を聞くと言うより確認の意味の方が強い。

「まあな、これでもまだ人を殺したことが無いんだ。だから武者震いというやつかな」

プレイヤーだった頃はNPCの盗賊やPKを犯したプレイヤーを殺したことはあるが、今回のように死んだら終わりという限りなく現実に近い中で殺しを行うのは始めてだ。

「けど大丈夫。こういうのは一度経験すれば何とかなる」

俺が震えているのは殺しというのがどんなものが知らず、未知だからだ。ここで一人でも殺っておけばこの震えも無くなるだろうと思う。

「ユキ、まず魔法をあของกลุ่มに投げ込んでくれ」

先手必勝。

まずはユキの広範囲殲滅型魔法で先手を取り、敵が慌てている隙

に全滅させようとプランを組んだのだが。

「ユウキは遠くへ離れていて」

キツカによって止められてしまった。どうして止めるのかと、俺は目を向ける。

するとキツカは瞳を揺らさず真剣な目でこちらを見返してくる。

「私はあの時言ったよね、『ユウキには変わらないでほしい』と」

確かに。あの夜の時にそう告白された。

「そう、ユウキは変わってほしくないから人殺しなんてしてほしくない。出来れば人殺しを行う私達も見te欲しくないわ」

「子供扱いするな。それぐらいで変わりは――」

「するわ」

俺の口上を遮ってキツカがのたまう。

「人を殺す前と後では明らかに違う。それは知らなくても良い変化、だからユウキは向こうへ行ってほしい」

そのキツカの口調に押され気味の俺。ふと周りを見るとアイラやクロス、あのユキでさえも沈痛な表情をこちらへ向けていた。

「大丈夫よ、10分もかからないと思うから近くで待っていてね」

「どうやらキツカ達は本気で俺に人殺しをさせたくないらしい。

「だが、それでも俺はやらなければならない」

本音を言うとキツカ達の勧めに従いたい。覚悟を決めたはずなのに殺しを行うことを想像すると震えが走ってしまう。

しかし、それから逃げては駄目だろう。

あのベアトリクスのことだから必ず殺しの類をしなければならぬ状況を作り上げてくる。

その時のために俺はここで一つ成長しておかなければならないと考えていた。

「それならば妥協案で主に観察してもらおうというのはどうでしょうか」

エルファが悪魔の様な笑みを浮かべてそう進言する。

「ユウキ様はキツカ達と一緒にあの場へと突っ込む。しかし、殺人はしない。それならキツカ様と主の両方の望みを叶えられます」

「しかし……」

キツカが何か述べようとしたが、それより先にエルファが先制する。

「どうしましたか、もしかしてキツカ様は主が別の一面を見ただけで変質する輩だと勘違いしているのですか」

クツクツクツと笑う。

「大丈夫ですよ。それぐらいで主が態度を変遷するということはありません」

「お前が言うと言説力があるな……」

最初から俺を観察していたエルファだからゆえにその言の重みはあった。

キツカはどうしようか悩んでいる。

それはおそらく自分達の綺麗な面だけを見て欲しいという願望と、自分達の全てを見て欲しいという欲求の二つがせめぎ合っているように思えた。

「……良いわ」

しばらく逡巡した末にキツカはそう絞り出す。

「ユウキには全てを見てもらうわ。けどね、ユウキ。これだけは覚えておいて、これは私達のある一面だということを」

アイラがダガーを預かると言うようにこちらへ手を差し出したので俺はその手にダガーを乗せる。

「エルファ様はユウキ様の護衛をお願いします」

そのアイラの口調は今までと比べ、さらに事務的な口調へと変化

していた。

そして、ユキが杖を構える。

「……地獄の淵に存在する黒き雷、罪人を永劫の呪縛へと導かんその姿を我の前へ見せよ——ジゴスパーク」

神々の住む地に地獄が出現した。

エウレカ溪谷 前篇（後書き）

ジゴスパークはDQからパクリました。

テリーのワンダーランドで、召喚したバズウがマホカンタがかかっている相手に向かってジゴスパークをぶっ放して死にかけたのは良い思い出……

エウレカ溪谷 後編（前書き）

ようやく書き終えることが出来ました。

小説を投稿するにあたり、かなりの日数が空いてしまいましたので前回と比べて違和感を覚えるかもしれませんのご了承ください。

エウレカ溪谷 後編

「滝だな」

「滝ね」

「滝です」

俺、キッカそしてアイラが断崖絶壁の岩盤と、度等の如く流れゆく滝を見上げて呟く。

今、俺達のいる場所は滝壺が見える高台におり、落下した水から湧き上がる水煙によってじっとしていると体のあちこちが濡れてきた。

仮にもこの高台は滝壺まで10m上にあるが落下する水の高さはその3倍を超えているので仕方が無いのだろうか。

「……登れそう？」

「んー、無理そうだね。岩盤にとりつく以前にあの滝を超えるは厳しいんじゃないかな」

ユキの問いにクロスは拾った小枝を滝に投げてみる。

すると瞬間移動でもしたかのように残像を残して落下していった。

「クロスちゃんならいけるんじゃないの？」

「アハハ、ティータさん。僕だとあの滝は越えられるけどその後の岩盤に登りきる自信が無いよ」

クロスの重装備なら滝水にも耐えられるかもしれないが、キツカやアイラ並みの身軽さが無いので登るのは難しいだろう。

「ねえ、他に道は無かったの？」

「分かっているでしょうキツカ。他の道は貴族の私兵が全て壊したのよ。あの瓦礫を超えるのはいくらユウキ様のフェザーブーツでも無理です。それとも神獣が跋扈する道を通るかしら？」

「それは無理。あんな奴らを相手にすれば命がいくらあっても足りないわ」

アイラの提案に腰砕けになるキツカ。

動物的勘が優れているキツカが否と述べるなら、それは本当に不可能なのだろう。キツカは自由奔放で見ているからに危ういが、引くところは引いてみせる潔さも兼ね備えている。キツカの勘に従ってから俺達が窮地に陥った場面など無かった。

「それにしても本当に貴族の私兵は厄介なことをしてくれたものです」

アイラの苛立ちも分かる。俺達はキツカとアイラの案内のもと順調に進んでいたのだが、目的地まであと一息という場面で道が瓦礫によって塞がれていた。

両脇を見ると不自然な崩れがあったので、おそらく魔法なり道具

なりで両脇を削り取ってがけ崩れを起こさせたのだろう。

「これはベアトリクスに入れ知恵か？」

仲間を纏めることすらできない貴族らがこのような知恵を持って
いるのは考え辛い。もしいたら必ずここら辺りに兵を伏せるはずだ。
後は瓦礫で伏せられ逃げ場はない。つまり一網打尽に出来るわけだ。

それらの要素からここは奴が貴族の私兵に助言をしたというのが
しっくりきた。

「考えすぎだよ、ユウキ」

思い悩む俺に対してクロスが苦笑交じりに励ます。

「何でもかんでもベアトリクス王女と結びつけるのは良くないよ。
確かに彼女の狂気は恐ろしいけど僕達が傍にいる。だからそんなに
怯えないで」

クロスから見ると俺は奴に対して過剰な畏怖を抱いているように
見えたらしい。指摘されて初めて気付いた。

「ありがとうクロス、少し気分が楽になった。ところでクロスは奴
を王女と呼んでいるが、奴を王女と呼べるほど心に余裕があるのか
？」

王宮で奴と相対した時からクロスを含む4人は彼女に対して少な
くとも俺より悪印象を抱いていない。よく見ると嫌悪感があった様
な気がするけど、もしかしてどこかで似たような人物と接触したの
だろうか。

「浮浪児時代、スラムで色々な気質を持つ人と嫌でも接していたからね。けど、ベアトリクス王女クラスの狂人はスラムでも希だよ、だから安心してほしいな」

何を安心してほしいのか分からないが、俺を落ち着かせるための言葉だと感じられたので、俺は頷いた。

「ユキ、浮遊は何人までいけるか？」

俺がそう確認を取るとユキは少しの間考え込んだ後に「1人まで」と答えた。

「それならユキと俺で良いか？」

1人しか同行できないのであれば俺が行った方が手っ取り早い。キッカやアイラまでの動きはできなくともそれなりに修練を積んでいるし、何よりも目的の品である『神の涙』の在り処を知っているのはこのメンバー内で俺だけだ。

その提案にキッカは難色を示したが、それ以外に方法が無いことを悟り、不承不承了承してくれた。

「どれだけ遅くとも1時間はかからないと思うから近くで待機していてくれ」

ユキに背負われながら俺は振り返ってそう叫んだ。

水が出ている個所の先は洞窟に繋がっており、肉眼では先が見通せなかったので持ってきた道具からランタンを取り出して火を灯す。

後ろから響く水の落下音を聞きながら俺達は水源地へと向かった。

「……聞いていい？」

しばらく2人きりで歩いているとユキがそう声をかけてきたので、俺は頷く。

「ユウキは私達を失望した？」

ユキが聞いているのは貴族の私兵を皆殺しにした場面。あの時、ユキ達は淡々と、むしろ楽しそうに敵を屠っているのを見てどう思ったのかを尋ねていた。

「別にどうということはない。ユキはユキだ、それ以上でも以下でもない」

少なくとも俺が知らない一面を見せられたところで俺の態度が変わるわけでもない……見ていて気持ちのいい面ではないのは確かだ
が。

「でもエルファやティータの扱いは変わっている」

「前提が違う。その2人は俺を利用する目的で欺いていた。しかしユキ達は今の関係を壊したくないから隠していた。だから扱いが変わるのは当然だ」

そこに悪意があったか否か。

俺の判断基準はそこにある。

善意で行ったものならばどれだけ被害を受けようとも最低1度だけは笑って許す。

しかし、悪意によるものは1度たりとも許さない。

「心が広い」

ユキが尊敬の眼差しを向けてくるが、それに俺は胸を張ることはできない。

何故ならば、俺の場合だとどれだけ底辺に墮とされようともそこから這い上がれるだけの力量を持っているし、何よりも俺自身この世界に対してそれほど愛着を持っていない。だから比較的主観が入らずに客観的に善悪を判断することが出来るだけ。

おそらくユキを含めた全員も、世界はここだけでなくもっと別の世界が存在していることを知れば俺の様な心境になれるんじゃないかなと考えた。

そのまま俺達は無言のままだったが、ここで気にしていた点があったので聞いてみる。

「なあ、ユキも俺に変わってほしくないのか？」

どうしてもキッカからの告白が頭から離れない。

キッカは俺に代わるなと懇願した。俺が変質する要素は私達がす

べて排除するから俺は俺のままでもいいと欲しいと。

あの時はキツカの迫力と場の雰囲気の流れされて頷いてしまったが、本当にそれでいいのだろうか。そんな思いが時たま脳裏によぎっていた。

「ユウキは1人で立ち向かうならば変わらないといけない」

ユキの答えは予想に反してキツカとは正反対の見解だったので俺は驚く。

「ベアトリクス王女の狂気を打ち勝つためには現状のままじゃ無理、必ず敗れ去る」

「へえ、どうして負けるのか聞きたいな」

俺は興味半分でユキに続きを促す。するとユキは顔を上げ、その瞳の焦点を俺に合わせて言い放つ。

「ユウキはルールを絶対と捉え、ベアトリクス王女はルールを目安と考えているから。だからベアトリクス王女はその時の気分で反則を犯すことに躊躇わない、いざという時になると勝負を反故するのが目に見えている」

虚を突かれた気分だ。

もし、ルールを目安と捉えていたのなら、ベアトリクス王女から解放された時点でどこか奴の目の届かない場所へ逃げることが出来たのだ。

しかし、俺はご丁寧にもケトグリウスの前でエリクサーを作るところを宣言してしまった。その結果、俺は自ら逃げ道を塞いでしまった。

「アハハ、無様すぎて言葉が出ないな」

あの時の行動を振り返り、己の行動を迂闊さに右手で顔を隠す。

あの時一目散に逃げていれば。

奴の目の前から姿を消していれば、今頃俺は少なくともここまで危険な目に会わずに済んだと自虐する。

「仕方ない、変わるしかな——」

「ユウキ、私の言葉を聞いていなかった？」

自分の不甲斐無さに呆れかえっていると、普段とは違った鋭い声音で俺を責める。

「私は1人ならば、と言ったの。私達が付いているからユウキは変わる必要が無い」

「どういう意味だ？　もしかしてユキもキツカと同意見なのか」

俺の問いにユキはコクリと顎を下げる。

「その通り、私だけでなくアイラやクロスもそう考えている」

ユキ達は長い間4人で行動を共にしていたから、彼らの考えもあ

る程度予想出来るのだろう。だからユキの言葉は真実だと考える。

「ユキにとって俺は何だ？」

キツカは俺を巣だと言った。絶対に変わらない、安らげる唯一の場所だとキツカは言っていたが、ユキも同意見なのか。

ユキは小首を傾げ、そして出た言葉は。

「踏み台」

「おい！？」

予想の斜め上をいく酷い言葉だった。

「——というのは冗談で」

「冗談に聞こえないのだが」

ユキの悪ふざけは本当に区別が付かない。

そういえば鍛冶職人時代を振り返ってみると顧客の中でも魔術師はかなり高慢な態度を取っていた覚えがある。

やはり一般人には使えない能力を持っていると人は尊大になるのだろうか。

「その予想は概ね合っている」

「だから心を読むなどあれほど言っているだろうが」

俺は肩を掴んでユキをガクンガクンと思いつき揺さぶる。
ユキが目を回して「止めて」と言うが気にしない、あのシリアスな
空気を返せとばかりに気の済むまで行った、が。

「……気は済んだ？」

ユキの三半規管よりも俺の腕の方が先に悲鳴を上げてしまった。
疲れた腕を解している俺に向かってそう言うのだが、心なしか蔑ん
でいるように聞こえるのは気のせいだろうか。

「本当のところ、私はユウキがどんな存在なのか分からない」

「どういうことだ？」

そう聞き返すがユキは目を瞑り、首を振って同じ言葉を繰り返す
だけ。

「分からない、私はキツカ並みの勘は持っていないけど、浮浪児時
代を生き抜いたから相応の勘は持っているはず。けど、その勘さえ
もユウキが何者なのか分からない」

「それは、敵か味方か分からないという意味か？」

「ううん、ユウキは味方なのは確か。でないとキツカがそこまでユ
ウキに懐くはずが無い。私が分からないのは、ユウキは味方の中で
どの立ち位置に属しているか」

友人か、家族か、後援者か、それとも……

「最後のはありえない」

想像すら許されなかった。何となく責められている感じがしたので頭をかく。

そうしている内にユキは背を向けて道を歩き始めた。

「……私なんかが釣り合うはずが無い」

ユキがポツリとそう呟いたらしいが、残念ながら何を言っているのか聞き取れなかった。だからもう一度言ってほしいと催促したのだが、ユキは答えずスタスタと先へと進んでしまった。

「……わあ」

ユキがその光景を見て驚くのも分かる。

洞窟の最深部には泉が滾々と湧き出しているのだが。ある鍾乳石の上から垂れてくる水滴のが光り輝いているのだ。

「この水滴が『神の涙』。神々の溪谷とまで呼ばれ、神獣を住ませる要因」

神の涙はそれ単体だとエリクサーに匹敵する浄化作用を持つが、それは採取してから数時間の内だけ。半永久的に保存が出来ない代物だった。

「さてと、早めに取りよう。待たせるとキツカ達に悪いしな」

俺は小瓶を取り出してその輝く水滴が落ちる鍾乳石の下に設置する。こうしておけば30分も経たない内に満たされるだろう。

「このまま何も起こらないでほしいのだけだな」

俺は心の底からそう願うのだが、残念ながらそうは問屋が卸さない。こういう場面には必ずと言っていいほど妨害者が現れるのだ。

グルルルル

その唸り声と共に『主』が姿を現す。

体長は推定7、8m。白と黒のコントラストの模様から発せられる放電音を持つ神獣——トール・タイガーだった。

「人間よ、何をしにこの聖域まで足を踏み入れる？」

静かな語りだがその言葉の端々から怒りが滲み出ている。ここで答えを違え様物ならすぐさま戦闘へと突入してしまうことが容易に想像できた。

「神の涙を取りにきた。この場所を荒らす気は毛頭ない。用がすめばこの場をすぐに立ち去ることを誓おう」

「信じられると思うか？」

突然現れて信じろと言われても無理だろう。俺でもそう思う。

「この場を人間どもに荒らされるわけにはいかぬ。ゆえに気の毒だ

がこの場所を知っている貴様らには死んでもらう必要があるのだが、何か言い残すことはあるか？」

ユキが隣で杖を構えるが俺は手を突き出してそれを阻止する。戦闘は最終手段、まだ向こうが手を出してこない内は交渉の余地がある。

だから俺は予め用意してあった2つの木の実を差し出した。

「これは何だ？」

紫という変わった色をしている木の実を覗きこむ神獣。俺は努めて冷静にその実の解説に乗り出した。

「これはエロースの実、この木の実を食べるとホルモンが活発化されて子供が出来やすくなる」

秘境の奥地に生えたとされるエロースの木の実である。これは他の性欲増進剤と違って神獣を含めたあらゆる種族に効果があった。

「聞いたところによると神獣にとって子供とは生涯において産まれるのは稀、一般的に子供など出来ないものだ。それゆえに子供を産んだ神獣は他から一目置かれる、だからこの実と神の雫とを交換してほしい」

俺の提案にツール・タイガーは思案しているようだ。やはり神獣といえども子を残せる魅力は抗いがたいものがあるらしい、額に皺をよせて考えている。

「言っておくけど俺達を殺して奪うというのは無しだ。その爪が俺

の喉を切り裂くより早くこの木の実を粉々にする自信がある」

トール・タイガーが危険な思考に陥らないよう予め釘を刺しておく。誇り高い神獣のことだからそんな真似はしないと思うが、欲というのは容易に聖者を悪へと引きずり込むことが出来る酒だ。用心するに越したことはない。

「……良いだろう」

永遠にも感じられたこの時間はトール・タイガーの言葉によって終わりを告げた。

「その雫を取ったらすぐにこの場を立ち去ること。そしてこのことを誰にも言わないこと、それらが条件だ」

「感謝する」

俺は一つ頷いてエロースの木の実を地面において1、2歩離れる。するとトール・タイガーは木の実を口で器用に銜えて立ち去った。

後に残されたのは俺とユキ、そして雫を集めている小瓶だけ。

「……怖かった」

杖を取り落とし、その場でへたり込むユキ。

「俺も怖かった」

「そういう割には堂々としているけど」

ユキがそう指摘する通り俺はしっかりと立っているが、内心は腰砕けになっておりプライドだけで支えられている状態だ。ユキが見ている中で変な格好は見せられない。

「私が見ているからと言って変な格好を付ける必要はないのに」

が、心を読むユキによって俺のやせ我慢はあっけなく崩れ去った。俺は羞恥と恐怖の2つの要因によってその場でひっくり返り、雫が満杯になるまで立ち上がれなかった。

エウレカ溪谷 後編（後書き）

ここから本番！ ……と、言いたいのですが、都合により次回の投稿は火曜の11日以降になる予定ですよね。
またスランプ再発かと相当怖いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709w/>

ゲームの世界で第二の人生！？

2011年10月9日10時22分発行